女子文壇

第壹卷第拾號

明治三十八年十月一日發行（毎月一回）
明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可



東京
女子文壇社發兌

電話本局六〇七番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

●十月一日より

染織競技會相催し並によせぎれ見切反物日々澤山取揃へ置候間御慰旁々御來店の程奉願上候

●懸賞裾模樣圖案優等の分御觀覽に供し候

東京日本橋

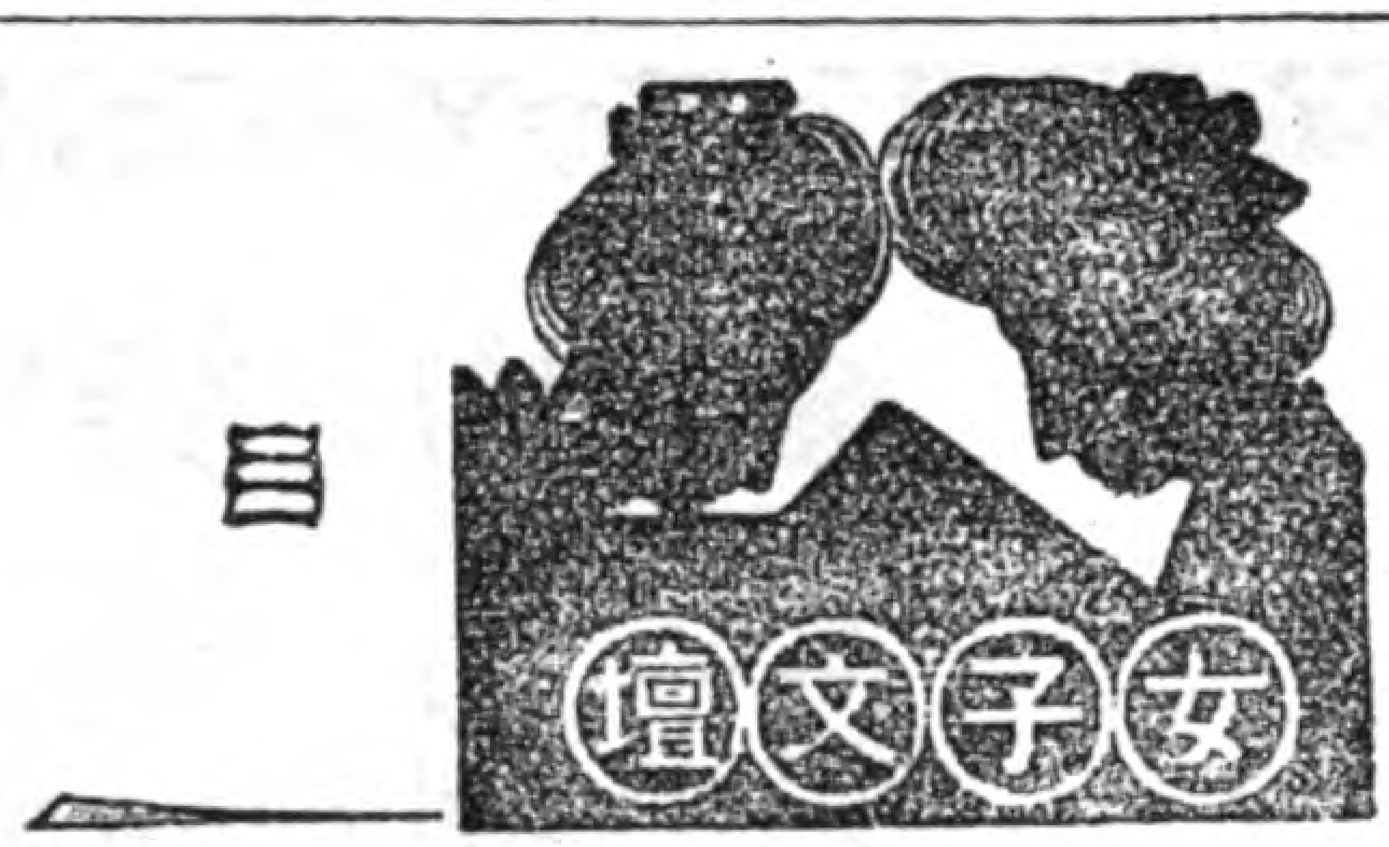
白木屋

呉服
洋服
店

電話本局（特）八一、八二、八三 四七五番

注意＝此目次を熟讀順次内容御閲覧を乞ふ

第一卷 第拾號 目次



▲勿見落＝此號より御待兼の鮮麗無比繪葉書（清方氏の新案）を添え又表紙も毎號改版す、口畫を兼たる者極美

前號は發行當日賣盡したり第拾號を以て代送す乞ふ諒せよ

百聞は一見に如かず

第七號目次（七月發行）

第九號

發行當日賣切



女子文壇



東京京橋區大鋸町十一
女子文壇社發行
（電話本局六〇七番）

毎月一回一日發行
價一册送料共
金拾壹錢

第三、七、八號の外は皆品切缺本なり

最寄書店になくば本社へ注文を乞ふ

第八號目次（八月發行）

美術口繪（第七號）

水彩畫▲夕立雲（石版十色刷）三宅克巳筆

彩色畫▲朝の散歩（同 六色刷）山中古洞筆

寫眞版

（都下有名女學校卒業生大判寫眞三枚（日本女子大學校、共立女子職業學校、女子商業の三大學校）アルマ、タデマ夫人の繪畫眞筆

短冊小杉文學博士、酒井伯爵夫人、大塚楠緒子筆○圖案畫○淺草觀音と仁王門○吾妻橋

美術口繪（第八號）

水彩畫▲夏の海邊（石版十色刷）三宅克巳筆

彩色畫▲綠蔭（同 六色刷）河合英忠筆

寫眞版

（泰西名畫村の少女 米國大統領夫人と其家庭 女學校卒業生（大判寫眞三枚）新潟縣女子師範校、東京裁縫女學校、立教女學校○赤堀氏割烹敎室

○短冊津輕伯、樺山伯夫人、東久世伯、大河内子夫人眞筆

○紀州元島、日光含滿ヶ淵同中禪寺湖、上野妙義山旭嶽、青森縣暗門瀧、北海道幾春別瀧

眞正無毒　皮膚艶美

クイーン白粉（おしろい）
クイーン水

本品は我同盟國より輸入せる最新最優の原料に貴重なる芳香を加へ精製したる他に比類なき化粧料なり



取次販賣は到る處の化粧品小間物店にあり品切れなれば直接に

本舖　東京日本橋新和泉町　三井花陽堂



高等化粧水 フイテルミン

定價一本金二十五錢　三個入七十五錢

本品は高等化粧料中の化粧品なれば貴婦人令嬢方の御常用に適し皮膚を艶美滑澤ならしむる効あり

改良すき油	柳糸香	メラセリン	一個五十錢
改良びん附	玉椿	コラキン	一本二十錢
改良水油	花かつら	チイトリシキン	一本四十錢
ふけ取香水	花たちばな	ラウリン	一本六十錢
あか取香油	春風油	アネモシン	一本四十錢
ひげ油	住の江	プロネミン	一個三十錢
うがひ水	しのゝめ	エオチン	一個三十錢
福原ねりおしろい			廿五錢

新製　旅行携帯用衛生歯磨　發賣

本品は高尚なるゴム器入一個三十錢

（總て美麗なる三個箱入に有之御進物用に適す取次は至る處に有之候）

▲衛生歯磨石鹼　大廿五錢　小十五錢

●洗浴化粧（花の露）エリノイン

は高尚なる芳香藥及び軟和劑の配伍しあれば朝夕の嗽及び洗浴に際し此の液をたらし用ゐれば如何なる水と雖ども皮膚肌色を損ずる患なく、色を白くし殺菌消毒の効力有る衛生上必要の逸品なり

定價一瓶入十錢



衛生材料　藥品器械　處方調劑

調製本舖

東京新橋出雲町角　電話新橋三二四番

福原資生堂

海上の月



三宅克己先生畫

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN



モリヤン姫の像

（佛國ゼアン、バプチスト、グリューズ氏筆）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

三輪田元道氏の家庭



夫人せい子　　母堂眞佐子
令孃良子　　令息元也

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN


（名家文壇欄參看）

英國美術院長ポインター氏筆

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



（佐多こと子君寄贈）

鹿兒島縣立高等女學校第一回卒業生及職員（明治卅八年）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



各女學校御用

美術造花材料各種

東京日本橋區横山町一ノ十六

天野卯兵衛商店

（電話特浪花一六四三番）

營業案内は往復葉書にて御申込み次第送呈仕り候

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

少年諸君　學の友御兄ちま兼の　少女諸君

總かな付などにも讀めます

成功之少年

第二號　十月一日

天下一品

開卷の花

少年記錄日記帖
習畫手本
習字手本
讀者諸君自畫繪葉書
誌友諸君の寫眞其他

東伏見宮殿下○リンコルンの少年時代◎成功談◎少年講談◎滑稽ばなし◎少年裁判所◎お伽小說其他狂句柳樽等

附錄

○和歌をつくる法
○俳句をつくる法
○漢詩をつくる法
○文章をつくる法
○新體詩を作る法
○手紙ーをかく法
○彩色畫をかく法

每月一回一日發行　定價九錢郵稅一錢　半年五十五錢一年一圓
東京神田千代田町　博報堂

小學生徒用　少年少女

學の友

每號きれいな繪切手卌枚は勉强をおうちへしらせる爲です

父兄の君よ子供の爲におためしあれ

◎見本郵券三錢

天下一品　大評判

每月一回　十月分九月廿日第八號發行

面白いおはなしがたくさん有ります

一冊貳錢五厘郵稅五厘一年郵稅共三十二錢

每號きれいな郵便切手貯金臺紙は皆樣方の末のお樂しみ

東京神田區千代田町二　博報堂

皇后陛下華族女學校へ賜はりし令旨を同校若林常猛先生謹書せられ每號習字手本を添ふ

十月十二號發行　見本一冊廿五錢

會長　岡部子爵　東京府教育會長

女子學術講義

教育、修身、國語、地理、歷史、理科、家政、英語、裁縫、作法、兒童心理、女子衛生、傷病應急、繪畫圖案、割烹、茶道、挿花

入會金廿錢　會費三ヶ月七十五錢◎六ヶ月壹圓五十錢一年分三圓全期一年半四圓五十錢◎規則進上ス但一年以上拂込は入會金免除

東京府教育會附屬　女子講學會
東京神田橋際



文藝畫報には何の爲に出づるか、聊か文界の落莫を賑はし、文壇に貢献する所あらんと欲してなり、故に堅きに失せず、軟きに偏せず**面白**き物は掲げ、**興味**あるは取る、而も文の到らざる所は**畫**を以て補ひ、畫の及ばざる所は文を以て之を述ぶ**文**と**畫**と相待て**文藝**の**趣味**を會得せしむるものは**本誌**なり。

（第壹卷第壹號……十一月三日發行）

△寄稿之大家▽

武島文學士○尾上文學士○巖谷小波君○田口掬汀君○石橋思案君○押川春浪君○泉鏡花君○德田秋聲君○井上秋劍君○岸上叱劍君○河合醉茗君○中內文學士○長谷川天溪君○松井柏軒君○松原廿三階堂君○大塚楠緒子君

畫家

水野年方君○齋藤松洲君○鏑木清方君○中村不折君○三宅克己君○山中古洞君○市川秀方女君○吉本雅美君其他當代知名畫伯

寫眞

美人風景澤山

內容之知せ

○滑稽**浮世めがね**は奇想天外より來る！

○短篇繪入**小說**及び脚本○名家○文林

○江戸文藝○社會界○演藝○流行○文粹○時評○色々

○投書歡迎**讀者文藝**（第一號〆切十月五日）

○俳句○川柳○狂歌○都々逸○端唄○地方俗謠○一口噺○端書文

○諸國名物談○見立三幅對……

○**投書箱**花柳界演藝界女學生界の穴さがし

懸賞寫眞募集

壹種 △諸國風俗風景
貳種 △最近新裝美人（藝妓○娼妓○女優○舞子等）
寫眞版

三種 △ポンチ畫（二寸 三寸）四枚以下一組

懸賞　第一種二種三種に別ち參圓以下十錢以上を呈す（キャビ子）

規定　手札形は掲載の本誌を呈す

定價	
壹册	金拾八錢
六册前金	壹圓
郵稅	金壹錢

發兌元　東京市神田區旅籠町壹丁目廿三番地　文光堂

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

高等女學通信教授

大日本淑女學會

▲本會は通信教授法を以て高等女學校程度の教育を授く

戰勝後女子教育を旺盛にすべしとは識者の齊しく唱ふる所也、本會之に鑑み通信教授法により『女學講義錄』を發行して、高等女學校程度の教育を普及せしめんとす。頃者女子教育の隆盛に伴ひ、女子都會遊學の危險日に加はる。暖かなる家庭のうち、父母の膝下に在りて智德を修養し圓滿なる淑女たらんとする人は、速に來りて本會の門に入らるべし

▲本會の講義は最も良好にして會費は極めて低廉なり

本會の修業年限は二ヶ年となし、之を四學期に分つ。主として文部省令により高等女學校全課程を修了せしむるは勿論、更に本邦家庭の事情に照し、一家の主婦として缺く可からざる實用の諸科を設く。蓋し學理と實地とを調和し、以て圓滿なる淑女を作るは本會究極の目的なり。學費最も低廉、都會一ヶ月の遊學費を以て優に全期を卒はることを得可し。

▲本會の講義錄は新式の教授法により丁寧懇切を主とす

本會の講義錄は米國の通信教授法を參酌せる最新式の者なり。講義錄は大版約三百頁の大冊子にして、平易の文字を以て最も丁寧懇切に講述す何人と雖も解し難き憂なきは本會の固く信ずる所なり。卷末雜錄欄を設け、諸大家の筆に成れる有趣有益の文字を掲ぐる外、毎號大附錄として家庭小說を連載す。是れ田口掬汀子が苦心を重ねたる純潔高雅の大作也

▲本會の講師は女子教育界の名流にして斯道の專門家也

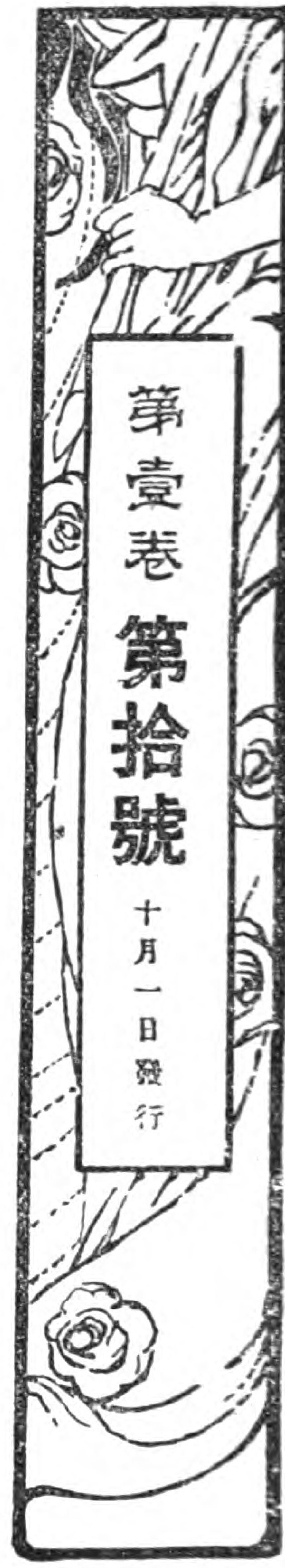
本會の講師は、日本女子大學校、華族女學校、女子高等師範學校、日本淑女學校に教鞭を執らるゝ斯道一流の名家にして、いづれも責任を帶びて親切なる講義を寄せらる。外に博士學士等の科外講師三十餘家あり。各學科中の樞要の部分を細說せるもの、又は女子に興味多き文學上の評論創作、家庭に關する事項の講述等にして毎號講義錄の附錄となす。

◎會員募集 十月卅日迄の入學者には入會金を全免す **目下入會の好機** **◎規則** 申込次第進呈 ◎

◎ 東京神田南甲賀町十（電話本局三千四番） **大日本淑女學會** ◎

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN





秋と讀書

讀書は時期を擇ばぬ、春夏秋冬何時でも書は讀むべしですが、只秋高く氣朗かなる時は、自然書物に親み易い、若し書物に遠ざかつて居ると云ふやうなら、此期を外さず大いにお讀みなさい、讀書萬卷、意自ら通ずで、書は多く讀み深く味ふに限る。然りながら、多く讀むと云つても濫讀は甚だ危險な結果を齎します、當代の文運駸々として日に進み、毎月の新刊書は幾百種を以て數ふるに到ると共に、古書も新書も又は貴き書物も珍しき書籍も、容易く得られる爲に、却つて讀むべき書を讀まず、讀まずして可なる書を讀むと云ふ弊害が生じます。古書の新刊に優るは言ふ迄もないが、復少しも新刊に眼を通さなければ新しい智識に後れる、孰かと云へば今の青年男女諸君は新刊に心醉して古書に遠ざかる方が多い、之れ憂ふべき現象で、文學ならば文學で、一わたり歴史的に時代を逐ふて、其當時の有名な著作は是非讀み味ふことにせねばならないです。而て一方では新刊の傑作も見ると云ふ風にしたならば、決して修養の點で人後には落ちませぬ、時や金風颯々、銀杏の落葉する頃、大いに書をお讀みなさい、諸嬢の力に應じたる書をお讀みなさい、擇んでお讀みなさい、味ふてお讀みなさい、興味を以てお讀みなさい。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

名家文壇

ゆきかひぶり（下）

佐々木信綱

舟あそびにいざなふ

たへがたき暑さにて候ふかな。さてこよひは家族打つれて、隅田川に納涼にものしたく、吾妻橋の邊より舟を仕立てゝ、折からの月を見がてら、ゆる〳〵とこきのぼり、梅若あたりに舟をつけて、隅田堤をそゞろありきし、また舟にてかへる心組にて候。親類の人にて、笛をよくする人まゐるべく候まゝ、川水にたゞよふうるはしき調の、御耳をすが〳〵しうするすべもあるべく、さるかたに興もふかゝるべく存せられ候。船は大きなるにて、船人共も事なれたるものにて候まゝ、御心やすく御出下されたく候かしこ。

かへしぶみ

仰の如くたへがたき暑さにて候を、納涼にとて、隅田川に御出の御催しに、御招き給はり、喜ばしく承り候。殊に御上手の、御笛の調も、承りうとの御事、流にうつる月をながめながら、うるはしき御物のねにきゝ入りつゝ、みをさかのぼること、思ひてすらすが〳〵しき心地いたし候を、まこと其境にありなば、いかばかりならむと思はれ候。幸ひ何のさしつかへもなく候まゝ、御しめしの時刻に必ず御たづねいたすべく、船の事などこま〳〵と御心添下され忝なく、わたくし元來憶病者に似ず、船だけはつよき方に候を、殊にさる大きなる御船と承れば、安心して伺ふべく、何も御まのあたりにてかしこ。

歸省せし友に

その後御便承らぬは、先日御出ありし時の御話の如く御歸省あそばされ候御事と存じ上候。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

忘れがたきは故里とこそ申し候を、殊に御もとには、その地に御兩親をはじめ　はらからもおはしまし候を、古里の山川、古里の人々の中にありて、此頃はいかに樂しき月日をおくりゐ給ふらむと思ふにつけても、かゝる時のみは、東京に生れて、歸るべき古里なき身つまらなく感ぜられ候。

ことに御地は、山川のながめうるはしく、都のちり通はぬ所ときゝ及び候を、このたへがたき暑さをもよそに、いかにながく／＼しき月日をおくりゐ給ふらむとうらやましく候。

くさ／＼御土産とて示し給ひし品々、いかに幼き君たちの喜び給ひけん。すこやかにおはします父母君み給ひし時の君の御喜び、また君をみ給ひし時の父母君の御喜び、いかなりけんと思ふにも、かねて承り候御家のあり様、あの御寫眞の御兩親のおもかげの、喜び給へる様、めにみゆるやうにて候。

さる樂しき境におはしては、長き暑中の休みもつかのまとおぼすらむを、こなたには日々暑さにくるしめらるゝのみにて、君おはさねば、親しき話相手もなく、ひとりさびしき月日をおくりて、はやく新しき學年の始まり、皆様に御目にかゝりたく、多くの君たちの、海水浴などよりもどり給へるが、見ちがふるばかり御かほ色黒み、すこやかになり給ひてゐならび給へるを見まつる年毎の例も思ひ出されて、たゞその日のみ心まちにまたれ候。

何子の君よりは御便あり候や。私方へは先日逗子よりくはしき御状下され、例の美しき御筆にて、細々と其御様子など御知らせ下され候。朝夕に海べにいでゝ美しきながめを示しみをられ候よし、御もとの御うはさなども記しあり候。

なほ、さる御境におはしては、日々何の御妨げもなく、御いそしみの事と存じあげ候。私は例のなまけて、未だ彼の宿題にも取かゝらず、空しく日をのみすぐしをり候。いかでをり／＼の御便まち上候。かしこ。

かへしぶみ

何かと取まぎれて御たよりおくれ申譯けなく候。御文忝くくりかへし拝見いたし候。

御話しいたし候如く、何日の朝東京を立ち、あくる日夕ぐれ歸宅いたし候。去年はさはりありて歸り申さず二年ぶりの事とて、兩親はじめ妹らめづらしがりて、その日よりたえまなく何くれの物語りに、やすむ間もなくくらしをり候。

まことにいつきて見てもなつかしきは古郷にて候。山も川も野も岡も、親しげにわれをむかへ、うからは申すに及ばず、近くの村人ら日々たづねまゐり、さま〴〵めづらしがりて東京のはなしをときかれ候。今はほと〳〵語りあきて、こまりをり候。兩親はじめみな〳〵丈夫にて、ことに末の妹の見ちがふるばかりに大きくなりたるには驚き申候。御心ぞへによりてとゝのへ歸りしかの人形はいたくめづらしがりて、未だに手をはなたず、切を母よりもらひきては、着物ぬうてくれと日々せまられてよわりをり候。

されば中々靜かに勉强いたすどころにてはなく、あれもこれもとたづさへまゐり候。書物など行李に入れしまゝにて、未だ一冊もよまず、さりとて早く上京も致しかね、これならば歸るのを少しにてもおそくすべきなりしにと、よしなき事おもひをり候。

さればまた父母のめぐみ深き言葉に、わが上など思ひてさま〴〵はげまし給ふ言葉きゝ候ごとに、いかで次の學年よりはふるひたちて、これまでの怠りをつぐのはんものと思ひたる事たび〳〵にて候。

仰の如く此地は都とほく候まゝ、幸ひさわがしき事などはなく、いかにも心やすく、朝夕に幼きものらつれて、野山をあそびをり候。いづれも一つ〳〵に幼き時の思ひ出となるものゝみにて、その昔をおもひ、御地にて御許樣たちと物學びせしこと思ひ、さて今の身を思ひては、たゞ〳〵わが身の上の夢ならずやとおもはるゝ事多く候。

何子樣よりは先日御手紙いたゞき候。やはりその海あそびのたのしき御おきふしのあり樣、くさ〴〵うけたまはり候。未だに御返事もさし上げざりしかば、この

文と共にさし上ぐべく存じをり候。なほあつさはげしき折柄を、折角御自愛あそばされ度祈り上候。かしこ。

朝顔みにいざなふ

日々たへがたきあつさ、御さはりもおはさぬ事、何よりと存じ上候。さておそまきにまきしまがきの朝顔のけさしも花さき出候によりて、ふと去年の御約束思ひいだし、直ちに人してきかせ候ところ、幸ひ例の入谷の朝顔今を見頃のよし、急の事とて、御都合もいかゞと存じ候へども、明早朝御供御ねがはれず候や。かへさは上野にまはりて、忍ばずの池の蓮の開くを見たく、例の御朝は、明日のみは早く御目さめあれかしと祈り上候。急ぎ御都合御伺まで。かしこ。

かへしぶみ

去年の御約束御忘れなく、露ちらぬ間の朝顔見むとの御誘ひうれしく存じ上候。幸ひさしつかへもなく候まゝ、是非御供いたすべく、例のとは此頃の朝おき御存じなき故と存じ候。御門とくひらきおき給はらばやと此方より申上置候。とりあへず御返しまで、かしこ。

國文評釋

文學士　中内蝶二

伊勢物語（三）

○小野の深雪の條

むかし水無瀬にかよひたまひし惟喬のみこ、例のかりにおはします御供に、馬のかみなるおきな、つかうまつれり。

（釋義）水無瀬　山城國乙訓郡に屬して、山崎の南に隣れり、類聚國史、三代實錄などに、水生とあるは、即ちこゝなり。こゝに、惟喬親王の別業ありしゆゑ、常に通ひたまひしなり○惟喬のみこ　惟喬親王は、文德天皇第一の皇子にて、御母は紀の靜子なり。承和十一年に生れたまひ、貞觀十四年七月に剃髮して、法名を算延と申したまへり○例のかりに云々　いつもの遊獵に出てたまふ其御供に、業平

從ひたてまつれりとなり○馬のかみ　右馬寮の長官にて、業平が官名なり。

日頃へて、宮にかへりたまひけり。御おくりして、とくいなむと思ふに、大御酒たまひ、祿たまはむとて、つかはさゞりけり。この馬の頭、こゝろもとながりて、

まくらとて草ひきむすぶこともせじ
秋の夜とだにたのまれなくに

とよみける。時はやよひのつごもりなりけり。みこ大とのごもらで、明かしたまひてけり。

〔釋義〕宮にかへり　京の宮に歸りたまひしなり○御おくりして　業平、親王を宮までお送り申してとなり○とくいなむと思ふに　いなむとは、去らむとの義にて、日數も經たることなれば、はやく去らむと思ふ所にとなり○大御酒たまひ、祿たまはむとて　大御酒とは、酒の敬稱にて、高貴の方御飲料の御酒との義、祿とは、褒美として當座の賜物○つかはさゞりけり　親王より御暇をつかはさぬとなり○こゝろもとながりて　業平は、いつ御暇の出ることかと、待ち遠ほしく思ひてとなり○まくらとて云々　旅人は、草を結びて枕とす、即ち、草枕とは、旅寐、または、かりそめの枕との意を含めり。されば、こゝに、まくらとて草ひきむすぶこともせじと云へるは、かりそめの枕もせじとの意、また云ひかへれば、今宵は、こゝにとまらじとの意にて秋の夜とだにたのまれなくにとは、秋の夜の長き頃ならば、まだしも、悠々として居らるれど、今は三月の短夜のことにて、さやうには、たのまれずとの意なり。この歌の意は、いかにとゞめ給ふとも、今宵は、かりそめの枕もとらじ、せめて秋の長夜の頃ならば、悠々としてもよけれど、今は、さやうなことを、たのみとすべき時節にあらざれば、かく引き留めたまふはつらし、はやく御暇を給はれかしとなり○やよひのつごもり　やよひとは、彌生にて、草木の日に茂りて、いよ〳〵生ひ重なるの義より、陰暦三月の異樣に用ふ。つごもりのことは、前號、吾妻下りの條に説きたり○大とのごもらで云々

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

貴人の寢ねたまふことを、大とのごもると云ふ。親王は、御寢殿にも入らせたまはて、物思ひに夜を明かしたまひたりとなり。

かくしつゝ、まうでつかうまつりけるを、思ひの外に、御髮おろさせたまひて、小野といふ所に、住みたまひけり。

(釋義)かくしつゝ云々　この樣にして、業平は、或は狩獵の御供に、或はまた酒宴の席に、參りて親王に仕へけるうちにとなり○思ひの外に云々　思ひがけもなく、親王は、頭の御髮を剃り落して、出家したまひたりとなり○小野　山城國、愛宕郡に在りて、京都を距ること三里、山間別に一天地をなせり。

む月にをがみ奉らむとて、まうでたるに、比叡の山のふもとなれば、雪いと高し。しひて御室にまうでゝ、をがみ奉るに、つれ〴〵と、いともの悲しくておはしましければ、やゝ久しくさむらひて、いにしへの事など思ひ出でゝ、聞えさせけり。

(釋義)む月　睦月にて、相むつみあふとの義より、舊曆正月の異稱に用ふ○をがみ奉らむとて　拜賀の禮を申しあげむとてなり○雪いと高し　深しといはずに、高しと云ひたるは、却て雪の積もりたる情をつよめたるなり○しひて御室にまうでゝ　雪の深き中を、おして歩みて、親王の御庵室に參りてとなり○つれ〴〵と云々　つれ〴〵とは、なすこともなく、物淋しくて居らせらるゝことにて、正月は、世の中浮きたちて忙しき時なるに、世を捨てたる御身の、淋しさうにおはすることの、哀れに悲しとなり○やゝ久しくさむらいて　餘程しばらくの間、お側に居てとなり○いにしへの事など云々　惟喬親王の、未だ出家したまはぬ昔、世に時めきし昔のことなど思ひ出して、業平申し上げて親王を慰めたてまつりたりとなり。

さても、さむらひてしがなとおもへど、おほやけ事どもありければ、えさむらはて、夕暮にかへるとて、

　わすれては夢かとぞおもふ思ひきや

雪ふみわけて　君を見むとは

とてなむ、泣く泣く來にける。

【釋義】さておさむらひてしがなとおもへど　今宵は此處に止まりて、夜もすがらお側に侍り、雪と共に積もる昔を語りあかして、親王の御つれ／＼を慰めばやと思へどゝなり○おほやけ事どもありければ云々　朝廷の公用ありて忙しければ、止まりて御側に侍ることも能はずとなり○夕暮にかへるとて　その日の暮れ方に、お暇を申して歸らむとするにのぞみとの意○わすれては云々　思ひきやとは、おもひがけなやとの義にて、この歌の意は、天皇の一の皇子にて、帝位にも即きたまふべき御身の、かく御樣かはりて、小野の山里の雪深き中におはするを見ては、まことに、思ひの外にて、夢にてはなきかと思ふとなり○泣く／＼來にける　御身の上の哀れさに、泣く／＼歸り來にけりとなり。

【評論】はじめ文德帝、第一の皇子惟喬親王を、儲位に定めたまはむとの御心なりしに、良房大臣の權威を憚りて、或は神に祈り、または秘法を修したまひしも、御本意を遂げたまはず、遂に良房の女なる、染殿の后の腹に生れたまひし、惟仁親王を太子に立てたまへり。生れて僅かに九ケ月、まことに前代未聞のことゝ稱す、惟喬親王の御憤りは如何ばかりぞや。これより日夜怏々として樂しみたまはず、交野水無瀨の御獵の御遊に、わづかに欝をやりたまふのみ。業平うまれ得て、多恨多情の血性男子なるが上に藤家の權勢にけおされて身は不遇の地位にあり。親王が當時の御有樣を見て、いかでか同情の涙に袖を絞らざるべき。常に御前に伺候して、御遊の興をたすけまゐらせたりしなり、親王も、また業平を二つなきものに思召して、水魚の交もたゞならざりしこと、大御酒たまひ、祿たまはむとて、遣はさゞりけりの一節を味ひなば、思ひなかばに過ぐるものあらむ。枕とて草ひきむすぶ云々の歌を見ても、業平が親王に對して、つゆ隔てなき誠情のあらはれたるを見ずや。親王この人と別れて、いかで樂しく夜を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

明かさむ。むかしの御身に引きかへて、心から慰めくるゝものもなく、うち解けて語ひたまふべきものもなきに、御わびしさは如何ばかりぞ。みておほとのでもらで明かしたまひけりの一句に至りては、そのかみを思ひたてまつるだに、涙まづ潸然として落つ、一句萬句を包むとは、まことに、これ等をさしていふべきなり。あはれ、憂き世とは誰が言ひし、かくて俗世にとゞまればこそ、身に憂きことの數も積もれ、うき世の外に遁れ出でなば、今の苦しみはなかるべしと、親王は、遂に鬱悶やるかたなくて、剃髪染衣の御姿となりたまへり。幽寂たる小野の庵室、管絃の音は磬鐃の響きとかはりて、多年恩顧のともがらさへ、來りて伺候するものもなし。ひとり業平舊盟を忘れず、草に埋れし徑踏みわけては、常に閑居に訪れて親王を慰めまつれり。む月以下の文章、親王が幽捿と、業平が忠誠とを寫して、哀怨悲痛、情思何ぞ切なるや。處は比叡山の麓、白雪皚々として、積むこと幾丈、雪いと高しの一句に思ひやらる。一歩一歩に脚を沒して、進みかねたる業平が困難果していかにぞや。しかも、熱情内に湧きては雪も物かは、風も物かは。しひて御室にまうでゝ見れば、思ひきや。さても世は年たつ春の初めつ方、貴きも賤しきも、ことほぎの酒酌みかはし、歌ひつ舞ひつ、さゞめき遊ぶ正月といふに、誰れ訪るゝものもなく、幽寂の境、たゞ獨り徒然におはせしならむとは。つれ〴〵と、いともの悲しくておはしければの一句、冗語を弄せずして、意のある所深遠。金殿玉樓の裡に、數多の男女に側かれたまひし昔のことまで思ひ出だされて、先づ出づるものは涙なり。僅に一句の文字によりてだに、かくも涙は禁じがたきに、まして、そのかみ、まのあたり御室にまうでし業平が感慨は、果して如何なりけむ。久しく侍ひて、古の事など思ひ出でゝ聞こえさせしも、げに道理なりけり。親王の御徒然なる樣を見るに忍びず、止まりて御側に侍らばやと思へど、公事身にしげくして、私情を恣にすることを得ざるを如何にせむ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

さても、さむらひてしがなとおもへど云々の文字、よく業平の胸中をうつし出だされたりと云ふべし。

かくても、夕暮れまで語り暮らし、御暇申して歸らむとするにのぞみ、わすれては夢かとぞおもふ云々と歌ひける、人生の哀情こゝに至りて亦きはまるといふべきなり。殊に結末の、泣く／＼きにけるの一句、全文をむすびて、最も力強し。

伊勢物語の中にても、この小野の深雪の一段は、殊に文章簡潔にして、意味深遠。情趣きはめて切にして、讀む人先づ涙の下るを覺えず、寒天雪を蹴つて幽居を訪ねし業平が赤誠、千歳の下、なほ人の心を感激せしむ。後世の學者、之を歎美したる詩歌文章きはめて多しと雖も、一々こゝに列擧せむも煩しければ、和歌二三首を錄するにとゞめむ。

花よりもあまりて匂ふ梅が香の　　契沖
　ふかき心ぞ遠くのこれる

雪わけし心のあとはうづもれて　　伴雄
　きえせぬものは仇名なりけり

みかりせし交野の春にひきかへて　　治堅
　かなしき雪のあとを見るかな

（伊勢物語完）

眞夏の夜の夢物語（上）

沙翁原劇梗概　　みづの環一

（一）

むかし、アゼンスの市に、ジーソイスと呼べる公のおはしき、この公、武勇いと勝れ給ひつるが上に、仁愛に富み給ひしかば、みな／＼アゼンス公と呼びて、尊敬し、信頼する事一方ならず、いづれも其の徳を讃えける。さてあの時、この殿の前に一つの訴へ出でたり、そはエグュースと呼べる老翁、その娘ヘルミヤが父が嫁ぐべく命ぜるデメトリヤスといふ貴族と夫婦となるを肯ぜずして、飽く迄、己れの愛人リサンダと云ふに愛着して、なか／＼に父の言葉を聞かざれば、この殿に教訓を乞ふとにありき。

蓋し古のアゼンスには一ツの法律ありて、凡そ父たるものは己れの好む男に娘を嫁がす可く絶對の權力を有して、娘もしそを否む樣の事もあらば、娘を死に歸する權利もあり、さりながら親子の至情、此の殘忍な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

る法律は其の實、決行する事とてはあらざりしも、心弱き莟の處女はみなその恐るべき宣告をおそれて、ひたぶるに父の命のまゝに從ひける。

さりとは云へ、このヘルミヤのみはその決心のいと固きものありき。ヘルミヤは勇み進んて辯明しぬ。その言ひ草はデメトリヤスは既に、己れと最も親しき友なるヘレナと分ちがたき情交の間にして又ヘレナが溺れんばかりにデメトリヤスに焦がれつゝある故、妾がもしもデメトリヤスと夫婦にてもならば、それこそ、お友達の顏へ泥を塗る人面獸心と。この氣高くも亦力ある辯明には、流石頑固の父エグュースも手のつけ様も無く、さりとて、アゼンス公は『お父さんはお前には神樣と同じ事、早くお父さんの命令に從ふが身の爲めだぞ』と、懇に戒め給へどもヘルミヤが決心は搖ぐ可くも見えざりき。


英國美術院長ポインター氏

流石に武勇のほまれ類ひ無く、かつては隣國の王をも捕虜にまてし給ひしアゼンス公もその國の法律は如何ともなすべからず、ヘルミヤが哀情は不憫と思ぼせども遂に殿は『それなら四日間の猶豫を與へる、よつく考へて見るがよい、もしお前がそれでもデメトリヤスに嫁ぐのが嫌だと云へば、直に死刑を申し渡すぞ』と。

かくてヘルミヤは殿の御前を罷り下るや、直にその戀人なるリサンダーを訪づれて、細々とけふのよしを語り、『妾が運命戀ひしい貴郎を棄てゝデメトリヤスに嫁ぐか、さもなくば、四日間にこの生命は無きものとなる二ツに一ツ、どうしたらまア可いんてせうねエ」とすがり寄る聲さへ涙聲。

リサンダーもこれらの接迫せる己が戀人の悲しき物語を聞きては、誠に心も亂れんばかりなり。『さアねエ、

困ッたなア」としばし彼れは沈思せしが、やがて思ひ出せるは、アゼンスを數里はなれたる彼れが叔母が許なり、蓋し、このアゼンスの法律は、市の境界以外には効力を及ぼさぬが故に、こゝにヘルミヤを居らさば必然殘酷な法律に鞭うたるゝ氣遣は無いと敏くも思ひめぐらしつ。「それじやね夜中に竊と自家を逃げ出し、わたしと一所にあの叔母さんの家へ行かう。そして其處で結婚して、氣樂に暮そうね、それてはあの町端の森ねエ、あのけしきの可い心地の可い森の中で出會ふのだよ」。

　このリサンダーが發明には、ヘルミヤも小躍りせんばかりに喜びて從ひ、而して、かれはこの逃亡の事は、親しき〳〵ヘレナの外には何人にも告げざりき。戀する處女は愚なるならひ、ヘレナも其の友の秘密を漏らすは罪とは知りつゝもこれを己が戀人デメトリヤスに告げぬ。而して其の後にて、つく〴〵思へらく、自分に不信なデメトリヤスは必然ヘルミヤを追つかけて行くに違い無い、そうすれば自分も一所に行つてやろうと。

　リサンダーとヘルミヤが出會ふてふ森は、小さき面白き妖魔共の寄りつどふと傳へられるゝ所なりき。

（二）

矮人と云ふはこのフエアリー共の王にして、チタニアと云ふはその王妃にぞありける。抑この王と王妃とは毎夜、眞夜中にこの森の中にて幾千かの從屬共を集めて、宴會の席を開くと云ふ。

　この夜はこの森の精の小さき王と女王とは、双方氣分すぐれず、喧ましき爭論ありき。眞夏の夜の澄み渡りて笑顏なる月の光にも浮かれず。双方負けず、劣らずの大爭論に、フエアリー共は恐れ慄へて、いづれも木の葉の間などへ姿を隠し了りぬ。

　この爭論の原因はと云へば、チタニヤがその友なりし人の病死するや、その可愛き子供をその乳母より盗みて森へつれ歸りつるをオベロンはひたぶるにそを己が小姓に懇望せるを女王がすげ無く否めるに基きぬ

　戀に狂へる若き男、若き女が、この森へ會すなる夜も早や更けて丑三時刻チタニヤはその侍女共つれて散歩しけるが、折しも出會へるオベロン小仙王、これも侍臣の幾多召し具したり。

「オイ、傲慢面のチタニア變ッた事もないかい」と仙王は先づ戰端を開けば、女王もさる者「何、忌々しいオベロン、何かそんなにそうなの？」

「何だい、何故そんなに、亭主の鼻を折る眞似をするんだ、早く、己れにお前の子供を呉れと云ふのだ。」
「まア靜かになさいよねエ、貴郞の王國全躰と妾の子供と交換へるのも眞平ですよ」。
「何!? 勝手にしろ、今に覺えて居ろ、己れが夜明迄に必然お前を酷い目に遇はせてやるから」。
早速、オベロンは彼れの最も御氣に入りのパックを呼びにやりぬ。

　パックとは何者ぞ。彼れは又の名をロービン、グードフエローと呼びて、最も怜悧にして、惡智慧あり、かつ滑稽の才にも富みたれば、その近在の村々にては可笑しき遊戲の折などにはパックを招待するが常なりこのパックは手酪を採り、スキンミルク製造に妙を得たるはよけれども誠に惡戲者にて、消えたり、出たり眼にも止まらぬばかりの小さき身躰の運用自在、ある時は、村人等のつどひて、快活に酒傾けつゝある時は、其盃の中に、古池の蛙の如くに飛び込み、或は老媼のたま〳〵口うるほしに麥酒を飮まんとするとき、その唇のあたりにぶら下りて、麥酒のこぼれて飮まさぬやうな惡戲をなし、時には年長けたる夫人の悲しき、沈める物語に村人等一心に耳傾けつゝある時、竊と夫人の腰打かけたる三脚椅子をとり除けて、熱心に語れる夫人の測らずドタリンと轉び落つる、これはと皆々笑ひ興ずるを見て樂しむなど、その惡戲、神出鬼沒、身躰の運用、ほとんど端倪す可からず。

「パックか。近う寄れ、其方にな、一つ賴がある」オベロン玉はこの小さき妖魔に語りいづ「他事でもないが、それよく娘共が亂意の戀とか云ふ花がある、あれを己れに採つて來い、そのな、紫の花の汁を眠ッてる奴の瞼の中へ落し込むと、其奴が眼が醒めると、その醒めた時、一番初に見たものが好きになる、己れは其花汁を今チタニヤが寢て居るから、その瞼の中へ落し込まうと思ふとるのだ。そうするとな、彼女が起きたら、その時見たものは何でも好きで堪らなくなる、獅子であらうが、熊であらうが、猿であらうが、なんでも來いで惚として堪らなくなるんだよ、己れはその間にあの可愛い子供を奪い取るんだ。」

　性來惡戲好きなるパックはこの命令を承はりて、小躍りせんばかりに打ちよろこび、一走りに走りいでゝその花をたづねにゆきぬ。その後にてオベロンは森に入り來るデメトリヤスとヘレナとの姿を認めしが彼れは、デメトリヤスがその昔よりの愛人、己れの眞

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

實の切なる〳〵愛をそゝぐヘレナをいとつれなく擧動ひ、ヘレナは辛うじてデメトリヤスの後追ふてゆくを打見たり。

(三)

元來、この小さき妖魔王は眞の戀に焦がれつゝある若き人には深かき同情を有するが性なり。さるからにかれはこのヘレナをもいと可愛想に思ひて、そのデメトリヤスに愛されたる當時、月明るき夜、この森の幽邃に、デメトリヤスと手携へて逍遙せる時と、今の有樣とを比較べて、オベロンは感慨無限なり。パックが小さき紫花携へてかへり來るや、オベロンは『お歸りかその花の一部を別にしてな――話をしなけりや、分らないが、――ある雅しいアゼンスの貴女が一人の傲慢な男に戀して居る、所が、この男の方では、妙に鼻であしらつて、そのレデーを輕蔑する、たしか、今この森へ、レデーが、その男を追つかけて來て居る筈だから、もしお前がその男が寐てる所を見付けたらその花の汁をその若い男の瞼の中へ流し込むんだよ。そすりや、必然、その男が眼が醒めるとその近傍に傍ふて居る可憐な女を一番初めに見る、そして打つて變つて非常に愛する樣になるに違いないから、何、その男はアゼンスの服裝をして居るから直ぐ解る。』

『委細承知仕りました、見ン事、行つてのけますから』とパックは御前を退がりて。走りゆけば、オベロンは『モウ寐る時刻に違ひ無い』とチタニヤが赴ける彼女の別莊を追ひゆきぬ、この別莊と云ふは、その森中の小さき堤にて、麝香草さくら草、美しきすみれ草などやさしく生ひてその上を忍冬草、麝香ばら、野ばらのたぐい天幕の如くに掩へり。女王チタニヤは夜半こゝに來りて安き眠をむさぼるが常なり、妖魔だけにその寢衣と云ふもいと奇妙しいものにて蛇の泑藥皮にて、よしやそがあまり輕少なるものとは云へ、この小仙女王を包むにはあまりあるものなりき。

オベロン、その別莊の側へに立聞きすれば、今やチタニヤは眠らんとしてその〳〵彼女の侍女なる妖魔共に命令言しつゝありしにぞありける。『あのね、誰々はね、薔薇の芽を手入れするのだよ、又誰々はあのそれ喧ましく鳴くやかまし屋の梟を氣つけるのだよ、だがね、それより初めに皆そろつて妾を寢かす歌を謳ふのだよ。』

やがて多くの精ども黄な聲、張りあげて、歌ひ初めぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

「二枚舌の飛紋蛇
たくさん刺あるはりねずみ、
お前なんども見えるなよ。
いもりや、そしてめくら蟲、
お前なんどは惡事すな。
仙女王のおそばへは、
決して近く寄りくるな。
鶯、歌へよ、おもりうた、
お前の涼しいきれいな聲て。
寝ン〳〵や、寝ーな、寝ン〳〵や、寝ーな、

妖魔共妙なる聲にて雅しき子守歌を歌へば、無邪氣なる王妃はすや〳〵と眠りける。侍女どももやがて、各々その仰せ付けられし事をなすため出てゆき、オベロンは徐々とチタニヤが側に寄りて、かねて携へたる紫花の戀藥の一滴、二滴、彼女が瞼へと流し込みける。美はしき君、目醒むとき、戀の淵へと沈まむと。

（次號完結）

○選評餘談（四）

櫻井先生不快に就き本號に限り休みます

賴山陽十二媛絶句評釋（三）

福井學圃

常盤

垂髫從走足胼胝。懷裏尤憐泣凍兒。雪底鷹雛爪如鐵。養レ渠它日擊二梟鴟一。

○垂髫は小兒のたれ髮。○胼胝はひゞあかぎれなり。○懷裏の兒は牛若即ち義經をいふ。雪底の鷹雛は上の懷裏の兒に比す。○梟鴟は平氏を指していふ。

大意は、常盤が三兒を從へて能く雪中彷徨の艱苦を忍び、鷹の雛なる義經を養ひて復讐を得しをいふ。義朝の敗るゝや、常盤は今若、乙若、牛若の三兒を携へて、大和國龍門里に匿れたり。小兒が母に從び走りて足もひゞだらけなるが、尤も憐むべきは懷中に呱々として凍に泣く兒なり、しかし此の雪中にある鷹雛の爪は堅きこと鐵の如く、かれを養ひて他日梟鴟なる平氏を擊ち亡ぼさしたるとなり。さて常盤が清盛の意に從ひしは、己れの操を棄てゝ兒を全うし得たる功あれども、其の兒に義經の如き英雄の出てしは偶然の事なり。また清盛が寵衰へたる後は、一條大藏卿長成に嫁し

たるにあらずや、節操の點に於ては零なり。さるを山陽の論及せざりしは、回護の意なりしならん。梁川星巖が常盤孤を抱く圖に題する詩は、更に一語の常盤に及ぶことなく、たゞ義經をのみ詠じたり。

雪灑笠檐風卷袂。呱々索レ乳若爲情。他年鐵拐峯頭險。叱ニ咤三軍一是此聲。

余が常盤に於て取らんとするは、母を助けん爲め、兒を携へて六波羅に出でたる心根なり。

鞆繪

料峭東風凍ニ鐵鱗一。冰肌濺レ血涙粧新。粟津有下勝ニ烏江一處上。從騎中猶著美人。

料峭は寒きなり。鐵鱗は鎧の札にて鱗は形容していひしなり。冰肌は美人の淸き肌を形容したるなるが、此處にては冰の字前句に應じて最も妙なり、粟津は義仲が敗死せし所、烏江は項羽が敗死せし所なり、項羽は虞美人を幸して常に軍中に從へゆき、且つ常に騅といふ名馬に騎せり、垓下にて漢軍の圍む所となり、ある夜漢軍の四面皆な楚歌するを聞き起ちて帳中に飲み、悲みて詩をつくりて曰く、力拔レ山兮氣蓋レ世。時不レ利兮騅不レ逝。騅不レ逝兮可ニ奈何一。虞兮虞兮奈レ若何と歌ふこと數闋、美人之を和せしかば、項羽涙をはらはらと流し、左右のものも皆泣きたりとぞ。

大意は、鞆繪の武勇ありて血戰せしさまを敍し義仲がかゝる美人を從騎中に加へしは項羽に勝れるをいふ。義仲の戰ひ敗るゝや、鞆繪を諭して辭し去らしめて曰く、死に臨みて妾を携ふ人我を何と謂はんと、鞆繪共に死なんことを請ひしも、義仲之を強ひしかば、泣て辭し去れり。時は元曆元年の正月なれば、料峭として寒き東風は鐵鎧を凍らし、冰の如き美人の肌には戰血をそゝぎて、新たに別離に泣きし涙は乾かず、しかし義仲は項羽に勝る處あり、そは義仲項羽ともに同じく軍中に美人を從へしも、虞美人は何の役にも立たざりしに、鞆繪は從騎中にありて天晴れなる働きをなしたりとなり。かく和漢の事を對擧するは、山陽が慣用手段と知るべし。

▲閨秀畫家ノーリス孃　米國の女性畫家ノーリス孃は曩に來朝せる米國貴賓アリス孃一行の殘留者にして目下京都に滯在して專ら日本繪畫を研究しつゝあるが、孃は米國著名の畫家ホイスラー氏の高弟にて、現に紐育ウヰツト、ワオース大學美術部校長の職に在り其尤も得技とする所は肖像畫にして其携帶中の作品に一萬圓と稱さるゝ者あり孃は京都滯在中同地の畫家竹内栖鳳鹿子木孟郎の兩氏を訪ひ種々畫談を試み日本畫に對しては大に讚賞し居れるも只だ遠近の調はざるを惜み居れり、孃は日本美術研究に就て非常の熱心を有し何處へ行けば多くの日本名畫を見るを得べきや抔質問し、本願寺の枳殼邸を一覧せり孃は向ふ一ケ年間日本に滯在の見込みなりと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

家庭

育兒法（若き奥樣への注意）

紐育　エメリン、クーリッヂ

一　幼兒の惡習慣

習慣は第二の天性と申しますが、成るべく惡い習慣に染まないやうに、立派な天性を備へた人間に我兒を育て上げる上に就いて、先づ注意すべきは、嬰兒の時分の育て方如何にあるのです。

嬰兒が生れて、最も早く覺える習慣は、泣くといふことです。もとより言葉を發することも知らない時分は、泣くより外はない。これあるが爲に、肺臟の作用をも助けるのであるが、少しづゝ物心がつくに隨つては、多少其意思を、面や躰の動作の上に表はすことも出來るのであるから、泣くといふ習慣は、可成はやく廢さすやうに心掛けなければならないのです。

小兒は、何も悲しいばかりて泣くのではない。我心に不滿を感ずる總ての場合に泣くといふことが濫用せらるゝのであるから、この惡慣習は、決して增長させないやうに、嫩芽のうちに摘み去つて了はなければなりません。



幼兒の眼の前に、何か持つて行つて見せると、先づそれを我手に取るといふことを覺えます。そして、それを手で搖り始めるのです。或はまた、坐上に在る物を目がけて、匍ひ寄るのもあります。幼兒は、是等の品物に對して、何等の趣味をも持つてゐるのではない。さほど、それが欲しいと云ふ樣子もないのてあるが、間もなく其れに就いて趣味を感じて來るものです。持ち馴れた玩品などを見ると、嬉しさうに手に取つて弄ぶものです。そして、その品物が欲しいと思ふ時には、何時でも泣いて見せるのです。

同じ泣いて見せるのでも、この時分のは、言葉を發することも知らない、たゞ、欲しいといふ意味をあらはす爲に泣くので、別段惡意も何もあつたものではな

いが、これが増長すると、泣いて嚇すのだからたまらない。

前にも述べた通り、生れたての嬰兒が聲を揚げて泣くのは、肺臟の發達を助ける爲めであるから、あまり泣かないのも困るけれど、また、泣かせ過ぎるのも困ります。幼兒が泣き出した時には、その儘打棄つて置くのはよくない。少し日數の經つた小兒が、我儘の爲めに泣くのは、例外であるけれど、さもないのは、よく〳〵、いたはりて、さま〴〵に慰めなだめて機嫌をとり、あまり酷く泣かせないやうにしなければなりません。

我儘て泣いてゐるのと、何處か苦しい爲に泣いてゐるのとは、その母親たるものが、よく氣をつけてゐれば、直ぐに知れるものです。種々に慰めても、なほ泣き止まない時には、十分幼兒の躰を撿めて、衣服の工合が惡いのではないか、帶が締まり過ぎてゐるのではないか、或は、裀褓が汚れてゐるのではないかと、殘る處なく心を配つて、それに應ずるだけのことをしてやらなければなりません。云ふまでもないことですが裀褓を淸潔にして、初中終取りかへてやるといふことは、甚だ必要てす。

殊に、幼兒は、一つ處に永く居るのを嫌がります。直ぐに勞びれて泣き出しますから、或は抱ッこをして運動さすとか、或は場所を變へて寢かすとか、つまり變化といふことが肝腎て、それからまた、時々淸水の飲料を少許與へるが可いのです。

この様にして、十分に機嫌の好くなるやうになつたならば、もう一人て打棄つて置いても大丈夫です、幼兒はやがて自分で泣き止みますから。（次號完結）

エメリン、クーリッヂ氏は、米國紐育小兒科病院の院主にて斯道には最も經驗のある人てす。これは、近著の家庭雜誌から譯しました。

▲理想の家庭（九號の續）

池田朝村

五　結婚後に於ける夫婦間の交際

前にも述べました通り、人は他所目て見て居る時は甚だ立派の様に見えますが、近く寄て一緒に生活して見ると、案外に缺點の多いものてありますから、其缺點を一々冷かなる理性て判斷して其罪を責めたり、又、妻は夫に從ふべき義務が有るとか、夫は妻を愛せんならんとか、一々夫たり妻たる者の行爲を律して行く様

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ては、迚も溫かな、愉快な家庭は作らるべきものではありません。
又、意志のみ強くて、自己の爲さんと欲することを遂行せん爲には、毫も配者の苦痛損害を顧みんと言ふ樣な、同情の念に乏しい樣では、是亦幸福な家庭を作ることは出來ません。
併し、唯情の赴く處を恣にして、毫も之を判斷し抑制することがなかつたら、反つて夫婦間は衝突の絶間がなく、不愉快な、不幸なる結果を見る樣になります。之に反して、夫は妻の缺點を認容し、妻は夫の陷缺を認容し、其默過し得ざる場合には、徐ろに之を諭して其非を悟らしめ、夫は妻を信じ、妻は夫を慕ひ、共に樂み、共に苦み、共に喜び、共に悲み、醜なる感情の總てを抑制し、善なる感情の總を以て、相共に扶け、相共に慰めて行たなら一家は常に駘蕩たる春の光を以て滿され、人間一生の辛き務も、安慰と愉快の中に、完全に果すことが出來るであろうと思ひます　猶此心懸を以て、兒孫より下女下男に迄及ぼして行たなら、一家は實に、現實の極樂、現實の天堂となるであろうと思ひます。



理性と意志とを以て調和されたる、善美の感情を以て夫婦間の交際を保ち一家を經營する、是即ち吾人が將來構成せんとする家庭に對しての理想で有りまして、かゝる家庭こそ實に一般の理想とすべき圓滿なる家庭と稱することを得るであろうと思ひます。
斯樣なことは、誠に陳腐極まつた說で、皆孃方も嘸かし御退屈の事と存じますが、併し知て居る斗りで、實際に行ふことが出來んては何の役にも立ちません。
是迄は、過渡時代に在た爲か、餘り家庭上の問題に注意する人がなく、其の爲に殆んど不完全な家庭を以て滿されて居る樣な有樣で有りましたが、文運進歩もし、男女敎育も漸く盛に成り來つた今日に於ては、家庭問題は大に注意を拂はねばならん、重要なる事柄で有ると思ひますから、薄識をも顧みず、諸孃の御一考に供へた譯で有ります。一家は實に一國の基礎で有りまして、不完全な家庭に在る者は、決して自己の職責を完全に遂行することが出來ず、又不完全な家庭から、決して立派な英傑を出すことは出來ませんから、一家の治亂は、直接國家に影響するのであります。戰勝の榮

譽を擔ふて、一層列國から重要視せらるゝに到つた帝國の萬全を計る爲には、家庭問題は實に重要なる研究課目の一で有ろうと思ひます。（完）

▲家庭笑話

小式部

作り話ではありません、實際に見聞したこと！
笑ひ草となり、また數へ草ともなる滑稽な話！

三　姫樣のお料理

番町あたりに住む、立派なお邸の華族の姫樣、一日學校から歸ると、すぐ阿爨の部屋へ駈けて行つて、

姫「鍋や、今日は、わたし、自分でお料理をして見るんだから、お前、品物を揃へておくれ」

鍋「御冗談を……オヤ、オヤ、お姫さま、那麼ところへ、お出あそばしては、お召物がだいなしになります。」

姫「いゝから、お前、はやく品物を……」

お鍋は、魂消た顏容て、

鍋「デハ、眞實に……姫樣は、アノ、お料理のことを御存じてゐらッしゃいますか」

姫樣は、得意の色を面に浮べて、

姫「お前なんか、それだから困るんですよ。學校へ行つて御覧、割烹と云ッて、お料理の科があるから」

鍋「へえエ、學校で、アノ、お料理を……鍋は、はじめて伺いました。お姫樣方が、お料理の御稽古まで遊ばすとは……へえエ」

姫「そんな事を云ッてゐないで、はやく、品物を揃へて頂戴よ。わたし、ライスカレーを、こさへて見せるから」

鍋「ライスカレー……へえエ、變な名のお料理でございますね。料は、何と何を？」

姫「さうねエ、先づカレーがなくッちや」

鍋「カレでムいますか。先刻魚屋が參りまして、今日は、生憎しけて、鯛の外には、何もないと申しますことて……」

姫「おさかなの、鰈ぢやないのよ」

鍋「デハ？」

姫「瓶に入ッてゐる、辛い粉のことよ」

鍋「デハ、胡椒のやうなものでムいますか」

姫「まアそんなものなの」

鍋「デハ、西洋のものでムいませう」

姫「そりや、さうですとも、西洋料理に用いるんだも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

の」

鍋『デハ、お出入の八百屋なんぞは、持つてはゐますまいと存じますが」

姫『馬鹿だねエ、お前は！出入の八百屋なんぞにカレーがあるものか」

鍋『デハ、何方から取り寄せませう」

姫『アレハ、學校にあるものなのよ」

四　竹篦返し

ある小學校の教師、算術の出來ない一人の生徒を、滿座の中で戒めてやらうと思つて、

教師『あなた、これくらゐの問題を解くことが出來ないやうでは、困りますねエ。亞米利加のワシントンと云ふ方は、あなたの年頃には、もう測量師になつてゐたといひます。耻かしいとは思ひませんか。

一本參らしたから、生徒は赤面するかと思ひの外、その聲の終らぬうち、即時に立ち上つて、

生徒『だッて、先生……そのワシントンと云ふ方は、先生くらゐの年頃には、もう、亞米利加の大統領になつてゐたと云ひます。先生も、お耻かしくはありませんか」



と竹篦返し。教師は、却て赤面して、しばらくは、續く言葉もなかつた。

新刊紹介

▲模範教育我家の新家庭（竹島茂郎著）。立脚地を教育學の上に於て家庭の組織を論じ大綱より細目に渉り主人、父母、家族、婢僕、家具什器の扱ひ方、子供の養育、團欒、衣食睡眠、賞罰、結婚、哺育、青年期、貯蓄、慈善の事に到る迄、最も懇切に編纂したる書にして苟くも新しき家庭を作らんとするものには、参考として一讀せざるべからざる良書なり、和製本綴、優美にして挿繪には寫眞版數葉を挿めり（定價六十錢木石町三丁目寶文舘）

▲福島縣婦人（菊政政雄編述）。篤志看護婦人會、愛國婦人會、各地婦人會、各種學校等の福島縣に於ける婦人の活動を最も詳しく編述せる書にて卷頭にはおもだちたる數十人の寫眞を添へ地方の出版としては體裁好き書なり（定價二十五錢福島縣福島町福島民友社）



論　文

日本女子大學敎授　鹽井文學士選

人

○理想の地

豐後國竹田町　藤原せん子

山紫水明の邊人煙稀なる所、罪惡の及ばざる地、是れ吾人が生を樂しみ死を樂むの佳境にして、吾人が理想の地なり、試みに潺湲たる細流に臨み、柱を岩石に托し、軒を山木に結び、唯形ばかりの草舍を營み、陶然として其內に起臥せんか、日扶桑を出づれば、雲は蒼梧に飛び、雲山嶺を蔽へば、霧は屋內に降る。夕には明月玉を沈め、朝には淸風衣を吹く、雨降れば簷溜窓前に滴り、暴風至れば大木背後に鳴る。鳥啼き獸走りて、境更に幽に、水流れ花落ちて、心愈々靜かに。山に採りて美なるは茹ふ可く、流れに釣りて鮮なるは味ふべし。寢ねては蝴蝶の夢を結び、醒めては一盃の濁酒に醉ひ、日に目を怡ばし心を慰め、以て盡くるに歸せば、如何に愉快なることとならむ。如何に靜閑なることとならむ。身罪惡の中に在らざれば、心桎梏を恐るゝを要せず。富貴にあらざれば、之を失ふを恐れず。浮世を以て目的とせざれば、生死を意とするに足らず。望む所なく企つる所なければ、失望失敗の悲を招くことなし。心虛しく神誠にして邪念を懷くことなく、僞善を挾むことなく、不義を爲すことを知らず。窅然として死灰の如く、隮然として槁木の如きも之を撹醒するものを要せざる也。日に天使を待ち羽化登仙せんとす。嗚呼此境、吾人が理想の地なり。世に望むべきものは、げに此の理想の地なる哉。

（雨評）少さき方丈記を讀む心地す。人とす。

秀逸

○嘲罵

埼玉縣　增田愛子

あゝ嘲罵、こはわが最も好むところ、天下一日も嘲罵の聲なかるべからずとは、是れわが常に口にする所なり。而かも、われを以て故らに奇を好むものとなすは、

甚だ酷なり。爾かく嘲罵を好むもの、また大に故あればなり。國の混亂を極めたるの時にあたり、叫呼以て救はんとするもの、あに嘲罵ならずして何ぞや。或は世を、或は國を、或は人を、腐敗、墮落てふ汚名の淵より救ふもの、亦みな嘲罵あるが爲めのみ。あゝ嘲罵、是れ或は豫言の聲となり、愛國の聲となり、やがて救世の叫たり、改革の傳導たり。語を繰り返す、天下一日も嘲罵の聲なかるべからずと。幵はまこと嘲罵が社會進歩の一原動力にして、嘲罵なきときが、實に亡國の慘狀に陷るはじめなりといふも、敢て過言ならざるを知ればなり。

しかれども、記せよ、其の正義の聲となり、愛國の叫びとなり、改革の傳導となる可きものは、ひたすら天下の爲め、國家のため、公衆の爲に、熱誠以て叫ぶ所の嘲罵なることを。されば、今の世のそれの多くの如く、只私情私怨の爲め、徒らに毒筆を弄し、毒舌を極めて人を罵り、世を嘲けるが如きは、何の取る所かある。斯の如きの嘲罵は、われらの大に惡む所。そは只虛言妄語に過ぎずして、やがて賣國の叫びたるの憂ひあればなり。

（雨評）先づ議論文の姿をえたり。



女學生風俗（其十九）

○偶見數則

仙臺　白蓮子

○近時女學生間、海老茶袴を或は短かく、或は地を引くばかりに穿きて、得々濶歩するを見る。其の長きは溫順を裝ふものならんも、却て締りなく、殊更らしくて、その人の心も見え透くが如し。又短きは一見活潑の如くなれ共、直ちに御轉婆の評を免かれず。例へ長刀、テニスのチャンピオンを以て誇らんも、白き脛あらはに、足駄などにて、大股に刻み行く樣は、宛然女劍士か、又は衣骭に至る的の男書生を模するかとも見えて、餘所目にも可笑しき次第なり。斯くの如きは、女子の特性を辨へざるの至す所にして、優美を缺き、柔順溫和の天性に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

浮りたるものなり。靴を用ふる時は、短きも良けれ、常には程よきこそ、見て離はあらじかし。

○女學生にして、よく教師の陰口や、善からぬ噂をなすものありとか。こは男女を通じてある弊なれども、殊に女は御饒舌との評もあれば、殊更愼しむべきなるに、隨分思ひ切りたる事を言ふものさへありといふ。我が師の陰口をきけば、己れに如何なる益かある。而も、尚日々此の師につきて、教を受けつゝあるに至りては、益々其の何の爲めなるかを解する能はず。苦々しき事共なり。彼の『女子と小人とは養ひ難し』てふ古聖の言の、實にも眞なるを知る。而して、陰口きく程の人は、輕卒たる人にして、落ち付きて物の分りたる人には更になし。ても淺ましき事なる哉。

○父母の膝下を辭して、僅かに半年、一年を都に學び、かくて歸省せる女學生の、多くは好んで漢語を使ひ、英語を饒舌り、都辯を振り廻はすあり。氣障なること此上はあらじ。少し派手なる衣服を着てさへも、茶話しの料に上るを、知つたか振りの我れは顏に、漢語や英語交りの言葉を都辯にて話されては、田舍人は却て有り難くも感ぜず、學者になつたとも思はず、妙な風に考へられ、かくて生意氣になれりとか、高襟になれりとか、薄つぺらなりなどの惡罵、惡評を蒙り、果ては、あらぬ事までをも言ひ立てられ、顏縐らむる事あり。片腹痛き次第なり。かゝれば、寧ろ初めより『郷に入つては郷に從へ』の格言を守り、人々の如く語り、人々の如く振舞はば、自然村人よりも重ぜられ、模範とも仰かるゝに至るべし。かゝる事を得悟らぬ人々の愚かさよ。

○左程にもあらぬ近眼に眼鏡をかけ、反り澄まして歩るく女學生を見る。軍人の眼鏡と好一對の見憎きものなり。色眼鏡は病人らしくて、更らに嫌はしきものなり。

（兩評）平凡なれど、いふ所は尤なり。

○理と情

相模　室田　白百合子

天地萬物を生じ、整然として序をなし、晝夜循行して春秋還る。而して、其の間一絲の亂れざるもの、神攝にあらずして何ぞ。之即ち宇宙の「理」なり「律」なり。此の理ありて、初めて道生じ、此の律ありて、初めて物定まる。事物會々理律の軌道に外るゝ事あらむか、

之れ即ち戀なり亂なり。春に紅葉し秋に芽萌えば、人誰か怪しと見ざらむ。然れども、事物に一種の色彩なく曲節なくんば、人生は畢竟淡々として、無味乾燥の中に終らむ。然り「理」は無味乾燥なり、直線的なり。而かも、世界をして愉快ならしめ味あらしむるは、他に之れあり。曰く情。花の色は情なり、地の景は情なり、音の調は情なり。情は惠の雨の如く、濕潤にして曲線的なり、此の相矛盾せるが如き二元は、相一致して行はる。又奇ならずや。其の理なる所に情を潤色せる、即ち其の理なる所以。其情なる所に理の行はるゝ、即ち其の情なる所以なり。直線なる所に或曲線は存し、曲線なる所に或直線はあり。彼の美しき庭園を見ずや。水湛うる池、花咲ける草、樹茂れる丘、こゝ其所かしこに雜然たるが如きも、其の內に自ら整然たる所ありて、丘は丘の位置、池は池の位置を占むればこそ、美しき眺めも生ずるなれ。變化は即ち情にして、一定は即ち理なり。變化ある一定、即ち美をなすの眞相なり。昔の語を假らんか、理は陽にして情は陰なるべし。陰陽並び行はれて、物治まる。理に偏すれば無味となり、情に傾けば亂となる。元來女子は情の子といへば、其本領は當に情にあるべし。されど、こは理情配合の分量に於て、男子とは異なりといふのみにて、理を捨てたる情なるべからざるなり。理に趨る人は輕薄に流れ、情に溺るゝ人は狂とならむ。あはれ情なき輕薄女子、あはれ理を見ぬ狂婦人、深く心すべき事にこそ。我れ感ずる所ありて記し、自ら誡めんとす。


女學生風俗(其二十)

(雨評) 論旨はきこえたれど餘りくだ/＼しくかつ亂れたるを惜しむ。

○あゝ詩人

小石川 近藤愛香子

見ずや、大空に形なき琴かゝれり。エオリアンの琴と呼ぶ。エオリアン一度宇宙の妙意にはじかれて響き出づるや、其の聲清透優美、靜に空より空に、珠より珠につたはりて、はてなき天地を包みて、長へに其の清調を千歳に傳へ、罪惡に沈める人の子をして、自ら恍惚赤見にかへらしむ。天にかはりて此の琴を奏づるも

の、これを詩人と云ふ。見ずや、若草萠ゆるグリーキの野、夕雲迷ふオリンピヤの塔のほとり、黒き衣をつけ頸を垂れ、露をふんで低く微吟する人を。見ずや、ヘリコンの詩泉よりふ流百千、あるは緩にあるは急に綠りの谷間を走り、セレスの神が黄雲萬里の境を行く所、小さき胸に溢る情を包みかねて、かなしき音に出づる人を。見ずや、幽草風にゆらめき露香あふるゝばかりに、かすかなる草中の水に、影をうつして、天地の大風流にほゝゑむ人を。皆これ詩人にあらずや。噫、萬里の長城長からざるに非ず、パリの凱旋門高からざるに非ず。然れ共、與ふる所何物ぞ、支ふる所何物ぞ。噫、何物か遂につきざらん。何物かつひに泯びざらん。而も、詩人やひとり萬里の長風に乘つて、無何有の鄕に入り、悠々として自然の靈光に浴し、こゝに限りなき靈泉を汲む。眞にうらやむべきの至りなるかな、あゝ詩人や。

（雨評）いまだし〳〵。

○容貌　　三河つま子

容貌とは何ぞ。是を美貌にしては、世の人曰く、肌膚は高嶺の雪より白うして、丈長き髮は黑漆の色に勝り、富士額、三日月の眉、鈴張の眼、品よき鼻、丹花の唇、端嚴なる頸、櫻色の頰等、三十二相に沈魚落雁閉月羞花の致を具へたるもの、容貌なりと。是れを醜貌にしては、世の人曰く、赤熊色の髮毛は短く縮れ、きめ悪しき肌は鮫の膚の如く、[illegible]なる虫際、突き出てたる額、圓なる丼の目、怒れる獅子の鼻、夜叉の鰐口に似たる唇、胴より生へ拔の太き猪首等、般若も面を反むくべき趣具へたるもの、容貌なりと。夫れ、容貌の美醜は先天なり。其の美なるは女神の如く、其の醜なるは惡鬼の如し。されど、そは皮一重のみ。外面の一見のみ。心靈は常に是と關せず。古人曰く、「溢怖や人の迷も皮一重」、と。然り、容貌はたゞ皮相よ。美と言ひ醜と言ふ、其は畢竟迷ひの一重たるに過ぎず。美人や醜女や、其の皮膚を去り、其の肉を除き、白骨を以て對比せよ、其所に尙美醜の別ありや、女神惡鬼のへだてありや。容貌な例ふれば、花なり。紅紫黃白、七彩五色の彩も、別ある所は唯美しき寂しきのみ、濃き薄のみ。何れを貴しと言ひ、何れを鄙しとせんや。ああ散り安き花よ、凋み安き容貌よ。其れに貴鄙の別あるは、心靈に美醜あればなり。果實に大小あればなり。心靈美にして、容貌初めて貴しと言はん。果實大にして、花初めて貴しと言はん。されば、山吹の花の美しきも、妖嬈の貌艷なるも、果實なければ、われ是れを價なしと言はん。心靈鄙しければ、われ是れを空洞なりと言はん。ああ、花空洞、容貌空洞、空洞は即ち零なり。

あはれ、空洞なるものも、貴しと稱し得べくは、われは石鹼玉を寶玉なりと言はん。價なき物をも貴しと稱し得べくば、われは硝子屑を瑠璃末なりと言はん。ああ、容貌は遂に石鹼玉の如きものか。唯之れをして貴からしむるは、心靈の美醜にあるを。哀れ、世には是れしも悟らで、容貌の美にのみあこがるる人もありける。

○樂を論ず　　讃岐つる子

散りてこそ櫻なりけれ。世上の樂みは、總て墓なきものゝ中に宿るものなり。明月長へに懸りて、百花散る時無く、紅顏常に存して、富貴榮華の夢覺むる期なくば、吾人は之を樂しとせずして、更にその以上のものを望まん。取らば消えなむ草上の露、何ぞ其の麗しきや。飽き足らぬ所。即ち樂しみの因て存ずるところなり。

人の樂しみを求むるは、猶腕白兒の玩具をもとむるが如し。是れを得れ

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

は萎れを望み、萎れを得れば他を望み、有つ所は望む所に非らず、望む所は有つ所に非らず、昨日まで全力を竭して求めしものも、一旦之を得たる後は、姑くにして其の樂しきを見ずして、更に他の影を逐はむとす、これ、人の性變化を好みて、長く一所に止まりて、之を樂しむ能はざるに因るなり。また時に一所に止まり、現在の境遇に安んじて、靜かに之を樂むが如く見ゆるものと雖も、之其樂未だ進境にありて、前途尙ほ飽き足らぬ、追ふべき幾分の餘裕を存する時に限るべし。而して、盡無きものに至りては、人は大牢の美味、僅かに一箸を付けて、急に之を撤ひ去られたるが如くに感じ、只其の樂むべきを見て、未だ飽きたる味を味ふことなし。これ、盡なきものゝ特に吾人の心情を惹く所以なり。

『生存へば、また此頃や忍ばれん。憂しと見し世ぞ、今は戀しき。』過ぎ去りし事にし云へば、其の當時は憂しと見し事さへ、こひしきは人の心なり。況んや、これは樂みの中にありて、飽かて失ふところのもの、追想の衣、着せては、其の樂しみをして、益醉樂のものたらしむるも、宜ならずや。

○あゝ自然

山城國　物江富子

あゝ實に自然は偉大なるものではありませぬか?、自然と同化したる眼を開いて、此の人事の爭鬪を見たならば、蝸牛角上の小鬪よりも尙ほ小てはありませぬか?、況んや、金や!、名譽や!、學位や!、勳章や!なほ人生や!、實に〳〵小なるものではありませぬか。人生五十年、長しと云ひ短しと論ずるけれども、絕大の自然と比したならば、些の爭論の價値はないてはないか。吾等はどうしても「自我」てふものゝ紀念碑を、自然てふものゝ内に立てればならぬ。

何大將の銅像、何公爵の紀念碑、然り、外觀は美しいけれども、人類の些枝を以て出來たものは、何時か滅亡せずには居ない。此處に於て、我れは自然を友とし、自然と同化するの境遇を喜ぶのである。



女學生風俗(其廿一)

○婦人美

伊賀　かすみどり

世の孃樣方。

なべて男の方々は、意氣に猛く、女は情のかたまりて御座います。隨つて、先天的にやさしく、床しく、美しい愛の血潮が、例の所謂ばらの頰をこさえて居るのです。て、殿方の男々しい心に、ふッさりと緣の髮、雪の肌、涼しい眼、萬づしほらしい姿と、眞に神々しいばかりの、美しい淸い人格とは非常な奧ゆかしい感動を與へるのです。

世の姬樣方。

男は肉慾のかたまり……とお思し召すな。

高い淸い感情を失はせて、いやしい肉慾を起させますのも、皆九割迄、姬樣方の落ち度て御座います。

近い話しが、アノ裸體畵て御座います。眞に神樣の樣な氣高い、生々とした傑作てゞも御座いましたなら、何の殿方とて、さもしい情が起せましよう。が其の反對の結果が、裸體畵てふ床しい者迄が、妙に世人からうとまれる樣に、なつたのてす。

詩歌や小説にしても其の通りて、天外先生の、初姿や、女夫星や、寛風戀風を御讀みなすつて、さもしい感情の、とりことなつた殿方ても、古くは馬琴の八犬傳の、アノ濵路。亦は不如歸の浪さんの、一言一動、美はしく寫された性格に、何うして泣かずに居られましよう。

世の孃樣。

總じて人は、同時に二箇以上の情が、起る者ては御座いませぬ。高尙な感情が起つてゐる間は、さもしい情は消えて居るのです。て、美しい顏より、よい姿より、猛き殿方をして、優に感嘆せしむる、其の奧ゆかしい品性こそ、眞に女性の命て、亦特筆すべき美點て御座います。

新體詩

東京女子高等師範教授尾上文學士選

特別第三賞

はつ花

信濃長野市 安孫子美子

きらめく劍さと拔きて
風冷やけき欄干の
今脱ぎかけし夏衣
わが柔胸に當つるごと
夕べの色におどろきて
いつ世に寄せし秋の影。

花あわたゞし春逝いて
人と二人が手枕に
其水の音もの寂びて
夢か夢なり青葉かげ
をかしと聞きし水の音
いつ世に寄せし秋の聲。

暮れ行く夏を沈む陽に
少女よひとり草堂に
秋の生命の長かれと
など力なくうなだるゝ
染めん呪咀の筆投げて
いのりて見まし今宵より

字句整齊、着想また警拔。

天

○森の歌

鳥取市西町 天野清子

名もなき森と云ふ勿れ
み胸の血潮したゝりて
そのかみ清きおん神の
凝りてなりしよ森我は。

凱歌と鳥の音はひゞく
さながら我は城の如
露さゆらげる曉は
高くも空にそびゆるよ。

月のみさめしさ夜中は
ひとり語りつ謳ひつゝ
遠きみ空を想ひつゝ
とはの翠にたゝづむよ。

木の間にうたふ鳥も皆
人のおそるゝ熊もまた
さかしく走るりすも亦
たゞはらからと異らず。

太平の夢、おどろかす
つかれ果てたる旅人の
罪の獵男もうかゞはず
さまよひ來てはいこふのみ

嵐のすさぶつらき日は
わが友のため手をあげて
こゝに住まへるもろ／＼の
砦を守る武夫のごと。

勇みて我は叫ぶなり
小いさきものよなれあらし
み神の胸に生し身は
など人の手に時の手に

亡び果てむや亡びじと
たけるあらしもすぎゆけば
友と二人うたひつゝ
常に絶えせぬやわらぎの歌。

幽邃高邁、優に作家の域に入る。

地

○君が情

武蔵鶴見　紅扇子

君が情の息吹にて、
愛の若芽はもえそめぬ、
のぞみはえある新しき、
光これよりはじまらん。

君が情の羽袖にて、
わがあめつちは掩はれぬ、
望みたのしみ今よりぞ
我世の春ははえあらん。

愛の若眉そとひそめ、



とるやくしげのまそ鏡、
眞紅の房のもゆるごと、
十九の春のはえおほき。

艶麗比なし。

人

○紫陽花

京橋區新榮町三ノ一　鞠子

星と星との戀なりて
天に讃美の金鼓打つ
小さき優しき神の子が
御裾かこみし彩虹の
雫何時しか下界に落ちて
凝りしを夏の姫御子が
汝は天上のものゆへと
穢れにそまぬ院前に
移して永久に七色の
花とや咲きし紫陽花よ。

これまた優艶、佳麗

秀逸

○なやみの友よ

麹町區　重田靜子

なやみの友よ愛ひ子よ
運命の神が手すさびか
愁ひのみ胸安むべく
笑みてきゝませ人の世や
永久に榮ある運命路を
君が煩悶に我はなく
つらき涙の君が身や
捧げむ歌もあるものを
希望あればの人の世よ
とく辿りませ進みませ。

希望あれば人の世、一句甚味あり。

○舞姫

能登　池野いさみ子

たが愛入れて染めにけん
長う地にひく衣裾の
年は二八の春淺く。
くしき薫にうかされて
罪なき瞳斜にして、
ちさきえくぼをもらす時
戀の甘きをおぼえざる。
あゝ美はしき天國の
雪の肌をつゝみたる
花やかなりや都紅
色香ふくめる其さまは
そぞろに蝶も迷ふらん
花はづかしき顔に
誰かはくしき香にゑひて
ばらの園生にふと見たる
白きかづぎの少女子の
かばかりくしう舞なすか
眞紅波立つ衣裾や
只奥深う秘めおける
今ふと此處にあらはれて
運ぶ蓮歩の優しさに
例へば戀の若人の
なやみの胸とふさはし哉

清麗。

○大瀧

芝　三瓶花郷

千年の昔魔の神が
刃はてゝに瀧となりて
あたりの木立小ゆるぎて
神秘の影は包まれて
呪咀の爲めとつき入れし
落つるや凄き永刧の聲。
花なす沫四方をこめ
人の子罪におづる哉。

三四尤も妙。

○曉泉

福岡　白鷗女史

夜を守る星の影淡く
薄紫の靄低う
千とせ靈ある森の奥
歡樂呼く眞淸水は
縁五尺の髪垂れて
現はれましゝ女の神は
闇の帷のうすれては
野は平和の光あり。
白百合の根に湧き出でゝ
天の香齎う匂ふかな。
黄金のみ玉まばゆくも
泉の精か詩の靈か。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

夕煩悶の人の子も
今し泉に身寄せては。
奇さかをりの迫りきて
そこに希望の韻あり。

云ひ古りたれども棄てがたし。

○山住微誦

新潟　小島次子

秀才にまねてたゞひとり
苦吟に痩せし山住や
ひとりまろねの終日を
折ふし得たる興がてら
書くにたまりし歌反古や。
詩の小室の小燈籠に
百合花うつる絹簾垂
小風かすかにおとなへば
山蔦からむ破れ軒に
銀の鈴鳴りひゞく。
句を染む筆の倦み果てゝ
卯の花窓をつと推して
戸外のけはひ窺へば
曉の星淡くして



山氣靜かに身に寄する。

才情流露。

○高雄山頂にて

神田　小磯君江

熊笹小笹の中に姫百合のいとも優しうて
たへなる姿やせたる胸は詩湧けり。
青葉若葉のその隙よりは藥王院の
丹塗の層塔殊に輝きて栗鼠時に過ぐ。
天の怒濤は湧く高湖の如海拔四千尺
姿尊くそゝり立は芙蓉會座か―涅槃の大聖か
森羅萬象唯雄々しく金剛力士が
魔軍を睨む丈六の姿厳めしいかな。
甲斐の翠微は天の淵に山脈つらねて
白銀の流れ造化の「讃歌」うたひて汨々たり。
水松樹の大弓その手に握れる巨人の如き
高雄の山よ永劫に崇く平和にほゝえめ。

奇峭秀拔。

○さゞふね

常陸　西野波留

いさゝ川べに佇みて、

　　　　無限の思ひますかゞみ、
寫して世をば忍ふとき、　囁く水にひゞきあり。
無我に入りにし己が身の、　何時しかわれに歸る時、
何の思ひやのせ來らむ、　流れも緩きいさゝ舟。
拾ふはやすき手なれども、　うなゐの心やさしきを、
思へばさすが止めかねて、　流しやりけり末とほく。

最後の一節情ことに深し。

○乞食

させほ　横山汎愛子

こゝろの憂さはなけれども、　うらぶれ姿いまこゝに
四十年うき世のなりはひに、　まかせて今日も逝きに鳧
泣けとやわれに夕ぐれの、　有情(うじやう)のかねに聲あらば
うたてこの身はもの乞ひの、　富貴の門のはづかしや
あした快樂の香にゑひて、　夕べ歡呼の聲ありし
富權のかみはゆめかそも、　我が名は永久にかくれたり
泣くべき戀もふりけらし、　やれ衣にさむきこもり香や

萩の玉とこしのぶにも、　まだ見ぬ人のしたはしゝ
いづれこの世はたびの日の、　權威(ちから)も富も名も戀も
さとれば儚な人の身の、　やがてはねむる苔の下
いざとて歩む萩の道、　こゝに慰藉の宿かりて
人のゆくすゑこしかたの、　はかな運命(さだめ)に笑まむかな

意はさることなれど、字句練熟せざるところおほし。

○夏の夜

山口縣　永地菊枝

あゝ平和なる夜の榮や、　見よや天地はとこやみの、
帷のうちにとざゝれて、　仰げば高き大そらに、
かゞやきそめぬ星の花、　そこに自然の啓示あり。
あゝ靜なる夜の聲や、　見ずや天地は永劫の、
神のみ袖につゝまれて、　かすかにひゞくさゝ川の、
水の調の淸さかな、　そこに無限の慰藉あり。
あゝこの光仰ぐとき、　あゝこの調きかんとき、
榮利にはする罪の子も、　運命に迷ふ弱き子も、
すぎし昔にたち歸り、　エデンの園に遊ぶなり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

少し古けれど不可ならず。

○ほたる

緑尾　父なき子

みだれめぐしき金銀の、光ただよふ夜の帳に、
にほひほのめく新星の、やさしみ夢にふとしみて、
生れし愛子かとぶ螢。

確に詩才をみる。

○たなばた（後）

上毛　西窓女史

一

天の河原のかけ橋の　礎永久に動かずて
秋風清き夕まぐれ　片袖かろき欄干に
ふたりの若き星神は　樂しき酒にうち醉ひて
舞の樂にぞ入りにける。

二

紫雲たなびく廻廊に　警蹕のこゑ嚴に
音づれ給ふ龍田姫　祝のためと取り出づる
御鬘にさせる笄を　あな危ふしと見る間に
黄紅の装飾下界に散じ　紅葉の花はかざられぬ。

清新。

○萩の花

[illegible]　晨露子

うき世のちりの穢にしまぬ、小女が聖き初戀の、
ひかりやさしくつつみたる、理想の園の紫の、
虹の香とけししたゝりが、咲けりとばかり萩の花。

第五句すてがたし。

○釋迦の降誕

駿河　夏浪子

此處を去る三千里　今を去る三千年
月は四月日は八日　印度の國は藍毘尼園
時ならぬ花は咲き　天樂は鳥の唄に和し
甘露隨處に降り　蓮華濱粉たり
忽ち叫ぶは人聲ならず　天上天下唯我獨尊
猛獸聲を潜め　萬川水の濁清み
又もきこゆる聲は　天上天下唯我獨尊
此救世主の降誕をきゝて　讃美の聲は世界を動かしぬ

調頗る强し。

○月

南そう　森久子女史

東のみ空ほのぐと、もえたつ處こゑありて、
現はれ給ふ夜の神の、白衣のみ姿としや、

○

水清らなるせゝらぎの、清きみ姿宿しては、
金環、銀玉、戯れて、妙なるひゞき、夢の如、

○

野原に咲ける白菊の、
天つ乙女のそれの如、
清きみ光り誘ひては、
そこには戀のかほりあり、

○

あゝ美しき此月の、
あゝ清らけき此の月の、
照らすは其れよ全世界、
照らすは其れよ天の國、

高陵花子

○磯の夕暮

天つ風清く吹き渡る、
磯邊に立ちて眺むれば、
荒磯浦の夕間暮、
思ひは深し海の色。

神の彩とる紫の、
淡くぞ立てる能登の山、
夕雲迷ふ西空に、
姿は朽ちず長へに。

慰藉の光明はなやかに、
奇しくも淡く見ゆる哉、
今ぞ薄るゝ日の中に、
靜に眠る鐘の像。

人の辛勞慰すべく、
遠山寺の鐘の聲、
鐘の終りを告げ渡る、
餘韻は遠し濱の末。

希望に滿つる舟唄は、
岸邊に待てる海士が子の、
海原遠く朗かに、
慰藉の聲と和するなり。

風に囁く磯松の、
磯邊によする漣の、
夢の調べは優しくも、
鼓の聲と和するなり。

清けき千鳥汝はしも、
空しき夢を醒すべく、
理想に醉へる人の兒の、
神秘を帯べる「エンゼル」か、

深くれなゐに麗しく、
人の無常をほの示す、
燃ゆるが如き夕雲は、
運命の神のみわざかも。

夕榮何時か消え果てゝ、
海士の灯は見え初めぬ、
徐かに襲ふ夜の神、
闇黑の勝を照すべく。

靉靆頓に納まりて、
新星天に見え初めぬ、
宇宙を包む黑衣、
夜の平和を護るべく。

望めば廣き海の末、
清きは月のそれならで、
仰げば遠し天の果、
いよ／＼澄みゆく我が心。

武藏　武藤杜宇子

○秋

節面白き馬子の唄、遠く流れて黄昏の、
綾濃くなりしその夕、すゞろ逍遥に興を得て、
暫し佇む橋欄や、夢美くしき里川邊、
靜寂破りて雁の、一群過ぎて秋涼し。
露に彩なす白屋に、蟲のすだきの聲清う、
平和深き明星の、寂しき啓示身に受けて、
告ぐる夕の鐘の音に、沈める心振り起てゝ、
又もさ迷ふ畷路や、東山ゆ月は出ぬ。

早稻田　小島渡子

○野興

小雨そぼふる四疊半、
嵯峨の茶店の夕まぐれ、
芭蕉の葉うつ音聞きて、
嵐が嗜み足利の、

點茶の術の韻ありな。
僧千光が齎らしゝ、
齋振の寺の裏山の、
古法の煎りを渦にするや、

香よき玉露の湯沈ぬ、
身は幻なり茶はよけれ。

○杜鵑

夕べ涼しき山の里、
杜鵑一聲空高く、
月影清くかゞやけば、
靄をかすめて雲にいる、

果なき世にも自ら、
世をうらぶれの人の子よ、
美妙の色はあるぞかし、
罪に目さめて罪にれる、

四條　秋月子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

夢にだにきけ奕妙の音、　しばしは忘れん世の塵を、

○鈴虫にかはりて

金澤　大地　波子

ある夕まぐれ吹く風に　もろく散りたる桐の葉の
つよく我身を打てより　いとゞ力もよわりゆき
泣かむとするも聲出てず　立たんとすれば足折れぬ。

あなつれなしや又も吹く　風に散りくる木々の葉は
なやむ我身を埋むれど　そをゆり落す力なし
あはれこの身も暮て行く　秋もろ共にはつるならむか。

○戀の賦

陸前　菊地　のぶ子

散るべき花の戀ならば　咲かせしものをあゝわれの
絶ゆべき糸の縁ならば　結ばしものを永久に。

槍を打ち磨して夜の靜か　星を飾るなるそのみ火を
望みてし寛の運命ある　人に燃えてかあゝ戀は。

望みある子が戰の　よしその戰に光みちて
兜の星の匂はむも　久しかるべき一日かは。

緑の髪にさしたへて　紅きを君に白きをば
われに贈へし薔薇の花　あゝ其花散りて君逝きぬ。

悪みも深き導きの　み神は在せど寛神の
そこに冷けき羽をのべて　やがては暮れむわが運命。

散るべき花の戀ならば　咲かせじものをあゝわれの
絶ゆべき糸の縁ならば　結ばじものをなまなかに。

○離別の曲

伊豆　上原　しげる

吉野の山の花散りて、　須磨の浦べに朧ろ月、
浮べる雲はかへり見ず、　春を慕うて流れ行く、
蓬生の薔薇を給はりし、　君が賢美の歌謳ひて、
二つならべて功名を、　誓せし我は老いはてゝ、
共に御にかけたりし、　夢は空しく朽ちにけり。

○螢火

埼玉縣　山下　富子

螢の香寒き四阿に、　詩集繙く夕まぐれ、
心は失せし君にはせて、　文そと置きて眺むれば、
新墓のあたり怪し火の、　尾長う引きて飛びて行く哉。

○懷舊

大和國　村　[illegible]

思ひあまりて只ひとり　覺束なくも夕ぐれの
わが古里の空見れば　過ぎし昔をなつかしく
ただよふ雲の西ひがし　たち別れにし町はづれ
泣きて送りて吾妹子が　わが手握りし其さまの
いまなほ胸にゑがかれて　思はず袖をしぼりたり

○

人の此の世のはかなさよ　花かとまごふ吾妹子は
今は苔むす石の下　見れば草末に露しけし。

○ことしの夏

横濱　さゆり女

野のすもゝも實りけり、　畠なる瓜も熟しけり、
家に父まし母いまし、　學び屋終へて歸着て、
かへりきまさん兄もあり、
よき縁得てよき家に、　嫁ぎ行きます姉もあり、
李ひやして待たなんか、　白うりむきて送らんか、
ことしのなつのたのしさよ。



敍事文

日本女子大學敎授　櫻井文學士選

天

○夕雲

三河鴨四小樹　白萩女史

高き山根に橫はる雲も、蒼海原に棚引ける雲も、晨に日の出の空を飾れる雲も、夜半に月影破へる雲も、とり〴〵の趣多かむめれど、わきて美しく思ぼゆるは、夕暮に見る雲の姿なりける。

靑和げる夕つかたの空を仰げば、綿羊の群れにも似たる白き斑なる雲や、灰色に紫を混じたらむやうなる雲や、幾筋となく淡黃色に流れたる雲の影やは、ひとしく還幸のみ車を早め給ふ日靈貴女神が照射ましますさ燦然たる金箭に彩られて、さながら年わかき畫工が、その狂熱なる情想もて、奔放なる筆振ひたらん如く、春の潮の一時に躍り出てたるにも似たる妖炎、燃ゆらむやうなる濃き紅の色に照り映えて、綿羊の群れは、うす紅の花雲とかはり、悠う流れて棚引けるは、春の女神が錦の玉帶を裳長う引きはへたるが如く、東の空遙に漂ひ浮びし織雲も、また淡き黃橙色にいろどられて空はさながら絕美の大なる繪卷物を一面にくりのべしが如し。

やがて、燃ゆるばかりの日の影、やうやく淡れ行きて、眞紅の暮雲、黃金色の遊雲、色どりや〳〵にあせぬれば、黃ばみたる雲は桔梗色になり、桔梗色は淡灰色とうつり淡灰色はやがて薄墨にかはり行きて、いづこよりともなく迷ひ出でゝぬる夕闇のひろごりに、雲は一しほ色を失ひ、亂れ亂れて岫に向へるは、牧童の笛に羊の白きが集ひ行けるが如く、高嶺の方へ流れよれるは、長くのべられし玉帶の、女神のみ手にたぐりよせらるゝに似たり。

美しき夕雲は、かくて殘りなに收まり去り、またたき出づる星影のみいとゞ淸くなり行くになむ。

（雨評）材料に斬新の趣あるにあらねど、敍事の筆は得たるものあるを以て天とす。

地

○埴生の宿

東京麹町區飯田町六ノ十　重田春子

「埴生の宿も我宿、玉のよそひ羨まじ……」突然、大聲に歌たのは、夕暮青葉の下蔭、包み切れぬ滿足の心に、片手にバイオリン抱いて立つて居るこの私であつた。然り、我宿は埴生の宿である。間數はたつた三間で、十坪ばかりの庭があるきり、ふるい汚い家である、下女も下男も居らない、……けれど、私はこれに非常に滿足してゐるので、……お友達は大方廣いうちで、廣い庭を持つていらつしやる、下女も居れば、下男も居る。でも、私は少しも羨ましいとは思はない。否、むしろ自分の方が自慢したい位な氣がするので……。父上、母上、それに姉上一人、一家四人の平和な暮らし、お役所から父上が歸つていらつしやれば、私は團扇を取つてあふいてあげる。母上は洋服をおぬぎなさるのを手傳つていらつしやる。姉上はつめたい水をくみに行かれる。夕方になれば、四人一ッテーブルにたのしく晩さんを卒へて、私はバイオリンを彈く、姉上は歌つて下さる。朝は、姉上が御飯をたけば、母上はお掃除をなさる、私は雜巾掛をする。そこに一ッの不平なく、苦情なく、不滿なく、嫉妬なく、……

あゝ、私は平和をかき亂す白千の惡魔が押しよせても、このさゝやかな我が家の平和にのみは、敵することが出來ないと、かたく信じてゐるのである。

銀殿玉樓に住むあて人にも、私は、私の境涯を、あへて讓らない!!!

あゝ、私は滿足なほゝゑみをもらして、再びバイオリン肩に彈き出したのは『埴生の宿』!!!、姉上の歌聲は、凜として冒すべからざる、我が家の團欒を示してゐる。

「埴生の宿も我宿、玉のよそひうらやまじ……」（完）

（評）讀んで心地よく感ぜらるゝ所をとりて、地とす。

人

○羊飼

信濃長野市　安孫子美子

夢ーと、思ふと、もう、夜が明けて居るので、急いで床をはね起きると、いつもながら懷かしい、小羊の聲が、聞える、起きよと、私を促すのであろう。冷たい曉の露を踏んで、眠げな花の香に醉うて、小川を渡つて、丘を超へて、斯くして行く、一里の原！私のつと

め。さう、今日も亦、二つの羊と一所に、其所に樂しい、一日の日を語り盡くさうよ。

そつと、手綱をとつて、小舍を出た。

花の上吹く溫風に、凝りし血汐の、音なく溶け行くやうな春の野、高い〳〵空を仰いで、其儘馴れた手枕の、私は土にごろりとなつた。淙々、音してゆく彼方の流れに、二つは水を求めて、走つたのであろう、見渡す此所には、もう影も見えない。斯くて、はるか雲の流れを眺めて、うつとりとすると、丁度〳〵、宏やかな、花やかな、神の御園の、羅絹のやうな、搖籃の中で、或るなつかしい子守の謳を聞くかのやう、瞼は次第に…………、美しい夢にと入つた。



白露がぽとり。不思、ぞつとして、眼を開けると、何時こゝに？、二りは、笑ましげに、私の躰をめぐつて居るので、——

こゝへ來ると喘ぎ寄つた流れの水、それが今、其の和毛から、ほろりと振はれて、落ち散つた、淸らな玉…………

私はそれを拂ふに堪へぬ、匂ひ高き菫を手折つて、それを其まゝ、花へと、受けて、

噫、何もない。唯、私は、此つとめが戀ひしい。よし、此の世の人が、やさしい口から、人の世の樂しさを說いて、秘密を告げて、さて、「何故の、希望ぞ」と問ふならば、——おのが行くべき生命の此の野、神の此のみ園を指して、只もう、なつかしい、たゞもう、懷かしうてと、私はこれを、何故ならばと語り云ふべき言葉を知らねど、……………

（雨評）少しく朧朧の嫌あれど、詩韻の掬すべきものあるを以て人とす。

秀逸

○凉み松原

姫路市　水守浪子

城山から、平和な紺碧の色を湛へて、流れ流るゝ千種

の川を一渡り、此の松原へかけて、かつきりとふちをとつて、入がての夕日が榮えてゐたのも、最う先刻。餘光は颯ッと流れて、西空は麗かな臙脂の色に匂うて居るが、それも儚ない人の子の夢の樣に、稍々に薄らいでは、早松の葉に夕風が囁くのである。此の松原のつきる處、一つの石地藏尊が、誰が惡戲か、八字をつんと生やして、色褪せた涎掛を頸に卷いて、立つてあるほとりを、無數の蜻蛉が、恰も枯松葉を散らした樣に入り亂れて居る。

旅順の要塞今おちて……不意に松原の中で凱歌が起つた。それに吃驚したのか、今迄地藏尊の鼻つ端に止つていた一匹の蜻蛉が、大きな眼をぎろりと睜つて、敵やあると身構へした。「兄さん、走る――」續いて起つた大聲に、蜻蛉はぎつくりと胸をそどらしたが、其のまゝついと離れて、空高く／＼……。同時に松原から駈けて來たのは、二人の少年。共に緣の廣い麥藁帽を阿彌陀に冠つて、荒い箇袖の洛衣にしぼりの兵兒帯と云ふ揃ひの扮裝。日にやけた赤黑い額から、夥しい汗がたら／＼と流れて居る。一人は十歲位、一人は七つ位、兄弟と云ふ事は、其の似よつた顏を見ても直ぐ分る。各々持つてゐた長い棒て、蜻蛉軍來れとばかり、めつた打ちに打つたが、蜻蛉軍中々の勇者、彼處に現るゝよと見れば、早此處に、神變不可思議の秘術をつくして、縱橫無盡に驅つてゐる。



「馬鹿らしいや」大きい方が云つた。

「進めつ突貫――」急に二人は脱兎の如く駈け出して、見る間に姿は見えずなつた。

後は寂として、犬一匹通らぬ。刻々ときざんで行くタイムの進行につれて、淡黝色の寂寞の帷は、夜の神の先驅として、早此の村を庇の樣に蔽ふた。最早星華を鏤めた天の扉の開かれるのも間はなかろう。さする時んば此の松原は晝の暑さを忘れんがため、田五作も來れば、お三どんも來る。一度山の端に月があらはるゝ

や、質直の村人、旁午として、歡聲湧き、笑聲さゞめき、誰れ云ふとなく名のついた『凉み松原』と化するのである。

（雨評）文また凉み松原の趣あり。

○湖畔の暮色

三陽　加藤よし子

或る夕なりき、我れは日頃の暑さを、さゞ波寄する細江の湖畔に避けばやと、獨り一葉の扁舟に棹して、落合の流を下りぬ。日の御神は、丈が岳のあなたに傾きて、河風いと凉しく、兩岸の蘆荻颯々聲あり。かくて、愈々下れば、流れ益々緩く、舟はいつしか河口を出でゝ、江上に浮びぬ。

見渡せば、斜陽今や遙けき引佐山の一端に掛りて、燦然たる餘光、西空にさ迷へる幾多の斷雲を燒きて、或は紅く、或は黄に、或は褐色等種々樣々にそめなせば、半天恰ら天つ女神の織りなせる、一大綾羅の錦引きはえたらんが如くなるに、そが又鏡面を磨ける細江の湖面に反映して、一きは艶なる眺めなり、

遠くあなたを眺むれば、をちこちの島影に見えがくれする眞帆片帆、さてはさゝやかなる漁り舟、おゝそが舟に乘り込める人々の心になりて見たや、如何に樂しき事ならむ。一陣の微風、夕なぎの湖面に起れば、湖上一帶の彩波を躍らし、紅波綠波、我が扁舟に當りては、眞珠の玉と碎け散るも面白や、折からいとも妙へなる欸乃の一節、いづこよりか水を渡りて響き來る程に、近き葦間さわ〳〵と音して、一葉の小舟、ぐらぐらつとゆらめき出でぬ。そが響にや驚かされけむ、飛び立つ千鳥の一群、麗はしき夕日の光りを載せつゝ彼方の岩蔭に入りぬ、眼の及ぶ限り、水や空や總て五彩を彩らぬはなし。あゝ美なる哉夕陽、麗なる哉彩雲、げに一世に秀でし畫工も、筆を燒きすつるの景色なるべし。さる程に、夕陽の光りいつしか夢見る如く薄らぎ行けば、今迄いとも艶なりし夕榮の雲も、刻一刻とあせ行きて、見る間に黒づみ掛りし赤色となり、紫色となり、藍色と變り、果てはあやしき灰色となりつ。折しも、遠く館山寺山の晩鐘、斷續水を渡りて、或は高く、或は低く、餘韻微かに縹渺たる湖上に響き渡れば、湖上いつしか薄霧を生じ、暮色は蒼然として、四邊夜の黒幕をもておゝはれ、漁火一ツ二ツ見え初めぬ。

（雨評）優美なる湖畔の暮色と申すべし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

○夏の海

鈴木 平岡信子

あゝ夏の海の朝程、美しきものはあるまい！

夜はまだ明けず、沖から吹き來る汐風の、肌寒きまで衣を掠めて、寄せてはかへす女波夫波の囁と、まなざし清き星の微笑のみが、無限の想ひに觸れて去る計り、波の外、山も、舟も、鳥も、空も、眠よりまださめず、佇む者は吾と、松の老木。

暫くして向ふの戸馳島から、かすかに、曉を告ぐる鷄の聲がすると、海峽を隔てゝ、吾が後の漁家よりも、勇しい其の答が聞えた。松の根に腰かけて居ると、自分が眼には曉は此の兩岸の鷄の聲から、海面に湧き出して來る樣に思はれた。千鳥が四五羽とんで來たが、自分が居るのも知らずに、白き眞砂の上に佇んで居る。とする内に八代の方からかけて、小牛の眠つた樣な大島のほとりが、薄いローズ色に成つて來ると、立ち昇る水蒸氣が、若い紅色に段々と染まされて、はては遥く間に、曉の色は天草連山の頂を彩つて居る。仰げば星影は何處にか去つて、やがて空は、見る〳〵、紫となり、樺となり、海の面にまばゆい光が流るゝ時よ、ふりかへれば朝の汐風が、松の枝に美しい調、無絃の琴を奏づつて居る、丘の上の黒き森から金色を帶びた鷄が一羽、まだ曉の戸馳の方へ海を越へて鳴き去つた。

あゝ、曉を告ぐる天使の姿も、あゝあるてはあるまいか！

鷄の去つた後は、松原も、海も、家も、盡く黄金色に匂ひ、理想に夢みしゴールデン、エーヂの、まのあたりに現はれた樣な心地がして、自分が胸は清しき心地がした。

漁船表れて、櫓の音が聞ゆる。人の聲して、白帆が上る。かくして海動き、人動きて、熱き夏の火の中に動き出すのである。見渡せば青く澄み渡つてる夏の空が、心地よい程晴れきつて、エメラルド色の海の面には、白き帆影が、銀の粒をころばす樣にとんで居る。

あゝ海よ！變化多きは海よ！

かくして、自分は忘れんとして忘れる事の出來ない樣に、美しい夏の海を愛する一人となつた。

（附評） 文また夏の海を見る趣あり。

○暑い日

神戸 秀子

お、暑い！と、我れは思はず、何時も暑さ除けにして居る、うらの柳の木蔭に立ちよつた。

ちりんちりん「お暑つ今日は……豆腐屋でござい」。「本當に暑いね。燒豆腐一つ……薄いのは嫌だよ。」とは横町のお三どん、さりとは、欲深いあつさであるよ。「へ、、、旦那、之れでは殺生でごぜえやす。此暑いのに……今少しどうか……。」手には手ぬぐひを、たゝんで鷲づかみにし、額をふき乍ら、二三歩後退りをするのは、お向の主人を、のせて歸へつた車夫。

「まあ貴女、お暑うございますね。いくら出征軍士々々々々と思つても、つい耐へきれず、ぐち計りこぼして居ます。こんな失禮な、なりて……、斯う暑つくなれば、成りも振りも、かまはれたものではございませぬ」。「いえ、貴女、御同樣ですよ。私等でも、五時ときいて、やつと生き返へつた樣に思ひますわ。お湯にでも入ると、暫くは、たすかりますがね……。」とは、おとなりの、お主婦さんが應對ぶり。

更に大路を見れば、

「おい、きびしいな、少しはうれたか。」

「おゝ、まあ暑いお陰でな。」

木かげに荷を下した、二人の氷屋、とけそうな笑顔で、汗をふいて居る。二人の女學生、テニス會でもあつたと見えて、

「あつ、くやしい。あんな、ひどい打ち方をするんだもの。ね、貴女、ずゐぶん暑つがらない私でも、背に川が出來ましたよ。」

「でせうね、今日は本當に氣の毒だつたわ……。私もね、瀧の樣に汗が流れましたよ。」双方眞赤な顔に、衣しだらなくくつろげて、拭くやら、扇ぐやら。見ても聞いても、お暑いの持ち通し、斯樣な事では、未だこれからの夏を、どう過すことやら。けれども、六時を打つ比からは、近所合壁、打ち水の音も、凉しさうに、燒け土の上に、注ぎかける、小氣味よさ、さてさて、今日は暑い日であつた。

（評）今回の秀逸欄に、一異彩をそへたる文と申すべし。

○父を迎ふ

靜田　小磯　君江

けたゝましう、汽笛は濕り勝ちの空氣を傳うて響き、青色の燈火は、眞闇の彼方に見えた。もう後五分三分と指を折り數へた妾等は、此れを見るや、何だか血の湧くやうな氣持がして、じつとしては居られず。汽車は

益進むで、ボッと眞白い煙をもらして停車した。妾は氣がさてなかつた。やがて、ガラガラと驛夫の荷物を運ぶ響や、馳けだす下駄の音や、番號を呼ぶ聲やで、停車場中大混雑である。潮の湧くやうに、赤毛布、入字髯、ハイカラ、女學生、旦那、千差萬別長い列をつくつて出口へ來た。父上はと鵜の目鷹の目で探して居る中、幼い妹は「あすこに」と指す方を見れば、嬉しや、父上であつた。弟はカバンを奪ふ、毛布を受取る、皆非常な喜びであつた。妾は實に嬉しかつた。迎ゆるに涙は不吉だと云ふに、自分は自然に涙ぐむのである。女々しいと笑ひ給ふな。逢はなかつたことが二年半、然し決して三十ヶ月ではなかつた。大陸氣候の處にたゝずみあかせられた所以か、頬は稍こけて、着て居られたカキ色の服は、すゝけて居る。懐し樣な悲しいやうな所謂萬感交々至ると云ふのは、此れであらうと思ふた。弟は「やあお父さんの髯に糸が」と、半だーすの眼は之に注いだ瞬間、妾はほんとに悲しかつた。弱蟲と笑ひ給ふな、妾の涙一滴千金と思召せ——。無心の弟が云ふた糸とは、あゝ白髪であるのだ。妾はもう何も云ふことが出來ぬ。早く時が過ぎて、桃割を結び變へて、父上を安心させなければならぬと思ふた。妹は背の上から一生懸命に汽車を眺めて居る折りから横須賀行が出た

雷の樣に明るいアークライトは、妾等四人の上を照して、丁度四人の嬉しげなさゞめきを聞きたいかのやうである。

（兩評）文洗煉を缺ぐもの多し。たとへば眞面目なるべき中に、強いて洒落を言はんとしたるが如し。

○曉の海濱

尾張國　竹齋女史

東の空も白んで、はや灰色から紫色に變つてゆく時、妾は今したつた一人、草葉の上の露を蹈みしだいて、南の方數町の海濱へと、足を運んで居るのである。朝霧はまはりを立ちこめて、野も家も森もすべてぼんやりと、遙か向うの松原は、丁度一刷毛墨をなすつた樣朝風は容赦もなく顏にぶつかる、ギヨットして、さながら秋かとも思はれる、やがて小高き砂原を越えて、こゝ、伊勢海の濱へ出たのである。遙か前方を眺めると、知多の諸山は、夢のやうにぼんやりとして、右手に續いてゐる松原は、朧げながら水にその影をうつしてゐる。渚に打寄せてくる小波は、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

さら〳〵と神秘に語つてゐるかの樣。二三町の沖合では、艫音やかましく、漁夫は船歌冴え〳〵と唄つて、東の方へと進んで行く。極遙か向ひには、海士のいさり火が、たゞ一つ見とめられる。沖から吹いてくる潮風の心地よさ、自分は心陶然として浴塵を脱して居るのである、東の天は、紫色からだん〳〵赤色に變つて、今ははや日の出にも近からうか、空はます〳〵眞紅となつて、雲はこれが爲に紅紫色に染められて、水はこれが爲に黄金の波を漂はしてゐるその美しさ。あゝ、妾に畫工の筆があつたならば、詩人の想があつたならば、たゞでは見過すまいに、この光景。朝霧は、今はさつぱりと晴れてしまつて、知多の山は金紫色に輝いて、漁船は潮風に帆を孕まして、熱田港の方へと進んで行く。右手の松原には、鴉が二三羽、曉を知らせるやうに啼いてゐる。折りしも、日は金波を海上に漂はして、左手の遠い松並木の間から、その一端を表した。沈む夕陽には悲しみや失望の色があつて、昇る旭日には喜びや希望の色があるものだとは、いつも聞いてゐたが、實にあの黄金色にきらめいてゐる海面には、希望の光があるではないか。あの雲の眞紅に染められてゐる所には、光榮の光があるではないか。實に海岸の曉光は、莊嚴、雄麗であつて、われ等の胸に、一種いへない所の、神秘的觀念を起さしむるではないか。……など、思ひはそれからそれへと移つて行く。あゝ、實に美はしいは曉の海濱の景である。いつ見ても飽くことのないは自然の景である。と見惚れて居ると、日ははや地平線を離れた。妾も朝のつとめがあるから、足を元來た道にかへした。村は賑はしく、これから世の活劇が始まるのである。



あゝ、妾はいつも朝早く起きて、海濱の曉の自然の景に接するのである。

（雨評）筆すなほにとゝのひたりと申すべきか。

○山寺の秋暮

三河　澤田つま子

釣瓶落しの秋の夕日、薄墨に匂ふ山の眉はにうすつきて、名殘の夕映麗しう、暮雲の影を彩り、紅に黄に紫に空一面の綾を張りぬ。哀れ美しき夕の粧ひや、妾は唯うつとりと鐘樓の朱柱のもと、欄の上に身をよせて、龍田姫のみ手になれる紅葉の錦の、夕映に榮ゆるを眺め入りぬ。さても、清麗に崇美に趣多きは、山寺の秋暮なるよ。

本堂の表庭には、今し年若き雛僧一人、箒もて散りしく秋の錦を掃けり。黄葉紅葉交り亂れて、花模樣せる綾蓆繰り展べたらん如きに、墨染の小法師の竹箒もて佇める、綾蓆殘りなに納め入れつる塵收の、沙白く新しき箒目の跡のみ殘れる庭の面に横はれる姿も繪模樣なり。やがて幽なる夕風さら〳〵と、蜩鳴き殘れる梢に音訪れしとおぼしく、紅葉一しきり亂れ散りぬ。あなやと見上げし雛僧のほとり、又一しきり片々と、刹那、墨染の衣手のいかに美しく飾られしかよ!!! 書院の鈴ゆるうなりぬ、呼鈴にやあらんか。再び箒取れる雛僧は、秋の錦を手にさげて、ひた〳〵と庫裡に歸れり。殘れる落葉の五片六片、紅色のリボン投げたらん如き、秋の山姫がみ髮のお粧ひにや。



とぼ〳〵と鐘樓に登り來れるを、誰ぞと見れば、親しき鐘守の爺なり。暮の鐘撞き納めん爲めとか、皺枯の頰に莞爾なる含笑して禮なしつ。少しのゆるぎも見ぬ撞木の繩に、其の節骨高き腕の觸れし時、瘦せ衰への白蝶一つ欄を斜に舞ひ下りぬ。一杵二杵、鐘は殷々として鳴り出でぬ、靜なる夕の太氣を顫はして、傳へ傳ふる其の響、さても何の啓示をかもたらす。ふと吾に歸りぬ、日は全く隱ろひて、只一刷毛の臙脂の名殘は手弱女のうら恥しき面もちながら、夕闇は次第〳〵にひろごれり。夕の勤行にや、本堂に經讀む聲の若き老ひたる、戛々と響く木魚に交れり。唯亡き人の墓詣でなるに、遲ならば母や待ちませんと、欄を下りて唐めける山門を後に、黃昏山の麓まで急ぎ下りぬ、見上る空の彼方、黃雲流れよる鐘樓に、鐘はなほ殷々となり渡れり。

（雨評）文また山寺の秋の趣あり。

○食後の散歩

南豊　富末八千代子

毎日の事で母にも告げぬ食後の散歩、妹と二人連れて、低い下駄はき、表門から出た。すると、雲間から覗く力のない夕日が、取り殘された小枝の熟柿を赤々と照して、畑から引き上げて、柿の木へ二度のお務めをさせた案山子が、夕風に弄れてぶらり……。凸凹の多い三尺路を、南へ四五町も辿り着くと、こゝは最淨寺の大門である。這入ると、本堂迄斜めに四尺巾の敷石、堂の椽を通ふ小僧さんさへ、ほんに少さく見える程遠く續いて居る。右手には雲に聳えて立つて居る大銀杏が二本、その落葉に屋根からそこら一面黄金と化して居る。其の上に膝まづいて、少女が三人、玉をころばす樣な聲で「戻つて見れば家もなし、之れは不思議と玉手箱、開いて見れば白煙」と揃へて歌ひながら、糸のついて居る針で、一葉々々貫きさして餘念もない。夕風が颯と渡つて、落ち殘つて居た葉が、ひら／＼蝶の樣に舞ひ下つて、美しい髷に止つたのをも知らず。一人は既に女神の胸飾りの如く、輪にしたのを、頸にかけて居る。妾等はふと心付くと、夕日が騎群山の峯から一尺ばかり。漸く五寸三寸、夕陽は愈燦として、あたりに迷うて居る雲は、皆金色に染められたが、それも暫時終に沒し去つて、夕風が俄かに力を得た樣、そして四方が次第に薄暗うなつて來た。時しも何處からともなく、のさり／＼と出て來た吉さんと云ふ三十男、聞けば妻を奪はれ家を盜まれた哀れな人であるとか、それで村人は皆最淨寺の鐘は、吉さんの泣き聲であると云うて居る。今其の夕暮の鐘を杵きに行くのである。妾等の傍を通りながら、見向きもせず、鐘樓へ登つたが、やがて一杵二杵……、胸の悲痛を杵に込めたか、恨むが如く呪ふが如く、長く／＼尾を引いて、この寥しい冬の夕の空を走つて、聞く者の胸をゑぐるのである。妾はとてそれを聞くに堪へんので、門の外へ走り出た。何時の間にやら、冬木立が薄紫の衣をかついで、夢の樣な殘光が、雲の縁を卵色に彩つて、法師山が濡れ紙に書いた墨繪の樣。此の夕鐘の聞ゆる限り、夕餉の膳の上に、野の歸りに、皆此の哀れな人の身の上を話し合つて居るだらう。

（雨評）才氣はほのみゆれど、筆はいまだし／＼。

○たそがれ

静岡縣　武井鈴子

山際の寺よりつきいだす入相の鐘の音は、長く餘韻をたゞよはして、落葉ふきまく夕風あら〳〵しう、いづこも同じとかいひけん秋の夕暮の淋しさよ。黄金波よる稻田のあぜ道分けつゝ、しばしやるせなき思ひをはらさんとさまよへば、亂れ伏す千草の露はら〳〵と、袖に裳にこぼれかゝりて、堪へがたう身にしむを、打ちはらひつゝ仰ぐみ空に、夕日は今紅の帶とも見ゆる一片の雲を中天にのこして、西山の端に入らんとしてたゆたふ樣のうつくしさ。目をさへぎる物なき稻田千里の果てを、臙脂に染めて、あたりを薄くれなゐにぼかしたる、自然の畫師のたくみに、しばし憂をわすれてながめやる程、刻一刻夕日は紅の光を引きて、山の端にかくれ果てつ。牛かふ童も、草苅る乙女も、歸り果てたる一筋野道のこゝら淋しう、名も知らぬ虫どもさへ、裳にまつはる如く鳴き立つるに、やをら元きし道へかへさんとすれば、かなたの山ぎは、こなたの森影に、ちらせる如きわらやの軒より、夕げのけむりのそれならん、澄み渡れる大空に、むら〳〵と一筋二筋棚引きて、さて末は秋風に奪はれて影もあらず。せゝらぎ清き小川の土手を、たそがれの歌低う謡しつゝたどれば、半ばは森にかくされて、軒くちたる水車守る家の燈火淡く、ゴトンゴトンと落葉ふくみて、たゆげにめぐる水ぐるまの影も、おぼろになりしに、心づきて、つと足を早むる刹那、母を慕ひてか、餌を告ぐるにか、幼子のひゝと泣く聲いと物悲しう、折柄の秋風にとぎれ〳〵に送られて。

（評）平凡の嫌ひはあれど、すなほなる筆づかひよし。

○海邊の曉

長門　孤董女史

けたゝましき人の聲に驚きさめて、雨戸あくれば、在明月の一輪、み空に高く、靜氣地にみちて、心爽かに。耳をすませば、何處にか聞ゆる人の聲、さては今し我が夢をさましつる人々は、潮浴みに行くにやあらん。さなり、我もけふこそは、海邊の曉景を見ばやと、急ぎ支度して麻裏引き懸け、只ひとり、心地よき朝風を袖にはらませ、程遠からぬ濱邊へと辿りぬ。蕭々たる磯松風は、よする小波と相和して、自らなる琴を奏て、

一輪の曉月萬波に碎けて、金蛇跳るが如く、銀玉漂ふが如し。遙か沖には屢瞬く漁火の五六點、さては淡墨もて書きたらんが如き、島嶼の二三、あゝいかに自然が巧を弄せし事よ。

彼方を見れば、潮浴む人は既に多く、相競うて泳ぎ出づる男の子のむれ、浴衣の袖翩々と、徜徉ふ少女のむれ、何れも此處鮮景に心の塵を洗ふならんか。

われも白砂の上に草履ぬぎすて、裳裾からげて波打際をさまよへば、波は我が足を洗ひては去り、去りては又來る。ふと見つけし眞白の貝を拾うて、よせくる波にハッシと投ぐれば、さつと奪ひ去つて再びよする波には、はや其の影を見とめず、何處へ漂ひしにや。あまりの面白さに、我れ自ら引く波について走り出づれば、程もあらせずよせ返す大波に、すはと逃去る間もあらばこそ、我が足に激して、しぶきは忽ち裳裾を濡らしぬ。幾度か繰返しつ、果は疲れて、波遠き砂地に確と腰をおろし、又もあかぬ眺めに見とるゝ程に、一縷の微紅東の空に現れしが金光次第にあかく、月痕いつしか白うなりて、沖に瞬きし漁火、一つ消え二つ消えて遂に全く見えずなりぬ、と見れば今迄みとめざりし遠き〳〵沖の島、霞の如く朦と其姿を現しぬ。折から汽笛一聲、遙か沖に一隻の汽船、黒烟濛々と北をさして走り行くよと見れば、瞬時にして御城山のかなたへと入る。

あゝ此の景、此の感如何に人の心をよはしむるか、我靈いつしか神と化して、身は天國とやらを彷徨ふかと疑はる。

眺はあかねど、道行く人に奇しき姿見らるゝが恥かしく、人通り少き内にと、ぬれ足に又も麻裏引懸け、白砂をふみて、見かへり勝に元きし方へと辿れば、濡し裳裾は冷々と我が足をなでつゝ。

（評）純眞に作られたる文と申すべきか。

○夕立

[illegible]　竹葉女史

「お母さん、何んといふ暑い日でしよう、風でもあれば宜いですね」、と妹の聲が終るか終らぬに、轟々と雷の音がした。「あれ」と妹が驚いて見る間に、早や空は眞黒に、火山の吐く烟が廣がる樣に、雲は雲を吐いて居る。時しも電光一閃。「ほら光つた」との妹の聲。瞬く間に大砲のつゞけ樣に破裂する樣、轟々と耳も破れんばかり鳴り渡つた。吾遅れじとの雨は勢よく、地に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

穴の明かんばかりに降りしきる。妾は二階から野を見て居ると、男も女も一散に武器を倒まに驅け出した。何日でも星を頂いて歸へる爺も、さすがに歸へりかけたけれど、老いの身のはかどらず、丸濡れで鼠の子の樣に、しよぼ〳〵と鍬を肩に鎌を腰に、雨をくゞつて、心ばかり急いてゆく樣子。若い男は先頭第一と鍬や離に見えなくなつて、野は雨の占領する處となつた。庭一杯に騒いで居つた蟬の聲も、今は雨の勝鬨の響となつて、籬の音よりも芭蕉の葉の方が高く聞える。それも暫くで、蟬の逆襲の聲が起つた。小雨は大雨となるにつれて、雲はいよ〳〵敗北の色を表したらしい。近い雲の足の早いこと、見て居る中に薄らいで、隊伍も亂れ、ちぎれ〳〵となつた。暑さを奪つたので遅れたのか、蒼空ではたゞ僅のちぎれ雲が殘つて居る。老いたるも若きも、男も女も、手に鎌を或は腰に、或は肩に鍬を、各思ひ〳〵の用意で、戎衣を換へて、野に出かけた。今や涼しき風は平和に、軒の風鈴を鳴らして心地よく、團扇は傍に憩ひ、凋をれかけて居た草木は生きかへり、世は一變してしまつた。あゝ心地よい……夕立。

（評）情景多少躍動したり。

○峠の登り路

星の江子

行く方はと仰く満山、幾千年を經たかと思はるゝ杉の古木、そも幾許生ひ繁つてるか計り知られぬ。枝を交へ葉を重ねて仄暗く。一様の深緑は苑ら滴つて凍らんばかり、晩梢の露は音なく山路の苔にしみて、濕ら寒い樹森として居る。何鳥だろう?、けたゝましくなく啄木鳥に響いた後は、又何物の音もない、吁何と云ふ靜けさだろう。心も塵の世を離れた樣て、苔滑かな岩路登りつゝも、我知らずつと箱根の山は天下の嶮……、と打誦されるのであつた。曲り〳〵て大分登つたと思ふ頃、路は急に險しくなつて、岩によぢ登つてはほつと一息、滑らかな苔の上をすべりかけてははつと杖を命に、手に汗にぎるおそろしさ。一足登れば二足すべり、草鞋も路にたまらぬ有樣。歌はさておき〳〵、掛聲も出づればこそ。漸々の事に登りついては、今更に恐しく、ほ〳〵と太息をついた。見下すと、麓の谷は霧に埋れ、仰ぐ連山、雲霧牛にしきりに動いて、曉の鳥三ツ四ツ一ツ麓の霧に消えた。はるか山の間に淡く見えるのは、今迄居た所の山らしい。あの山の空が紅さした上を、紫の雲が動いて居る。大方今頃坊樣も目をさまして、私が居ないつて泣く頃だろう。ふと側を見ると、おゝ誰がみやび男の栞ぞ、苔むした楢の山水があふれ出る其中に、女郎花桔梗の數本、それは美しい。やがて登ると、側は恐しいがけ。そこを瀬の樣に落ちくる清水は、草鞋をぬらして、美しい千草は優しく裾を掩てゝくれる。雜樹冷たく繁つてる中に、暗は洞の樣なは杣の道だろう。尚行くと、どう〳〵と谷の音が洩れてくる。見下すと、老樹横樣に繁り雜草天高く生ひて谷を埋め、水の色さへ見えぬ。登る程、雲しのぐばかりの大松の並木へ懸つた。其下を通ると、寒さながら雨の樣、旅衣の肩にしとゞふりて、心地のよさたとへる物もないくらゐ。側へに大きな巖が突立つて、つたやくづの葉等からまつてる中に、愛らしや、姫ゆりの一本、小そう露にゆらいて咲いてゐる。何と云ふ可愛いゝ事だろう。此の上に風雅な松ども横にずーと出てたならば等、思つてる内、早や頂へ來た。山の上方に國境の石が立つてゐる。おゝ此處一歩すぎたら、私の國だ。石古うして昔を語り顏。吁今はなき祖母樣の殿樣江戸參勤の御物語、夜のつれ〳〵に寄添てまつりつゝ聞いた事もあつたが此の峠の所の面白かつた事。吁私は今此の峠を越して故郷へ帰るのだが、又いつの世に聞かれるだろうと、はしなくも思はれるのであつた。

見渡すと、山又山の深緑それより外に何も見えぬ、深山の奥に、我只一人、吹く山風に肌は寒い。

短歌

佐々木信綱選

特別第三賞

○ 羽後國角間川町　鈴木しゅん女

たちさりし心もしらでぬば玉の
わが黒髪はまたのびにけり

〔評〕感ふかし。

天

○ 鳥取市元大工町十七　岡垣幾重子

共に見し櫻咲きけり亡き父も
此世の春の花や戀ふらむ

〔評〕思ふかきうた

地

○ 日本橋區坂本町有賀醫院方　花田ゆき子

おん膝に泣かれむ限り泣かせてよ
泣きて涙の枯れば別れむ

〔評〕はげしく切なる情よく言ひ表はされたり。

人

梅　京都市上京上御靈前町松室方　松室靜子

君が名を誰ぞや呼ぶらん思ひして
月にそむけば風薫るなり

〔評〕情もあり景もあり。

秀逸

○ 廣島縣　薄女史

奥山の夕日淋しき墓原に
ちりてこぼるゝ白萩の花

〔評〕墓原のあれてさびしき風情あはれなり。

折にふれて　伊豆　野澤秀子

雛の日に雛もまつらず夜もすがら
老いたる母と糸つむぐかな

〔評〕やさしくやすらかきうた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

○　大阪　池田静子
病ませる母を脊負ひて山こえて
　野こえてくればくすし師いまさぬ

【評】孝子傳中にも見えつべき思想

○　栃木縣　松本ふくの
川ぞへの蕎麥畑白うたそがれて
　水にうするゝ夕映の色

【評】前の如し。

○　横濱　長者はち子
ほろ／＼と棕櫚の實水にこぼれ落ちて
　渡場寒き夏の朝風

【評】上の句よし

○　京都　竹下秀子
乳さぐる妹なかせじと抱きあげて
　母君みとる秋の夜半かな

【評】原作措辭いまだしく筆を加へたり、されど想すぐれたれば秀逸とす。

○　太田茂與子
御名のみは其み名のみは記しつゝ
　ひめたる戀に泣きつゝあらむ

【評】あはれなるうた。

○　大阪　日置高子
旅に痩せ憂に痩せしわが顔に
　紅葉散り來る夕暮の風

【評】旅にさすらふ人の面かげも忍ばる、四の句未だし。

○　越後　白菊子
とぼ／＼と蝶のあとおふ幼兒を
　笑みてみおろす白ゆりの花

【評】これも措辭は改作したれど想すぐれたれば秀逸とす。

秋雨　仙臺　白葩子
桃色の地藏の輪袈裟色あせて
　十王堂に秋の雨ふる

【評】かゝる思想この頃は言ひふりたれど。

行く秋　雜ヶ谷　中村せい子
きび畑の黍の穗ひくゝうなだれて
　小雨さびしき夕暮の道

【評】とゝのひたり。

○　日本橋　長谷柳子
ぬぎすての舞衣に月の風見えて
　灯かげゆらぎぬ水のおばしま

【評】上、下かけあはぬ難はあり。

河畔人　岡山縣　本田芳子
君やいつこ河邊に立てば流れくる
　さゞなみの面に影見ゆるごと

【評】下の句なほあるべし

戰死友　長崎縣　澁江みす子

勇み征く友を送りしたゝら濱
よせては返す浪はあれども

【評】いひざまは巧みなりとはいひえれど想あはれなり

○　京橋　鞠子

梳る髮に恨の長うして
雨たゞ寂しのきの白萩

【評】四句よく一首のこゝろとかなひたり。

○　陸中　黒澤美津子
さきくませと君を送りし夜に似たり眞萩花ちり月てりわたり、

折りにふれて　山口縣　永地菊枝
若き叔母が丸髷すがたしのばれて封じめゆかし口紅のあと

○　葉柳しんろ子
花うばら白きを傘にそひもちて小疾氣にする雨小みちかな

○　奈良　春枝
北野より梅見てかへる京の町おぼろ月夜になりにける哉

○　千葉縣　愛溪女史
君がはきし白金の太刀日に榮えて大野の櫻はら／＼と散る

夏山寺　三河　白萩女史
淸水くむひさごの上にこぼれけりあか井のもとの山桐の花

折にふれて　東京　靜子
うしとてもわが世のかぎり忍ばまし昔にかへるすべもなければ

雜　茨城縣　石塚靜江
螢とぶ夕顔の小蔭がくれ御ぐしかたげてとりましし筆

○　麹町　加藤雪子
屍となりし我友訪うて歸るさな友撞く鐘の音淋しき

○　伊豫　胡蝶
幾めぐりうき世の秋を重ねつゝ我身時雨とふりにけるかな

○　岐阜　藤本操子
風かをる森の野邊の朝な／＼なにさゝやきて露の玉ちる

○　千葉縣　遠川さと子
をさめたる棺の上にあらけなく播きおとす土の音の悲しき

登山　福岡　坂梨芳子
靈雲き野路を飾れる撫子を手折りつ辿る阿蘇の山道

○　陸前　菊地のぶ子
朝立ちの小荷駄が馬のひとつゞき野末に淡く夏の月あり

○　三河　澤田つま子
さゝ川の岸の花かげ柳かげいづれのかげに笹舟よらむ

○　下谷　太田あきつ子
亡き姉がなきおもかげのうかびきてきくにかなしき妻琴の音や

○　埼玉　長澤ひで子
朱鷺色の戸張りにひとり姫君の深き思ひに何しづむらむ

折にふれて　越後　白菊子
もろともにめでにしつきはなか／＼に物思はするたれとなりにけり

○　東京　山本とき子
この水の四五十里は宵毎を夢かよふ美しき里

折にふれて　群馬　石井とく子
君征きて未だ幾日もすぎなくに母君逝きぬ我いかにせむ

戰死軍人の母　能登　たちばな子
弔ひに見えしまろうど送りいてかくしゝ涙そと拭ふかな

○　滋賀縣　藤居えい子
かくれ行く沖の白帆に人見えて夕ぐれ淋し水鳥の聲

折にふれて　大和五條　櫻響子
君逝きて一人淋しく里川に笹舟ながし昔こふるも

樺太占領　大阪　宮永さい子
心地よきかち軍かなけふよりはまたも御國のものとなりつる

月　岡山　津島榮子

ゆふ風のすゞしき庭に立ち出て〳〵山の端見れば月いでにけり
○　麻布　さつき女
まばしだに別れとなれば物うさにまたの逢ふ瀬もたのまんずして
○　名古屋　獅子海中子
露の頃より待ちし紅葉狩今日か明日かと指をりくらす
○　下野　萬生とよ子
よき人に伊勢物語讀ませつゝ欹枕して聞く雨の宵
○　越後　三浦美以子
萩の戸の月をゆかしみ琴ひけばしらべよあはせて鈴虫のなく
○　廣島市　岡村嵩芽
やれ窓にさし入る影もさびしげに文机てらす秋の夜の月
○　浅草　上郷夕江
花もちて月に向へる姉の衣に影をとゞむるかごの鈴虫
夏菊を送る　丹波　柳原ふつ子
我がにはの夏菊あまた咲き出てぬ一枝をりて君に捧げん
雷後の月　上毛　赤心子
白雨の通りし跡の雲晴れて町賑しき夏の夕月
○　加賀　鹿子
同じ色に籬の花はほゝ笑むを去年に變りし我ぞかなしき
○　越後　中島康子
おく露もすゞしく見えて若松の葉末にやどる夏の夜の月
鹿　上毛　すみれ子
すみわたる鹿のなく音に出て見れば梢に高し有明の月
梟　上毛　柳月子
やま里の森のあなたに入る月の影ほのくらく梟のなく
紅葉　大阪　貴島波留子
しつみいる夕日が下にさえわたる七峰もみぢ美はしきかな
○　徳島　住友とき子
われ見たまふ君が優さしき眼眸に夢ともわかずたゞなつかしき
風前の萩　相模　靜江女
秋風に吹きかへされていと萩は露の宿りもとゞめざりけり
郡の友に　長門　孤雲女史
夫年の秋君が衣になぞらへし海棠咲きて思出多き
蛙　香川縣　素紅女史
夕されば心して行け春の野はうまいの蛙の夢ややぶらん
○　徳島　たみ子
石清水掬ぶとすれば白百合の露ちりこぼれ雲の月ゆらぐ
朝顔　京都　内本ふさ子
朝まだき窓の戸あけて眺むれば露をふくめる朝顔の花
恩師と別る　群馬縣　田所きよし
朝夕に深く頼める師の君に別れて後は何人か頼まむ
折にふれて　出雲　じん子
村人の繪圖取り出てゝ語りけり我御軍の勝の知らせに
○　福岡縣　副島梅子
なき君にあふよしもがな秋の夜に獨さまよふ夢の浮橋
○　美濃　中島きく子
沖島に雲くづれぬと見るひまに夕立わたる岸の松原
○　伊豫　霞葉女
見渡せば波路の末に影薄く消えかゝりたる白帆三つ四つ
○　美濃　尾花操子
眞柴かる賤も通はぬ奥山の葉分けの風ぞ涼しかりける
○　美濃　大西照子
楽しみは親しき友と打ちつれて花さきにほふ爛漫たる野に遊ぶ時
○　美濃　小林靜子
をやみなく降る五月雨にそぼぬれてしろき胡蝶のむれて來にけり
七夕　鳥取　上山千載子
七夕や今宵一夜を一とせの月日にかへて契りぬるらん
○　和歌山　田端やよひ子
世の塵にそみし哀れの人の子に掬びていなん此の岩清水
蟬　越後　小柳満玖
夕立の晴れて間もなく鳴く蟬の錦の羽に吹く風涼し
○　神戸　とみ子

（ハ）逝きぬ兄またうせぬ家うりぬ老ひて母ます此身いかにせん
靜縣岡　森　喜代

雷
雷の音はとほくさかりて雨過ぎし庭のおも涼し夏の夕ぐれ
上總　鈴木しづ子

○
捨てられし子は飢になけど渡良瀬の河のつゝみはたゞ秋の風
長野市　わかば

秋海棠
高樓に琴の音たえて虫の聲秋海棠に小雨そぼふる
上毛　汀柳女史

夏月
茂りあふ木の間の月の影すみて宿るも涼し玉の井の水
本郷　小島すみれ子

○
湧き返る清水堰き止む岩の上に高く鋭く鶺鴒ぞ鳴く
宇都宮　鈴木千代

女の道
たとめ子がふむべき道は數多あれどたふときものは操なりけり
愛知縣　粟清女史

折にふれて
夜はふけてみそらの月も西に落ち思ひみだるゝ寄宿舎のまど
山口縣　大和白百合

會見
ひたすらに語らんものと思ひして相見る時は言の葉ぞなき
長崎縣　淦江みす子

○
夕立の名ごり涼しき琴の浦磯邊の松に夕日かたむく
豐前國　竹内つる子

○
み社の一本杉に日は落ちて夕淋しく風吹きしきる
筑前　沖水子

○
君いかに我は悶えのこの夕星一つ落ちぬ君います方へ
神田　露子

亡弟を思ひて
去年の今日逝きにし弟偲びては今宵の月のうらめしきかな
小倉　白石しづ子

月
更けて行く軒ばの影も靜かにて草木もねむる夏の夜の月
山口縣　白蓮女史

露
こぼれ落ち又もうき葉に宿りけり小池の蓮の露の白玉
愛知縣　春水子

○
やみの夜も又面白し螢飛ぶ河邊のうばら風にかをりて
大阪　吉川入重子

名月
十五夜の月照る海に風なきて遙かの沖に眞帆片帆見ゆ
埼玉縣　小林雅

○
中々に待てはやなかぬ杜鵑さりとて初音をしむ頃かは
茨城縣　矢口達子

我が庭
水やりし十歩の庭に月さして川風すゞし虫の音さびし
紀伊　鈴木爽子

○
色あせて落つる椿の花見るにたゞ思はるゝ亡き母の上
小石川　深みどり女

白菊
村雨のめぐみのつゆにうるほひて今朝咲きそめぬにはの白菊
上毛　西窓女史

折にふれて
馬の背に寢せる桔梗女郎花まごの心のゆかしくもある哉
宇都宮市　金澤保子

鈴虫
あし原をわけつゝ行けば露ふかくふり出てなく鈴虫のこゑ
横濱　飯田うめ

をりにふれて
決死隊乘せたる船の影消えて波の音高し旅順口の沖
福島　今村清子

○
笛の音は牧場はるかにうすれ行きぬ若葉のかげに詩を思ふ夕
福島　水野芳子

暮春
七年を過にし今日を亡き妹がおくつきとへば胸せまり來ぬ
下總　篠本さく

○
君が住む里を訪はむと出て立てば行く手の森に雨雲の出づ
神田　渡邊登代子

○
旅出せし君が手植の撫子も今日を盛に咲き出てにける
赤坂　齋藤茂子

○
さゝ川のながれのすゑに童子見えてあしさくあたり白さぎの舞ふ
鹿兒島　無邪小女

○
よそに見し草葉のつゆをたひころもそでにかけてもゆくやまちかな
埼玉縣　三風げん

○
もも千種夕べの月に影宿りまねくは人かすゝきなりけり
群馬縣　岩田貞子

○

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

八千草の花さき匂ふ夕野みち
　かちどき高らかへりゆく君　下總　伊佐岡澄子

友の訃音
母君ははかなく逝きて只一人
　宿守る友の今日や如何にと　越後　白ゆり

折にふれて
消えやらぬ昔の夢をくりかへし
　一人さまよふ有明の月　越後　なでしこ

卯の花
思なくみだれて散りし卯の花の
　母の御墓を花かざりしぬ　廣島市　富田初子

螢
飛ぶ螢みぎはに近くおりゆくは
　おのが影をや友とみるらむ　埼玉縣　細沼藤子

○
螢螢の光殘して松原も
　岩も小島も霧に暮れけり　埼玉縣　長澤ひで子

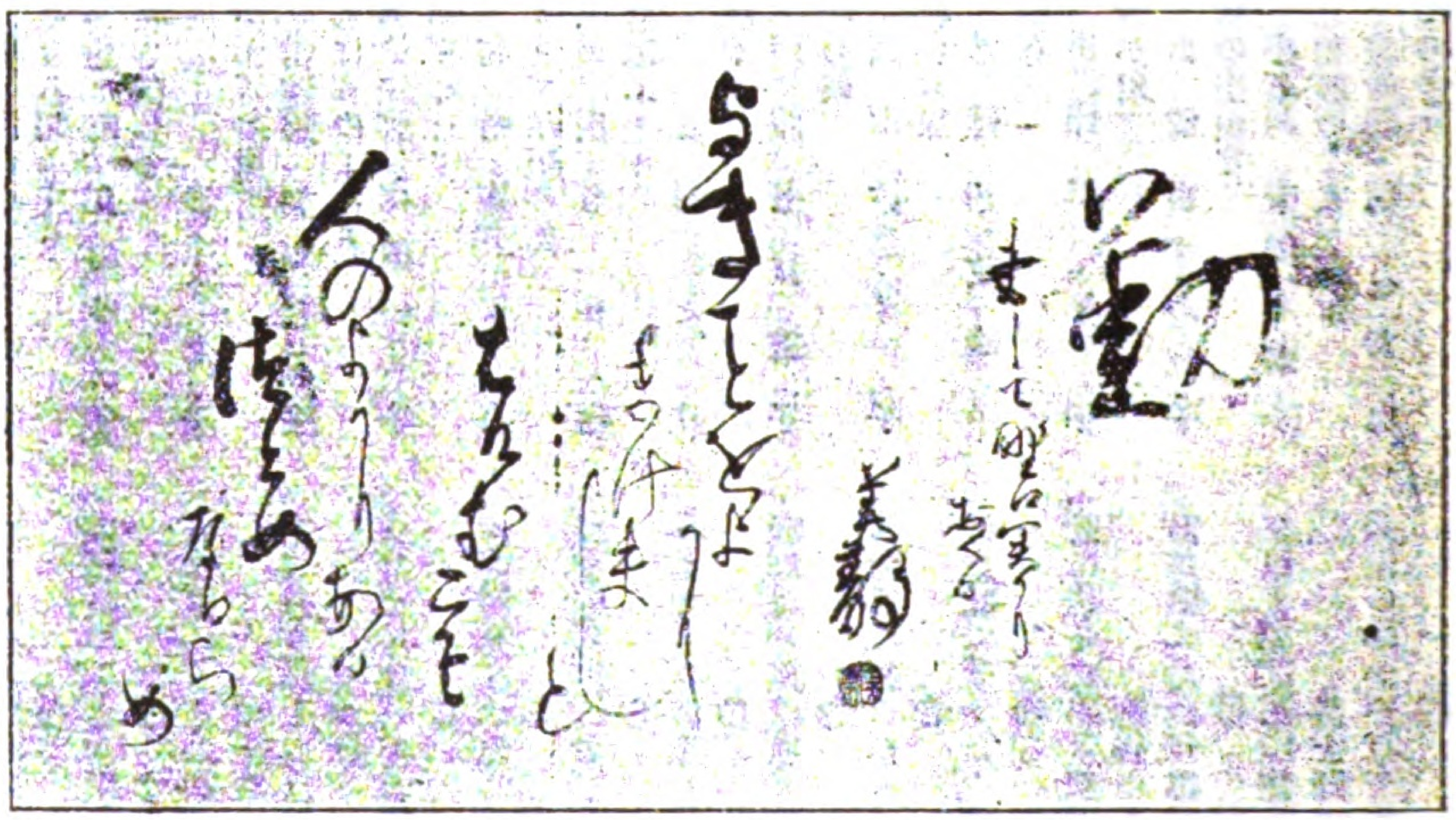
白百合
女の神のそと立ちませる姿して
　さ霧の中にねむる白百合　仙臺　美惠子

小猫を拾ひて
汝がくびの小鈴たびにし主は誰ぞ
　紐のむらさきふさはしの色　仙臺　白範子

○
稲妻の消え行く丘にたゞ一騎
　コサクの鎗の闇にきらめく　美作　金島もと子

○
とつ國にちりし大和の櫻花
　にほひかむばし萬代までも　小倉　安藤定州

里の夕
靜かなる里の小河の木がくれに



福羽美静子筆

　百合の花つむ小女子の影　神田　山木せい子

○
小川べに釣する夕月出でゝ
　足もと近くこほろぎの鳴く　京都　すみれ子

○
庭の面の青葉の色もまさりけり
　空よりおつる玉のしづくに　越後　白菊子

わかれ
空蟬のさだめなき世の常ながら
　けふのわかれのいとをしきかな　遠江　無名子

○
出でゝゆく父を見送りをさな子が
　おぼつかなくて萬歳をよぶ　福島　水野芳子

山中
ゆけど〳〵山また山のはてもなし
　そばたつみねにたにかはの音　三陽　加藤よし子

山家の五月雨
しと〳〵と小止みなく降る五月雨に
　水嵩増しぬ軒のせゝらぎ　秋田　中村靜子

螢
やがて虫の宿ともならんなつ草に
　漸しはひゆるほたる火の影　秋田　庄司錦子

秋思
花散れど實のれど君はかへり來ず
　何處を空に秋偲ぶらん　伊豫　曾根岩子

千代までもと祈りて
ふして思ひおきて數ふるたらちねの
　よはひは千代にこけのむすまで　富山縣　三島かをる子

○
かへりみて又かへりみる御社の
　木立の奥に子規啼く

短歌

○
星かげのうするゝ晨戸に倚りて蓮ひらく音をそゞろ聞きする　新潟　小島文子

○
暁の女が來くる小屋に月更けて人まつ虫の聲のさびしさ　麹町　川村ゆかり子

朝蟬
蟬のこゑしくるゝまつの梢より朝つゆおつる山かけの庭　ゆきゑ子

春の月
春雨の晴れにしあとの梅か枝にかゝるもゆかしはるのよの月　常陸國　加和なみ子

蓮
こぼれてはむすぼるゝ蓮葉の露にも月のかげをうつして　澁谷分院　林田いと子

○
みじか夜のれられぬものを朝な〳〵とく呼びさます朝顔の花　高崎　姫百合

折にふれて
何となく悲しかりけり五月雨のそぼ降る夕べ君思ふとき　周防　ちか子

○
砂白う潮の香たかき朝の濱月淡うして雲ちぎれ飛ぶ　信濃　美とり

明石
人丸の社のあたりたそかれて波の上わたる入相の鐘　姫路　船戸雪子

蟬
夕立の雲過ぎ行きてしげり合ふ檜にすだく蟬のむら聲　岡山　いさ子

折にふれて
水清きいさゝ小川の夕風にそよく柳の蔭ぞ涼しき　常陸　川並萩子

○
みひしさに夢さめやすき曉のかれもうつゝに君が幻　伊豫　三春子

○
栗ひろひ明日ゆかんとの玉章にまづ仰がるゝ秋の空かな　出雲　白すみれ子

○
ふりはへて訪ふ人もなきひとつ家の夕暮れ淋し初雁のこえ　小石川　奈美木翠子

山里
蹊ふかき深山の里の朝寒むや笑栗落つるさゝ柴の音　宮崎縣　明月女史

うら盆
亡き姉のみ靈の前にひれふして又袖ぬらすうら盆の月　山梨　お敏女史

○
蘆枯れて洲白き岸の捨小舟たまれる水に夕月のかげ　信南　なでし子

○
吾ひざにうまゐせる子をいだきしめて荒野におはす夫をしぞ思ふ　上野　花はちす子

閑居鹿
露もおき風も身にしむ隠れ家の軒端に鹿はなきて來にけり　和歌山　和田芳水

夕涼み
立出てゝ涼みする間はさす月の影のみ庭の主なりけり　本郷　澤貞子

○
夕月は尾花が末にほの見えて蟲の音淋し宮城野の原　陸前　齋藤たまを

○
はま寺の鐘の音しづむ夕まぐれ五百の俘虜の身動きもせぬ　させほ　横山愛子

○
をさなこの若葉の影に眠るかな柿の花輪を小手に掛けつゝ　駿河　夏浪子

○
賤が家の籬は破れて秋くさの花さく野邊につゞく庭かな　美濃　藤本みさを

○
すむ月の枝にかゝれる影ながら川瀬にうつる岸の松かな　美濃　中島きく子

○
吹く風に琴のしらべもかよひ來て月に涼しき夕顔の垣　美濃　内藤みち子

○
君に送る文かき終へて妻戸押せば十六夜の月雲にかくれぬ　大阪　田川榕子

雨後の月
君は歌にわれは繪筆に今宵この雨後の高嶺の月寫さむか　大阪　田中常子

○
ひれもすは花に憧れ夜もすがら星に思ひを描く春かな　下總　伊藤みち

馬上聞蟬
兵士のあかきはやめてのるこまにすゝしく聞ゆせみのもつこゑ　和歌山　和田芳子

○
亡き母の愛でし小庭の姫子松月影さして思出て多し　群馬縣　萩原みさを子

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

○　董の江子
高欄に赤ひとしきり桃花ふりぬ金婚祝ふおぼろ夜の月
君のみたま　京都府　松田ひで子
都となりてけふもろひとに送られし君のみたまやいづちさまよふ
○　横濱　風岡やす子
ふれの中にから歌うたふ聲すなり千曲のかはの秋の夜の月
○　さゆり子
空こがす山火事のあかり背にうけて山を下りゆく猿のむれ
○　群馬縣　前村とり子
化粧して鏡に笑める人わかし雨おもしろき葉櫻の宿
○　駿河　石神喜惠子
人みなの心濁れる世なりともわれは學ばむ白蓮の花
○　上毛　兒島野の花
波光る沖の遙遠く眺めては蜃樓と消えし敵なしぞ思ふ
折にふれて　廣島縣　池田蕃子
旅に病みて母の玉章よむ夕べ歸雁一連月に啼き行く
○　日本橋　植松ひさき
灯ともして歌思ひます姉君の後れ毛涼し夕がほの窓
折にふれて　東京　貞子
はかなさや君が心の秋風に乾くひまなく袖に雨ふる
○　常陸　酒葉つれ子
人も無き細き畔路辿り行けばゆふべ淋しき初雁の聲
○　中國　青山文子
咲きかゝる賤が垣根の夕顔に夕日斜に蝉のなく
秋夜の月　靜岡　たか子
秋の夜のふけゆくまゝの月影はたゞ何となう身にぞしみぬる
○　山口縣　孤舟女史
亡き友の永眠りし野邊に侍へば時雨さびしくきり〳〵す鳴く
初秋　秋田　天野菊野子
なか〳〵に訪ふ人もなき賤が家をおとづれにけり今朝の秋風
河月　大阪　廣瀬先子

小萩なく里の小川の水の面に塵しめてもやどる月かな
○　新潟縣　すゞしろ
をみなへしのみと思ひしこのそのにましろ尾花をかりつくしてよ
夕顔　本郷　小川麗香子
山門の朱のをばしまくちはてゝ傾く軒に夕顔のさく
折にふれて　越後　千秋子
はら〳〵と櫻花ちる此夕べ父にわかれて故郷をいづこ
七夕　廣島縣　藤本藤枝
世の人のうきもかなしも七夕の年に一度の逢せ思へば
簾　秋田　今立いま子
姉君の我よぶお聲聞ゆれどお姿見えずみ簾のかげ
○　長崎　一少女
五月のふりつゞきてもしのばるゝ昔わかれし友やいかにと
○　上毛　松村秀山
さしのぼる月をさえぎる雲間より音信もたらすかりがねの聲
亡き母を思ひて　東京　靜子
思はしと思へどかなし亡き母の手うゑの花のかをりそめにし
○　美濃　村山ひさ子
緑葉の茂るひまよりたつ煙そこに涼しき家もありけり
草花の露　廣島　和知廣子
立田姫のおなじめぐみの白露に玉をつらねし八千草の花
なでしこ　廣島縣　萩の屋
露おけど色もかはらで我がいほのまがきに匂ふやまとなでしこ
○　神奈川　佐久間芳子
風をり〳〵水にさゆらぐ若葉かげ櫓のおとゆるし夏のたま川
○　新潟縣　小菅まさ子
天津女の通路ならし久方の雲井に渡す虹のかけ橋
○　遠江國　鈴木睦子
懐しき君がたまひし繪葉書に秘め歌しるす夕暮の窓
残暑　伊豆國　ひさ子
夏衣またひとへにて秋風を木下かげにまつ夕べかな

○

呉市　木原梅子

荒海の藻屑と消えし兄上は今宵の月をいかにみるらむ
折にふれて
鳥取　天野清

ほまれある死よとは知りつもしもやとはかなき望みゆめみつゝのみ
折にふれて
岩代　村岡露子

やみふせる母にさゝぐと谷陰に清水汲む夜を月朧なり
○
高知　天野かげを

今一つ受けよ朋れの盃にやどる月かげ餞として
○
徳島縣　浦上登志子

病む母を道に憂ひて急ぎゆけば小雨そぼふり時鳥なく
別れ
大阪　飯尾美和子

今日よりは誰れに向ひて琴彈かむ心ゆるしゝ君に別れて
○
麹町　重田靜子

四年前ともにしづかにかたらひし夜をさながらの雨の音かな
○
南總　桂子

病みませる君をみとりてあぢきなき今年この秋はや暮れんとす
籠虫
埼玉　長澤節子

小鼓のおとやいづちとわけ入ればはたととたえて唯月のさゆ
○
小石川　近藤愛香子

歌にあきて池の金魚に餌をやれば小雨ふりきぬあやめさく朝
○
埼玉縣　山下要子

露置う小萩ちりしく野の夕べ月の寒きに虫なきやまぬ
○
牛込　高橋まき子

三十の砲車はすぎて夕日さす檜原松原たゞ蟬の聲
○
茨城縣　岩田清子

新墾の山畑十里たそがれて立木遙かに瓜小屋の見ゆ
○
東橋　土屋重子

青田十里吹きくる風もたそがれて水鷄なくなり小山田のさと
○
牛込　高橋ふさ子

手折らむとふれしわが手のをのゝきぬあまりに清き白百合の花
○
相模　曲[illegible]會

故郷の高峯に湧きしむら雲よ乘せて來ぬかも我戀人を思ふ
○
栃木縣　たけ子

兄上のおもき傷との此知せやみます母に如何に語らん
百合
伊賀　平井とし

池水におのが姿をうつしみてひとりほゝ笑む姫ゆりの花
○
越中國　加津山花子

我がせこを迎へんものと磯行けば雨に友呼ぶ夕濱千鳥
晩夏
宮城縣　荒ちよせ

夕毎に河原さまよふ漁人の頬の肉落ちて夏は老いたり
○
島根縣　戸山蝶子

酒賣れるおきな媼が峠茶屋馬子のはな唄節おもしろき
○
福岡縣　櫻溪女史

菊の香のたゞよふ露に盈すりてなつかしき君に文まゐらせん
將士の戰死を思ふ
廣島　永田きくの子

心なふ風にふかれてちるさくらちりてぞなほもをしまるゝかな
秋の歌のうちより
四谷　靜田秀子

水車めぐる野川の夕かぜにおきてはなびく岸の尾すゝき
折にふれに
富山　いうけふ

鳴き渡る雁の涙に袖ぬれてさとなつかしき夜半にもあるかな
○
能登　加野こひ子

名に高き美男いくさにいてゆきてことしの盆の踊はさびぬ
伯父の墓にて
栃木縣　秀子

香の烟ほのかに見えて新墓の手向の花に風そよぐなり
蟬
神戸　高井菊江

見れば取れとれば書かんとおもほゆる蟬しいかなる靈の有るらむ
○
大阪　板橋菫夢子

花の如き乙女乘せたる車過ぎて雌蝶雄蝶の後慕ひ行く
○
安藝　紫紅女史

秋姫の裳の風にゆるうふれて岩かれ葉紅音なく散りぬ
折にふれて
長野　飯塚ぎん子

おもしろや月かげのせて行く舟の棹にみだるゝ白なみの花
○
日向　藤田しん子

鹽を燒く海女が衣の色あせて鹽もる竈に夕日さすなり
折にふれて
岩代　大中小牧子

手を取りて土筆つみにし道のべは花野となれど君はいまさぬ
○
山口縣　田中美子

ともし火の淡き光に糸つむぐ御軍人の妻いとほしき
○
常陸　白鷗女史

紫陽花の朝の小雨にうつむきて夢みごゝちの草堂の人
月を觀て
富山縣　長瀬とし子

兄上は今宵の月をいづこにて銃を枕に眺めますらん
白壁を見て
佐賀　小枩

來て見れば昔しながらの白壁に殘るも戀し君と我名の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

○夕顔　麹町　翅香女
うたひうたふ野もきこえて夕かほのはなさくかきね主人ゆかしき

○　長野縣　手塚とも子
夫思ふ夕べ淋しくたそがれて悲しく光る秋の夜の月

○富士山　本郷　良方女史
松原の中に家あり誰すみて朝な夕なに富士を見るらん

○　兵庫　飛早女
深張の傘の行方を見守りて友を見送る村はづれかな

○　信濃　佐藤やす子
亡き父が愛てにし菊も咲き初めて思ひ出多き秋の夕暮

○藤　岐阜　田中悦子
常盤なる松の緑も分かぬまでかゝりて匂ふ藤浪の花

○　佐世保　いし子
たらちねに文物せむと筆取れば硯の海に月は出にけり

○蓮滿池　愛知縣　田島秀子
いづれよりまつみめくらん大澤の池にもあまる花蓮花

○　越後　野瀬睦女
月うすき湖添ひ小徑行き行けば蔓草茂り水雞鳴くなり

○紅薔薇　伊豆國　上原しげる
彼の君がおくり給ひし紅薔薇は君を戀しとしをれけるかな

○　相模　見上まつ子
寢もやらず物思ひ居れば夏の夜の月深くして郭公鳴く

○　上總　實川高子
山里も春は來ぬらし賤が家の畑の末もかすみそめぬる

○　筑後　大島菊子
秋風や胡笳の響のたえ／＼に枯野血に染む北支那の原

○月　千葉縣　小林壽江子
夕立ちのはれわたりたる神園の芭蕉ゆらきて月いでにけり

○　高知　横山せん
十六夜の月に奏づる妻琴の調べに通ふすゞ虫の聲

○折にふれて　金澤　大地波子
我せこの武運つたなく擒はると聞きし今宵を雁鳴き渡る

○舊都の花を見て昔を忍ぶ　失名氏
思ひ出やしがの御園のはるの宵にありし昔の花のうしさな

○笛　群馬　松江よしえ子
折々は笛の音とほくきこゆなり木立にかすむゆふぐれのさと

○　和歌山　小川としよ
道のべになく鈴虫の聲きけばそゞろに戀し故里の空

○海邊に宿りて　京都　長谷川芳子
海士は寢いねしつまりて打よするなみの音高く夜は更にけり

○　上毛　幾貝壽惠
背の君は今宵の月を如何にみん秋風たちし滿洲の野べ

○　横濱　安田政子
潮の音も近く聞えて山かげの庵こそ夏は涼しかりけれ

○　横濱　木村梅子
螢飛ぶ川邊の宿は連のよるかけてこそといふべかりけれ

○遠村蚊遣火　兵庫　山本喜子
蚊遣火の烟ほのかに小夜ふけて月影落つるやまのべの里

○　多賀　滑川登免子
島かげに漁火一つほのみえて月明らけく千鳥なきわたる

○兄を思ふ　三池　横田綾雨女史
兄君の愛て給ひし盆栽にものかなしげやきりぎりす鳴く

○　出雲　みやび子
川の面にやどる月かげ夏の夜に消ければ魚のすがたもよまれぬるかな

○朝顔　名古屋　しき子
とり／＼に咲きそひたる朝顔の花の盛の美しき哉

○古里の秋　上毛　關口はつ子
時を得て今古里をおとなへば老杉枯れて萩の花ちる

○秋風　愛知縣　熊澤由子
亡き人の石碑の前の玉萩をちらす秋風身にぞしみける

○蓮　大阪　愛雨
吹く風に池のはちす葉うらがへりこぼるゝ玉ぞ涼しかりける

○尾花　茨城縣　小泉小萩
くれて行く秋をしばしと招ぐらむ末野の尾花つゆにぬれつゝ

○　遠州　藤井みち
つかの間に散り行にけり廣き野の葉ごとに宿るつゆも朝日に

○師の君を送りて　鹿兒島　田中龜代
歎きつゝ岸邊に立ちてゆかしく船をまさきくあれと我は祈りぬ

○秋の月　武州　岩井あい子
しら雲をわが背に負うて飛ぶ雁の歌も讀まるゝ秋の夜の月

○折にふれて　栃木縣　撫子女史
千早振る神の祠にぬかつきて戈とる君の幸や祈らん

○雲雀　大阪　久須美白鳩
空かくる翼は伸びず籠の中に嘆く雲雀の聲ぞ悲しき

○　茨城縣　栗山松波子
雨はれて色香ゆかしき夕顔の垣根を照らす夕月の影

○なりにおいて　本所　井口清子
夕に立少女がこゝろも霑さじとしはしを頼む夕顔のもと

○　信濃　關うたかた
見ぬ梅の香にあこがれて隣家の園生を訪へば琴の音やみぬ

○　兵庫　柳田のぶ子
こゝ六とせ琴に睦みし妹ゆきておもひ出多し秋の夜の月

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

秋田　大越幹子

○高樓の簾たれを洩るゝ玉琴のひゞきに月もさし出にけり　下谷　杉田業子

○三年なほ癒えてやすみふす病窓の芭蕉葉破る秋風のこゑ　大阪　池田信子

○裾とりて淺瀬を渡る夕月夜岸の木陰にひなうたの聲　秋田縣　出羽雪子

○契りてし涼みの友は遲うして夏の夜の月たゞ更けにける　神田　大澤隆子

○小琴抱きておばしまに立つ姫君の月にほゝ笑む顔うつくしき　信州　小川秀子

○師の君のめぐみの露もあだし身の花散る風に消ゆるうたてさ　越中　松木英子

○銀の笛を奏づる星月夜南欄の葉かけ興そゞろ湧く　伊豆　尾崎あい子

ほとゝぎす
有明の月にわかるゝむら雲を住家になしてなく時鳥　石川縣　棚橋佐久子

蟬
夕立のはれ行く森のしたかげはせみのなくれもすゞしかりけり　尾張國　竹齋女史

海
水や空そらや水なるをち方にあらはれいづるま白帆のかげ　刀根の河邊　清月子

○ふるさとのたよりとたえぬわかれこしわがはらからよいかにおはする　上毛　はなはちす

○ふるさとの母を思ひていぬるゝ夜半虫の音ほそく秋の雨ふる　常陸　西村波留子

秋の夕暮
力なき秋のいり日にてらされてたび僧ひとり野べにさまよふ　千駄ヶ谷　桂梅子

夕顔
妹がみ墓詣でのかへるさにさびしく咲ける土手の夕かほ　東京　金子波子

朝顔
朝露のまたひぬまにと起見れば花美しき垣のあさかほ　南千住　江口春子

隅田の月
隅田川水にうつろふ影みれば月の桂は櫻なりけり　羽前　鈴木薑子

行春
風そよぐ片山里に琴たえて月は朧にさくら花ちる　千葉縣　森美智江女史

○鶏のなく小川の柞色つきて薄き夕日に秋風のふく　下毛　松本ふくの

○出ゆきし夫は歸へらず秋立ちて獨り淋しうあさ田かりほす　芝　頴川とき子

葉端書に添へて
國のため盡すみくにのつはものを慰さめ問いんこの葉はがきに　陸中　蟲毛利子

○たそがれの野の崖道たどりくればいづくともなくましらなくなり　新月女史

○野には花み天には星人にして多い美はしき君をこそ見れ　茨城　石崎秀子

○西風を片帆に見せて港江に秋の乘りたる舟つきにけり　愛媛縣　野口留代

夕立
夕立ちは高嶺に晴れて久方の雲井に冴ゆる有明の月　日向　國井ちか子

立秋
詩人の病みて倚ります西の窓一葉靜に秋の風ふく　春月女史

○風清き田面ふ月の影さえて稲取る子の墨畵に似たる　讃岐　つる子

海上朝
島かげの漁り小舟の灰見えて烟たつなり朝餉たくらむ　上毛　ゆふ霞

○秋野原のこんの月に花匂ひ虫の音寒う秋風ぞ吹く　茨城縣　大部春涙子

○一人たび山よ雲よとうたひ來れば麓に暮るゝ利根の夕波　陸中　黑澤美津子

○紫陽花のゆかりの色のあせしより旅なる君の音信たえぬ　大阪　鈴木女史

山里の初秋
落葉たく烟の末もかすみきて我が山里に秋はきにけり　三河　柳てい子

斥候兵
はれ出づる月の光にいさましくこまたてなほすますらをのかげ　常陸　千代子

戰死者の親を思ひて
君のため露と消えにし人の親の心やいかに秋の夕ぐれ　豐後　平山龍子

○何となく君が喚ぶらむ心地して出づれば暮の鐘の音細き　京都　飯田優香子

○冴へ返る月に川瀬の夜は更けて船歌遠く風しめやかに　橫濱　高田みつ子

菊
美しく又もこの秋咲けゝと妹がうゑし豆菊の花　周防　壽惠子

百合
何となく床しき花と姫百合を手折りて蝶に追はれけるかな　福岡縣　松尾朝子

○いやしげき綠の影にやすらひて今日の暑さを忘れける哉　廣島縣　安達眞子

○こそゆきし妹しのびて此夕片身のアレバム出し見る哉　岐阜縣　青木久江

○幾度も泣く子に筆を止めけり無事ぞと知らす文をかくにも　常州　春翠子

友の寫眞を見て
見ることに戀しさまさる君がかげ君は日のかげわれは葵の花

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

抒情文

日本女子大學教授 鹽井文學士選評

天

○早稲田

三河豊橋かじ町五十五 淺井ふみ子

日は早山の端を離れて、朝焼の雲も次第にもとの色に復つて、空は高き紫に澄むだ。冷々と身も引き締まるやうな心地好き風に、つゞれの袖を靡かして、露をしどゝの畔に彳んだ私は、華やかな都をも、譽れある名をも忘れて、今迄知らなかつた樂しさに、胸を躍らすのであつた。

朝倉川の岸に添つた、我が五反歩の早稲田は、垂穂重く打ち傾くまで、豊かに實つて、眩き日を受けて黄に輝き、とも摺れる葉のさら／＼と、秋の歡喜を囁いて居るのである。嗚呼何といふ美しい快い眺めであらう。卯の花くだしの中に、早苗取つたのも、暑き日に照らされて、水草を拔いたのも、つい此の間のやうに覺えて居るが、もうこんなになつたのである。其の間、風や虫や、さては旱につけての心遣ひは、何程であつたらう。併し、其れは去り、是れは來て、汗と膩を流した、我が戰ひのあとゝもいふべき田の面は、美しく實つたのである、其れを靜かに見る潔い喜びは、黄金のためには骨肉も相せめぐ都人などの、夢にも知らぬ處であらう。綾錦に包まれ、馬車に召して、夜會に臨む、やむごとなき君も、人知れず拭ふ涙はありと聞くものを、何の苦勞もなく日を送る私は、如何に幸福なことであらうか。身に纏ふつゞれの衣は薄いけれども、お母様のみ情がこもつてあれば、いつも暖かである。心ゆく朝鳥の音を聞き、燃ゆる夕暮の雲を眺めては、夙に行きて晩く歸る、野面の仕事も辛らくはない。名もなく朽ちてゆく、小草に似たる賤の女の、淡く榮なき一生も、大神の御眼には、世にときめく人の、民草の血を絞つて、豪奢を極められるより、尊く見え給ふかも知れない。不義理なことをして、大きな屋敷を持つ人もあるけれど、其家とても、軒傾く我住居とても、降る雨、照る月に、何の變りもないのである。狹き塗籠などの中に、苦しめて置かずとも、鳥も虫も庭に來て、樂し

げに鳴くし、作らねど秋の花は、美しう野に山に咲く。木犀かほる月の夜、鳴き渡る雁を仰ぐとも、松の露散る山本に、茸を取つて遊ぶとも、心のまゝて、誰れに根をかふこともない、あゝ幸ひと樂しみの、溢るゝはかりの今の身で、儚き名や譽れに憧れた、昔を思へば、夢のやう。

おゝ！向ふの川堤をいらつしやるのは、お母樣である。早く仕事に取り掛らう。と、草に置いたる利鎌を取れば、風颯と、田面に黄金の波立つて、早、稻は田と別るゝ風情である。あゝ此の出來榮を、茜の下なるお父樣と、滿洲に居らつしやる兄さんとに、一目なりとお目にかけたい。

（雨評）材料にには、別に斬新なるものあるにあらねど、錬熟せる筆づかひは、確に今回の抒情文中の天とするを得べし。

地

○君ちやん

周防　野百合

「火砲の響遠ざかる、跡には蟲も聲立てず……」淸い涼しい聲の、それはおとなりの綾ちやん、あゝあの筒袖の浴衣に淡桃色の帯、紅のリボンに結んだ御下げの髪まで、見れば見る程、君ちやんに生き寫しだ。

あゝ、君ちやんは今どうして居るだらう。矢張り綾ちやんの樣に唱歌を歌つて遊んで居るだらうか……と思ふと、ありありと眼に浮ぶ、あの涼しい松蔭でとき色の帯の端を、夕風に拂はせながら、

「姉さん、東京つて所は、そんなに遠いでせうか。三百里もあるつて。」

と寂しさうに、白い雲が一片懸て居る東の空を仰いでから云つた君ちやんが、天使の樣な愛らしい後姿。

あゝ幾百の山河横はる彼方、おなじく此の影淡い新月の光を仰いで、君ちやんの母樣も、今君ちやんの事を思つて居らるゝに違ひない。

「だつて、今度の母樣も、君ちやんを可愛がつて下さるでせう」と、妾は何氣なく。

「可愛がつては下さるけれども……」憐れみを乞ふかのやう振り仰いだ、涼しい瞳に溢れた一雫、あゝそれは、君ちやんが生涯の、涙の歴史の第一頁を染めたものではあるまいか。

それも一とせの昔、事情あつて、我が一家は此の地に移り住む事とはなつたが。

雨の夕、風の朝、思ひ出さぬ事はない。今年は九つ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

定めし大人びたてあろう、滴るやうた髪は房々と延びたてあろう。が、愛らしいあの面ざしに、愁の雲が懸つては居まいか。愛らしい手に書かれた日記帳が、涙を以て埋められて居はすまいか？……あゝ、

「眞白に細き手を延べて……鈴振るやうな聲がまた、窓を開けば、すぐ下におとなりの庭、幸福な綾ちやんが、優しい母樣に手を引かれて。あゝ見れば見る程、君ちやんに似たうしろ姿。

（選評）可憐なるを愛して地とす

人

○亡き父上をしのびて

紀伊　丸山文子

去年の十二月から職工となつた身は、二六時中殆ど食休みもせず、命も縮まる樣な紡積工場で、くろ汗流して働きづめに働いて、やつと一日の業を終へて、家に歸つた。隣りの笑ひ聲のもれ聞えるのは、慥に孝ちやんの聲だ。もはや明日から夏休みだと云ふので、豫習もいらないから、おとうさまや、おかあさまや、姉さんや、弟さんと、まどゐして、面白う話をして笑つてゐなさるらしい。嗚呼私もおとうさまが……お死なさらなかつたら、もう孝ちやんと一緒に四年生（高等科）になつて、そして、明日からは樂しう遊べるものを。今は遊ぶと云ふ事は夢にもない。いつ御山の櫻がさいたやら、いつお寺の楓がさかりやら、いつ土地の鎭守祭がすんだやら、おとうさまの命日の墓參さへ、いつもおかあさまひとりなさるのだ。おとうさまがもうすこしおゐてなさつてくるればよいのに、せめてわたしが卒業しておとうさまのお仕事を少してもお手傳申してからであつたらよかつたが。噫、なぜあんなに元氣のよいおとうさまが、五十の老の波もうちよせぬうちに、なくなられたのであらう。ほんとになさけない事だ、世には神も佛もないのであらうか。木が靜にならうと思つても風やまず。おとうさまに孝行をして御恩のいくらかおかへし申さうと思つても、此の世におゐでなさらず。毎朝位牌に香茶をおそなへ申すばかり、どう思つても仕方がない。もう十日ばかりすれば、于蘭盆がくる、其の時には、おかあさまと御一緒に、精神をこめて、おとうさまのみたまをお祭り申さう。嗚呼、今頃はみたまは何處にゐらるゝてあらう。あの廣

い廣い天であらうか。あの寂しいお寺の山であらうか。

（評）雖いまだたど〳〵しき處あれど、可憐なる情のすてがたきものあるを以て入とす。

秀逸

○失望

秋田縣　出羽雪子

手紙やなんかだと、私直ぐ開封して見ますが、自分の投書した雜誌ですと、只ズゥ〳〵見ては、興が薄いといふもので、右掌を其の表紙に、左掌を其の裏に當て丶、暫く眼を閉つて、『私のは沒書では無かろうか。否々、載つてるに違ひない。而も賞中に!!』と。夫れから靜かに眼を開いて見るのです。其の見るにも、決して初めに目次は見ません。若し初めに目次を見て、自分の名が有りませぬと、『あゝ、私のは賞でない!!』と、既に其處で落膽して、あとは見る勇氣が失せて了ふのです。又、一頁から順に見て行くとしませうに、先づ甲賞、次に乙賞丙賞と、早や登賞の部が盡きても、自分のが載つて居ませぬと、『あとは見たつて駄目よ。よし載つてたつて、多寡が知れた賞外なんだもの』と、自分で自分の愛想をつかして了ひますから、是も不可ませぬ。それ故私は、自分の投書した雜誌は、いつもお終いから見るのです。そうしますと、初め自分のが見當らなくつても、些とも落膽しませぬ。何故といひますに、お終の方には載つて居ず。沒書にされた筈はないから、乾度首めの方の賞の部に入つて居るだろうと、其處に一縷の望の綱は絶えないからであります。處が、自分の作は、選外にも無く、秀逸にも有りませぬから、是れは必ず、賞中に當選してあるものと、今度は目を大きくして見て行きます。だが丙賞にもなく、乙賞にも有りませぬ。さあ今一つ!! 今度こそ私のが……と、大事さうに頁を送ること、あゝ止めませう。止めませう。他の方が、整と一等賞を……



今度もまた。

そこで私は、深い〳〵失望の淵に沈んで、再び敢て筆を取るの勇氣はないのです。

（評）そこが勇氣の出し所です。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

○友を懷ひて

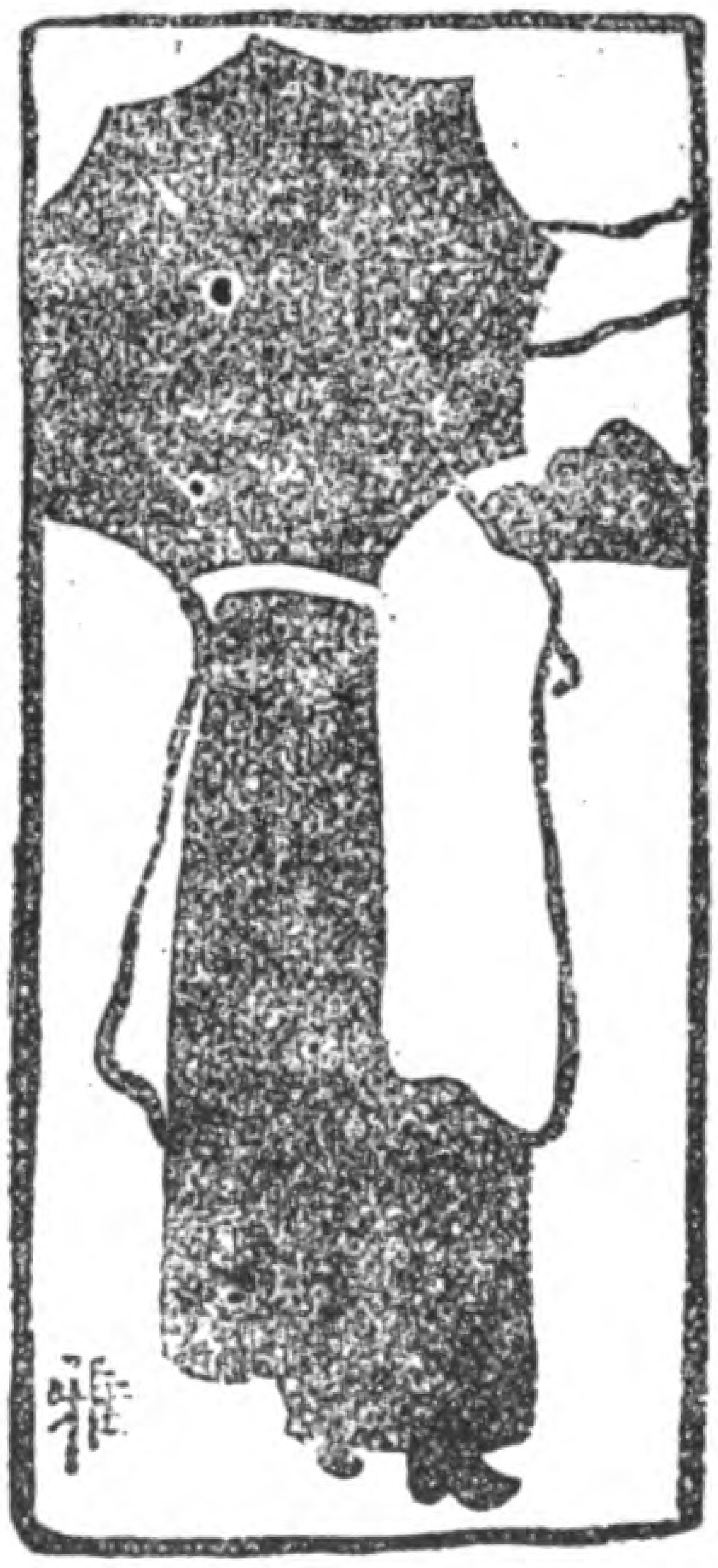
長門　孤菫女史

ら悲しきけふの日も、既に暮れそめて、臙脂を流し西山、漸次にかすれ行く折しも、何處の工場か、最後の汽笛の、細く、長く、餘韻は遠く彼方の森に響いて、夕暮の哀れを添ふるの時、我は憂愁の胸を抱いて、木の葉散り來る丸窓に身をもたせ、東に走る雲の行方を眺むるともなく眺むれば、思ひは又も彼の友の上。

別れて茲に一ヶ年、あゝ君は今、山海幾百里を隔てし旅の空に孤客の御身、さらぬだに思ひは增るきのふけふ、まして多感の君、いかに眺めさせ給ふらん、落つる木の葉、亂るゝ雲にも思ひをよせて、古鄕偲ぶの露に袖をや絞り給ふらんか。

思ひぞ出づる、去年の秋、落葉物の哀れを語るの夕、萩の上葉におく露のそれより滋き涙の袖を絞りつゝ、離愁の恨みにえ堪へで互に堅く握りし手のいかに放ち難かりしか、二人抱いて泣き顏をれし其姿、あゝ運命の神は哀れとも思さでか、魔力もて強てそを引き放ち、最後の宣言は嚴かに下されつ、そむき難き神の命に、遂に二人は血涙を呑んで、君は東に我は西へ、見かへる中は、又と無情の秋霧に隔てられつ、あゝ我は辛かりき。泣きに泣きて、世の無情を憤りぬ。

爾來盡しもあへぬ一枝の筆に、堪へ難き思の一片、送りて偲ばれ、送られて泣きつ、かくて三百六十有餘日、あゝ我ながらよくも忍びつるかな。おゝ、それよ。もの云ひまさねど、君が寫し繪は、常にわが書齋の壁に……



思ひ得堪へぬおりふしは、密に取つて頰にあて、キツスし、あつき涙注ぎしも幾度か。あゝ懷かしの友、戀しの君、我はもはやえ堪へじ、胸に集まる忍び草、刈らんによしなく、遂に忍びに狂はんか。

思ひあまつて熱涙一滴、二滴、又三滴!

涙の顏をもたぐれば、あたりは既に小暗く、露になやめる白萩の花、風なきにハラ〳〵とこぼれぬ。おゝ、此白萩、嘗て君が白衣の天使とたゝへ給ひしそれなるに、さなり、小枝つみとり、そが露硯にうけて、忍ぶ

にあまる言の葉のかず〲、紙に匂はせ戀しの君に送らんかな。

（評）花の美はしきものはあれど、實のこれにともなふものなきを惜しむ。

○戀し故郷

備前　松本もと子

あゝ戀しき故郷よ、なつかしき故郷よ、三年の昔、村はづれの土橋の上に佇みて森蔭にかくれんとする、わが家を見かへりてより、遙けくも天涯の孤客となり、こゝ千里雲へだつる異郷に、いたづきの身となりて、こゝに幾日。癒えんともせで、日々に弱りゆくわが面かげや。

瞑目して、靜に過去を、偲べば、幽けき記憶の端を辿りて、夢の如く出たさるゝ故郷のさま。千秋の翠を飾る。天神山下、さゝやかなる小川をひかへて、わが戀しきホームは在る也。六十に近き父上と病多き母上とは、淋しう妾が業成らむ日を、指折り數て待ち給ふ。夕顔棚の傍に、火遣りたきて、今頃は定めてわれを語り給ふらむか

故郷の山、故郷の川、今尚ほ昔のまゝに巍々として聳え、琮々として流るゝならむ、かつては、朧ろ夜花みだれ散る春戸に立ちて、春の歌うたひたることもありき、或は鐵も溶けなん夏の眞晝、屋後の森、一莖の白百合、芳香を放つ處に、一卷の詩集を繙きたることもありき。龍王谷の紅葉も、大ヶ岳の雪も、眺めて興したることもありき……。

藥服むべく、やをら起き上りて、ひろげ見る故山の地圖、涙にうるほへるわが眼には見分け得べくもあらず。

あゝ、仰臥いく月、病何時の日か癒えん。

（評）想詞共に今一入の苦勞を要する文なり。前途多望、奮發してつとめられよ。

○我が身

兵庫縣　飛早女

「雪さんや、朝顔を持つて來ますよ」と、母樣は室を出なすつた。後姿を見て、思はず涙がこぼれた。……。

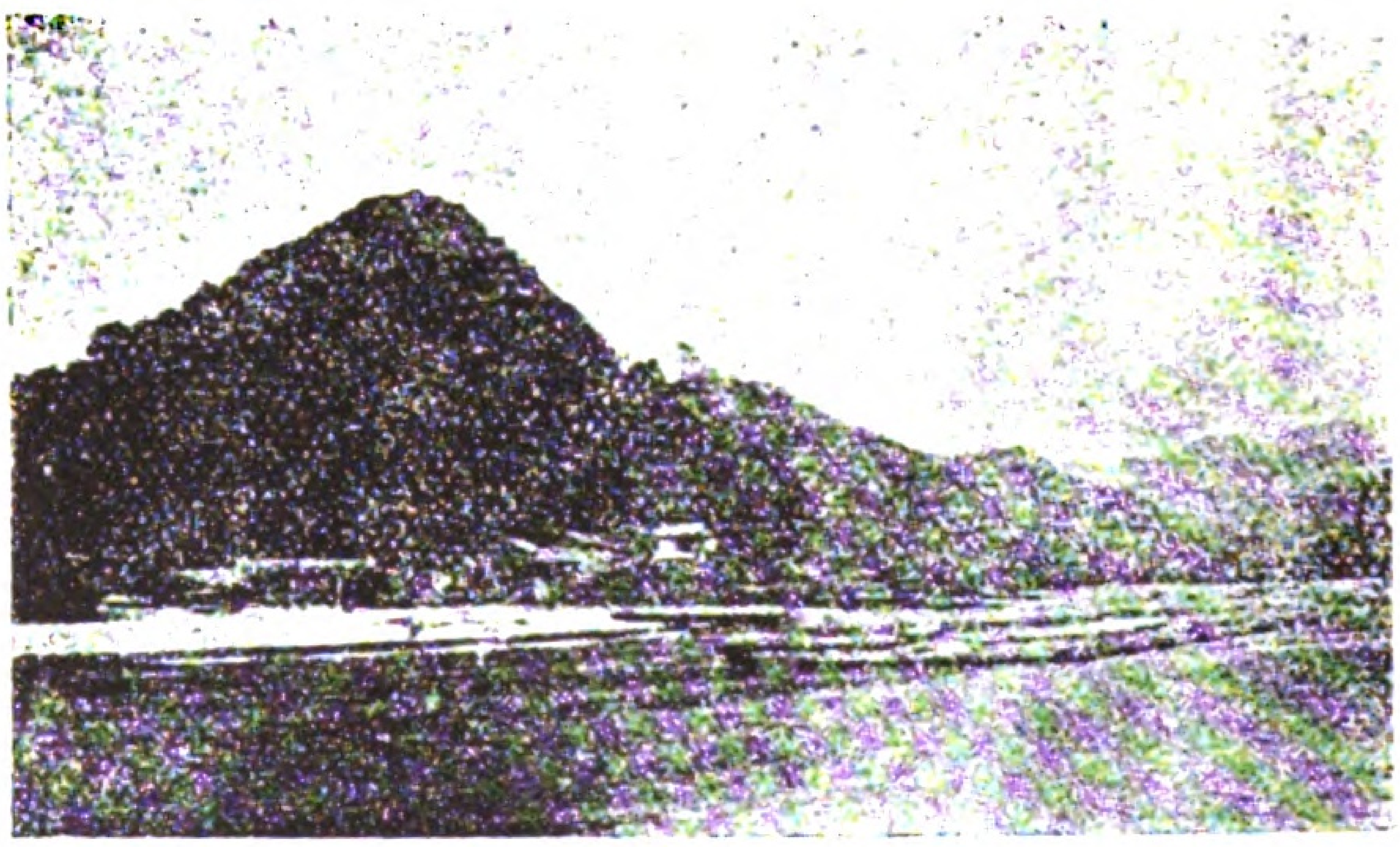
アゝホンにおやつれ遊ばした事。思へば三月中旬、ふと風邪で臥したのが、此の病の元。とう〲重躰に陷つたので、打電急行母樣がいらしつた。私は星の光りだにない西の方へ行かうとしたのだつた。しかし情厚い介抱に、神も助けられたのか、やゝ恢復したので、故郷へ歸つて靜養する事となつた。……お父樣の御遺言はどうだつたか、私は何と誓つたか、錦着ずばと決

心したものを、ア、病を得て歸るとは‥‥。汽車に萬腔の悲しみを搖り、無念の思ひを煙りに殘して‥‥。容赦のない汽車は刻一刻と故郷に近づく‥‥。ア、永い間の御看護、おやつれなさるも御道理、私ほどの不孝者が世にあらうか。

母樣は隱して居られるけど、この病は肺結核にちがひない。父樣もこれでお死れなすつたのだ。さすれば、我か命も定まつて居る。生れてこのかた、罪といふ罪は重ねた覺えはないから、今此のまゝ死んでも未來は恐しうない。ましてなつかしい父樣の許へ行かれるのだもの。長いも短いも一生、長い夢を悲しう見るよりは、短い夢を樂しう見るが、我が望み‥‥。

しかし‥‥しかし‥‥死後、母樣のお嘆きはどうだらう。これを思ふと、決して死にたくない。石にかぢりついても此世を去る身でない。ホンに親子三人連れ、むつまじさうな乞食が羨しい‥‥。又つまらん事を考へ出した爲めか胸が痛んで來た、あゝ。

（雨評）拙いまだしきもの多けれど、優しき情は掬すべきものあり。



吉野川を隔て妹背山を望む

○病める身

三河　澤田つま子

庭の櫻盛なりし頃は、病重りに重りて、此の世の名殘を何事も思ひ諦めば斷念めながら、風強き夕、硝子越しに見る花の美しさも、別れの一目かと悲しく、仇嵐誘はゞ共にと念ぜしものを、片手落なる春の山風や、われは浮世に殘されて、蜘蛛の糸より果敢なき魂の緒の、何處までもと引きつくしたる果、弗と消ゆる折は計られねど、暫と計り繋ぎつる程に、花は空しき亡骸となり行きぬ。「露子や、今日は如何なの。御覽、花はもう皆散つたよ」と仰有り乍ら、母上は南向きの障子を開きたまひぬ。哀れ、泉水の汀なる一株の櫻木は、春の名殘をまだ綠淺き嫩葉に止めたれども、葉隱れに見る邐迤として紫匂ふ布引の峰々や、薄墨色に黛を引きたる小松原に夏霞

い棚引けるにも、早望みあらたなる夏の景色うら立てるとおぼえし、さても凩寒さ夕、ふと病の床に臥せしより、樂しく長閑なる春の日にも癒えやらで、いつまでみ情深きたらちね君のみ心惱め奉るならむ。思へば、親しき友どちの吉子樣清子樣なとゝ、高髷に好める色のリボン揃へ、柳の糸の長き春の日を、野芹摘みにと打ちつれて、村ゆくさゝ川の堤に、優しき菫の花束に、詩かきて流しやり、何處の葦の棚にせかれて、誰が里の子に拾はるらむなど興じつゝ微笑みしは、過ぎ越し去年のすさびなりしが、吉子樣花子樣今は東なる花の都に登り給ひて物學びませば、今更に昔戀しう忍びて、再び其の影捉へたしとあせるも甲斐なき‥‥。一片散れる花片に、春暮れそめて、はかなき露の殘り香を生命に、しばし浮世にながらへし胡蝶の翅の、虹の七色あせつくして、次第〳〵に弱りもて行くにも似たる、あはれ病める身の‥‥。

（雨評）さしたる難もなけれど、取りたてゝいふべきほどのふしもなき文なり。

○たのしい我家

德島市　住友登喜子

あゝ安樂な我が家！あゝ幸福な妾の家！

かう言ふにつけても、たのしうて嬉しうて肉が躍るよ。父上母上は今年六十路をこえてゐられるけれど、白髮もなく、腰もかゝまず、至極御壯健て、生花や茶の湯をなしてゐらつしやる、兄上は名譽ある陸軍々人、今は戰地で御無事に務めて居られる。妾は數ならぬとも小學校敎員‥‥あゝほんとに〳〵うれしい!!!

我が家は至つて少さい。隨つて、富めりといふ程でもないけれども、今日迄金錢に困つた事もなければ、不義理をしたこともない。隨て、世間の人から不人情だの人でなしなどゝ我家のことを惡く言はれた事もない‥‥こんなに樂しいうれしい我が家内には、幸福安樂‥‥といふ、けがれのない淸い、あたゝかな空氣がみち〳〵て居て‥‥妾等は、その空氣をすつて生きてゐるのだろうと思ふ！

我が家の軒に昔から巢をしてゐる愛らしい小雀は、長閑な春の日も、冬の寒い日も、朝とくから起きいてて、我が家の幸福を祝するやうに、美くしいこゑて、萬歲！萬歲！と面白う囀づる‥‥

どうして、こんなに樂しい、嬉しい、面白い我が家だろう!?!

庭は廣くはないが、四季の眺めはある。春の梅櫻、夏の綠蔭、秋は父上が種々な菊花を培養するので、至極

華やかである。その花の白のけ高さ、紫の奥床しさ、黄の可憐さ、その匂ひの芳ばしいのは……妾の兄上の偉大なる功勳を稱するやうである……冬は暖爐をかこんで、父上の昔談を聞くし……年中一日も、樂しく、うれしく、面白くない日はないのである。小畑の隅に瓜がなければ、家内打ちより煮て食する、果實が熟すれば共に味ふ。

あゝ!!!極樂といふのは、我が家のやうな、至極、樂しく、うれしく、面白い所をいふのであろうか!?!、あゝ!!!

（雨評）樂しい御内は實に御結構ですが、筆には今少し苦勞をしてもらひたいのである。あゝ!!!

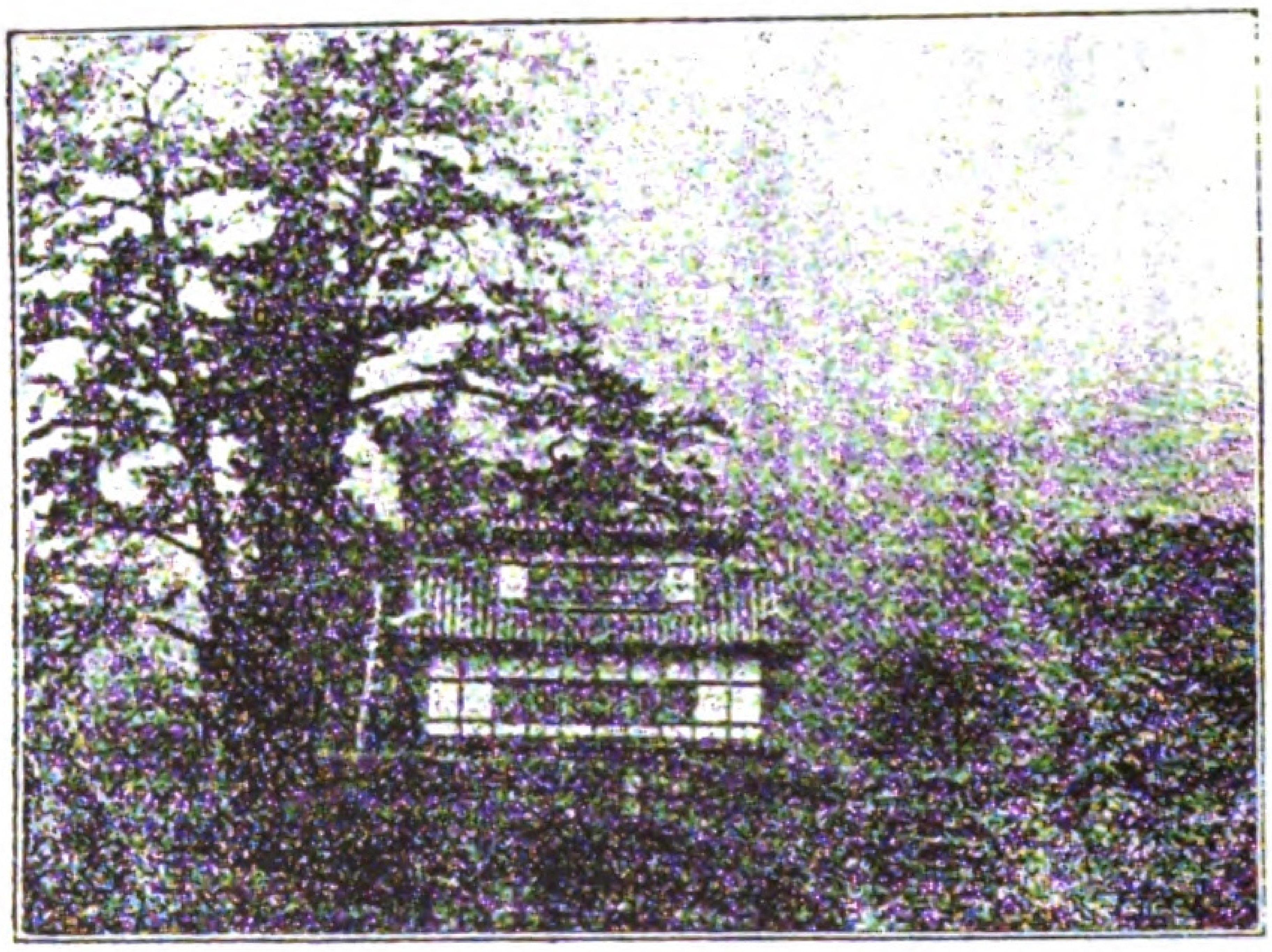
○淋しき家

埼玉縣　新井かつ子

「母アちやん、泣いちや可厭だよ。」

つい今し方迄、片手に高く、日章旗をかざして、萬歳萬歳……と叫んで居た太郎は、母の泣聲に誘はれて、自分も氣が沈んだのか、突と膝へ寄り添うて、愬ぅ叫びました。されど、母なる人は我が子を犇と抱きしめたのみて、言葉は出ませぬ。

「母アちやん、何故泣くの？」羊の樣な可愛い目を、母の面に濺ぐ。



對馬厳原

あゝ何たる罪ない目元でせう。母は、此の子を見るに付け、抱くに付け、目に浮ぶはなき夫の俤。

「母アちやんは――」と血を吐く一聲も、半ばは口の裡、又も堰き上ぐる涙の一滴、太郎の頰に落ちて、空しく碎けて了つた。

常に近所の餓鬼を集めて、突貫の聲勇ましく、木馬の上に玩具の國旗を振る荒武者太郎も、只管に母の情に包まれて、大人なしく其の膝にしやがんで居るのであります。

「坊つは悲しい事は無いかチー。」

「何故」

「何故つて、阿父樣がー」

「何うしたの？」と無心に母の顏を見上ぐるに、母は堰き來る涙見せてはならじと、袖に匿すつらさー

「し、し、死んでー」と幽かな聲も袖の下にホロリと一時雨。

「死、死ッて何アに？。」太郎は勇ましく問ふたのでした。

あゝ母は何と答へてよいでせう。僅か四ツの幼兒に、「死」が分らぬのは、道理です。太郎の父、其れは今は黃泉の客と爲つて。佛壇に形見の軍帽と並ぶ、位牌一基、廣き此の世、淋しき此の世に、頑是無き我が兒と、もの云はぬ位牌を守つて、長き月日を送る未亡人の心の裡、さぞや悲慘なるものでせう。それにしても太郎の行末「死」と云ふ字義の分りし時の悲しみは又如何に。（完）

○小包

羽後　駿馬子

一寸申上候、小生事、去る三日御地出發、本日午後八時四十五分無事當地に到着致し候、御安心下され度候、一死は兼て覺悟の上なれば、歸宅

なども萬々有之間敷、御兩親様には御機嫌よく、小生の小包にて歸るを、御待下され度候匆々

五日の午後　於大阪　清次郎より

・・・・・

本日午後七時二十五分當地に安着、直に戰地に向け出發致すべく候、小包となるも愈々間近く相成り候、左様御承知願上候。

七日の午後　於ダルニー　清次郎

お母あさん、これご覧なさい、兄いさんが小包になるんだつて、ホヽヽヽ、

「ホヽヽ、この前にもそんな事か書いてあつたよ、小包になつて歸るんだなんて。

「ホヽヽ、可笑しな事を書くのね。

「さう…でも早く歸るやうになつて下されや、宜いんだが….。

「妾もさう思つてるの。だけども、妾如何だかと思つて….よ。

「どうして。

「妾昨夜可笑しな夢を見てよ。それに何んでも、近いうちに、あちらに大戰爭が始まるんだつていふから…妾なんだかあんじられてならないわ。

「夢はさかさまといふかられ。….

時は秋、空吹く風もなにとなく、寒さをおぼゆる頃、火鉢を圍んで、親睦なる母子只二人、毎日あんじ暮さする人の、小包となつて歸る日は、はて何日頃であろう。

○名なしぐさ

和歌山縣　小川紋代

人は知るまじき妾が此のおもひ、あやにむつれまつはりて、悩むこゝろのつかれては、この世は夢のごと、まぼろしのごと、いとおぼろにぞ遠ざかりゆくらむやう觀ぜらる。

綿々たるこの思ひ、人は知らじ、妾はたそを知られむなれがはざるなり、たゞ、言はて語らで、人には見えぬ胸のうちに、永へに深くつゝまむのみ。かくて悩み悩みに妾が生の終りをばつげなむものを。

あやしむなかれ、妾はこの世のかり住ゐに、まことの樂しみを見いだすをえざればなり。

人やゝもすれば、妾を指して厭世家なりといふ。されど、こはもとより、いとふかく秘める妾がこゝろを知らざる單なる觀察とやいはまし。

琥珀の日のひかりまばゆきみどりのおほ空をかくる鳥を見よ、そが鈴のまなざしは、愛にたのしむこゝろをあらはせるにはあらずや。あたゝかき風に頬をなでさせつ、にこやかに笑める野の花、花に眠むれる胡蝶のすがたを見よ、そを罪なりとのみたゝへむは、浮きたる言なるべし。よしや、天なる星のこむらさきのかげに隠れて、およばぬ戀をかこつ紅花はありとも、その涙のいかに聖かるべきを思へ。あゝ、邪慾なく邪なき自然の象や!!!

やがては、それよ、妾も….。

人やゝもすれば、妾を指して厭世家なりといふ。されど、そは妾が現世にありて、爲すあるをほりせざらむをのみ察して、この胸ふかく秘めるこゝろを知らざるもの、單なる臆度とやいはまし。人生や、しかく没意義ならじ。妾が生、あゝ誰れかよくその極みのところを悟らむや。

○出鄕

埼玉縣　山下宮子

汽車の走るのが、使命である。

情深い父母と別れ、友愛の厚い兄弟と、涙の袂を別つて出づる吾と知るか知らずや、ゴトン／＼と動き出してから、間もなく、風を衝いて駛走するのである。もう窓から首を出しても、憂愁に沈んだ母様の御顔も、懸命にふる妹のハンカチも、山に隠れ森に遮れて、全く見えなくなツて了ツた。われは一種の悪感を覺えて、ぶるツと身を振はして、窓に俯伏したが、人目も耻かしと、小袖でそツと涙を拭うて、車中を見渡せば、世はさま／＼の響の通り、乘れる人も千差萬別である。中にはわれと同じ運命の人もあらう、中には郷會の嬉しい夢を見てゐる人もあらう。其の他、商人らしい人、強盗らしい者、農夫らしい者、桂庵みたいな女など、互に入り亂れて、世間話に耽ツてゐる。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ふと氣がつくと、もう我が白河を出てから、幾何のステーションを過ぎたてあらう。驛夫が大聲で呼ぶ「宇都の宮々々」に驚かされて、懐から靜に「時間表」を出して、停車場の數を數へ、幾時に上野へ着くてあらうかと、調べて見た。

終ると又も浮びくる故鄕の面影、來る可き都の景色、われは淘然として囁いて、獨言した「何でもベストをなせば宜いのだ」。（完）

○月夜の感

越後　靜子

かすかにびびく箏の音のゆかしくて、そぞろに窓を開けば、すみわたれる空にさゆる月影、いとも淸し、今宵は葉月もちの夜なり。いかてこのよき光りを、いぶせき庭の上にのみ見るべきやは。よし友はなくともと、近き古塲の堤とあぐがれ出てて、大なる松が根にと、腰うちかけぬ。仰げば瑠璃なす大空に、溢るばかりの月の輪。世の塵を遠くはなれて、天つみ殿に、あはれ、何をか夢み給へる。淸くやさしきその御光り。なつかしき彼方の松影にかかれる其樣、去年には變らぬものを。戀らは人の世なるかな。あはれ、曇りがちなる浮世を照らすこの影に泣く雛の子、そも幾何ぞ。いにしへ人も「千々にものこそ」と詠じけむも、理りならずや。「家鄕憶遠征」と織の袖しぼりしは、誰ぞ。ましてや胸狹き少女子の、いかてか涙なかるべき。こぞの此の日、秋を連れてこの月を共にめでにし我が友、あはれ今や何處にかさまよへる。さるにても、滿洲の荒野に草を枕の武夫等の夢やいかに。はた跡に殘れる妻やいかに。親はいかに。涙は同じ世ならずやは。げに子を慕ふ親の心も、妻を思ふ夫の情も、月見る時よりいみじく悲しきはなかるべし。さはいへ、文かく人歌よむ人は、三日月の頃より今宵をまちて、明けずもがなと祈るもありとか。あはれ見る人の心の儘なるは月なるよ、はた人の至情を宿すも月なり。あゝ至妙の汝、われ今恩の糸亂れて、とく術なきを、いかにかせむ。そもこれ、過ぎし運命の悲慘なるがためか。あらず、非ず、淸き〳〵汝が影に思ひ惑ひてなり。かくする程に、身はいつしか天つ國に上り行きて、迷ひ心地やあたりを見れば、夜もいたくふけぬらし、草の葉にも、木の枝にも、はたわが袖にも、露はひとしくみちぬ。遠音鄙びたる尺八の響も、姫神の御前に導く草刈る童の笛かとばかり、心はいとも淸くすみぬ。急ぎ家路に向へば、われを迎へにとて、露繁き垣根道を、聲張り上げて歌ひつつさまよふ兄上の姿。歌は「古城の月」、聲はいよよ高し。「天上影は變らねど、榮枯はうつる世のならひ、うつさむとてか、今もなほ、ああ、古城の夜半の月」。

○おもひ出

福岡縣　まつの子

ふと目さむれば、ガラス窓をすかしてさし入る月の光、眞晝の如く牛壁を照せり、十六夜の月いかばかり更けたるよと、枕せるまゝに空打ち仰げば、枯れはてゝ、見るから淋しげなる木の間にかゝれるすがた心もとなう打ち眺むれば、之も淚の種なりけり。思ひ出づれば、物學びのためにとて、故里のかの川邊なる柳の下に、別ちかれし諸袖を別ちたりしも、早五年の昔となりぬ軒端に雨そぼふる秋の夕ぐれすみれたんぽゝ野邊の錦を織なす春の朝故園の上の何くれとなう思ひやられて、いたずらに夏と春とのまたれけるに、今は其心もなくなりぬ、妾が都に上りし明くる年、姉君は玉の如き女兒を產み給ひぬ。うひ子にし有れば、かぞいろの喜びはんも更なり、一家に和樂此處よりぞ湧き出る泉なりけるに、浮世の風はいかなる處にも吹き入りて、此いづみにも波立ちぬ。さらぬだにものかなしき去年の秋の暮、ほろ〳〵とこぼれちる木の葉をともに、死出の山深く分け入りて、よべどさけべとかへらずなりぬ。姉の心はいかなりけん、姉の嘆きはいかなりけん。かれとても三年四年心盡しはせぬものをと、打ちぐつをれてかこたるゝもげに。女子の爲には親幼なるものをと貫之ぬしもかゝれたるを。アゝ去年の夏なりけり。今宵の月ながめばやと、姉君ばまなふ腕に、四つの袖打ちつれて、そゞろ歩きしける時、ふくやかなる童のほゝにあまたたび接吻し給ふにぞ、たはむれて、妾もかゝる子なさずしてはといへば、いかて、御身も早やくよきつまもちて、あの月のやうなるを生み玉へやと、云ひ合ひたりし、其夜の月に光も形もかはられど、まなぶは早く世を去り行き、妾も今は西東海山遠く隔れたれば、越路なる白山の行き合ひ語らん事かたし。アゝ、今宵此の月をいかにかながめ給ふらん、忘れ貝拾ひもやらで唯一人有りし昔を忍つゝ世の果敢きになかるゝ事よと思ひやれば、胸もさけなんばかりにて、我にもあらで淚にくるれば、つらぬきとめぬ珠のいくつ床の上にぞ散しく……!!!

俳句

巖谷小波選

特別第一賞

雲の峰もの見櫓の微風かな　越後沼垂上二ノ丁　野崎きよし子

〔評〕雲の峰の雄大なるに微風の清快なると對せし、着想物見櫓と共に高し。

特別第二賞

帆柱も衣掛けたり晝の月　横濱福富町二ノ二二　福澤秀子

〔評〕碼頭の秋晴、一幅の好畫題。

特別第三賞

怠りの日記に秋は立ちにけり　佐世保　横山愛子

〔評〕「少年易老」の古詩ら偲ばれて立秋の感十七字外に溢る。

天

美しう柿洗みけり秋の水　上毛太田町在寺井木暮瓦七方　木暮松枝

〔評〕優雅なる中になかし味あり、俳諧の上乘とすべし。

地

開放の土地も見て去る燕哉　豐後富杵町　平山良子

〔評〕時節柄言外の意も想ふ妙

人

草花を蝶塚近くうつしけり　小樽區色内町六一　岩谷綠子

〔評〕詩味溢るゝ如く、一句の俳諧幾節の新詩に優る、可誦可吟。

秀逸

白萩の庭に慰問の使臣哉　豐後　紫泉女

秋の暮賣らるゝ牛の通りけり　牛込　小島濱子

貰風呂の北斗に對す寒さかな　租ケ谷　中村せい子

風鈴や戀風に鳴る夜もあらん　美濃　内藤みち子

緋牡丹や小太刀佩きたる寺小姓　三河　白萩女史

畫行脚の小野に宿りて月見哉　美濃　あけぼの

初秋の蚊に攻めらるゝ佛かな　羽後　能登メカ子

夕顔に女の來たる垣根哉　美濃　中島きく子

秋高く蝶とびあへぬ一つかな　千葉縣　十六夜女史
秋暑き日も傾きてテニスかな　羽後　桝谷よし子
稻の穗の出揃ふ十里四方かな　羽羽　池井濟子
夏痩の戀ひある墨をながめけり　美濃　小林靜子
小流の石皆白し草の花　羽後　小山ひさ子
火取虫中に蝶々もまじるなり　奈良　竹田久子
紫陽花や色が極まれば花の散る　紀州　田中幸子
名僧が狐をさとす秋の暮　仙臺　香津夜
月今宵蟬丸も庵いざり出よ　仙臺　みふ子
針措て覗く小窓や芥子の花　新潟　小島衣子
魚のとぶ夕を岸の涼みかな　美濃　中島きく子
一尺の影を人ゆくあつさかな　岐阜縣　藤本みさを
涼しさや人立ち去つて水の音　日向國　岡井ちか子
紅葉狩つめたき川をわたりけり　陸中　黒澤美津子
あばらやの緣に月ありきり〴〵す　茨城縣　大部春浪子
名月や緣に美人の倚る　京都　田中はる子
ゆくりなく彼の人見たり螢狩　信濃　大橋つま子
春の雨をとめのリボンぬらしけり　安藝　池之子千鳥
虫籠や夜は又來よと明てやる　横濱　安田政子
稚者に先生の詩を給ひけり　伊豆國　上原しげる
憂き人に蠶とるさまを見られたり　青森　高橋たま子
攻め取りし砦の跡や枯尾花　岐阜　田中悦子
秋風や蚊帳のつりてにひまのある　常陸　酒葉つれ子
曉の燈籠くらし蟲の聲　安藝　紫紅女史
田の畔にしぐれて殘る案山子哉　上毛　渡邊うつぼ

不意討の暗闇坂や稻妻す　上毛　兒島野の花
皆さらす槍の塵や散る柳　小樽　岩谷綠水
紫陽花や連にやつれし白拍子　小樽　岩谷綠子
客僧に色ざんげする榾火かな　小樽　岩谷綠子
翠や月に對する浮見堂　小樽　岩谷綠子
白露や燈の先の萩の花　美濃　村山みつ子
田螺なく水田に星の光り哉　廣島縣　池田蕾子
給日傘の二つを渡す夕渡舟　武藏　岩田たか子
蜻蛉や黒板塀の釘の先　秋田縣　翠かなる
短夜や有明白き長廊下　大阪　愛蘭
鳴きすごゝ盥に入りけりほとゝぎす　中國　青山文子
寂として清水に松の落葉かな　茨城　栗山松波子
櫓詰のカンテラ暗し四瓜賣　越後　堀河弘子
雨降るやしきりに動く田植笠　下總　三橋とよ子
思草忘れ草皆茂りけり　千葉縣　森美智子
僧都逝き有王去つて千鳥なく　豐後　平山眞子
星飛て飼犬吠る夜寒かな　京都府　岩村よし子
雨雲の低く這ひ居る夏野かな　岐阜　淺野やす子
すゞむしをそつとなさへる帽子かな　群馬　佐藤昇子
船頭が戀の喧嘩や夏の月　小石川　原清子
蟬啼や砂に消こむとほり雨　愛知縣　春月子
涼しさや月にふかせて洗ひ髮　越後　晶の露
青簾午睡の顏を叩きけり　大阪府　日置高子
藻月に蛙なくなり裏ら田圃　本郷　澤貞女
自ら大輪になりし踊哉　伊勢　南芝露子
背戸の風呂に女の聲や朧月　信濃　初音女史
小春日や輕るい風吹く水の上　秋田縣　松田政子

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

消息文

日本女子大學教授　豐井文學士選

天

○秋の野邊に遊びし樣を言ひ越したる友の許へ

神戸元町五丁目　高井菊江

御言の葉の綾に、いよ〳〵なほ、千草みだれふす野べの樣、なつかしうなりまさり候ひぬ。せめて一日、あしたの露に、もすそぬらしつゝ、諸共に踏み分けたしと、宣ひし御心のほど、うれしく存じ上げ候。

此度、はじめて、尾に劍もたぬきり〳〵す、取り得たまひしよし。何處までもと、追ひ給ひし御身振、捕へ給ひし御手付の、目に見ゆるやうにて、ひとり微笑の禁じがたく候ひしよ。

今宵、文よみ在はすみ窓の、くれ竹の葉に、やさしく鳴き出づるを、思ふ事なげに、折々耳傾けて、きゝ居たまふ御事と、推しはかり參らせ候。何れ近き内に、一度御宿おどろかし申すべし。その折りよ、かならず、人まつ虫のすだく花野へ、ともなはせ給へや。

（評）文面に、意至り、よく書簡文の筆意をえたりといふべし。天とす。

地

○ふる里に歸りて都なる友の許へ

大阪南區　つゆ子

松風涼しき山里てすら堪へがたのこの暑さを、人の氣多き都の地の、さぞやさぞと推し上げ候ふ。絶えて久しきふる里の風景に浴せらるゝお身の羨ましさよと言はれて送られ候ひし時は、げに何として何として、ふる里とはかゝる所とは、かけても思ひ候はざりき。妾のふる里には、父母もなく、生れし家も候はねど、久しく踏み見ぬ生れし地の戀しく、はる〳〵と歸郷い

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

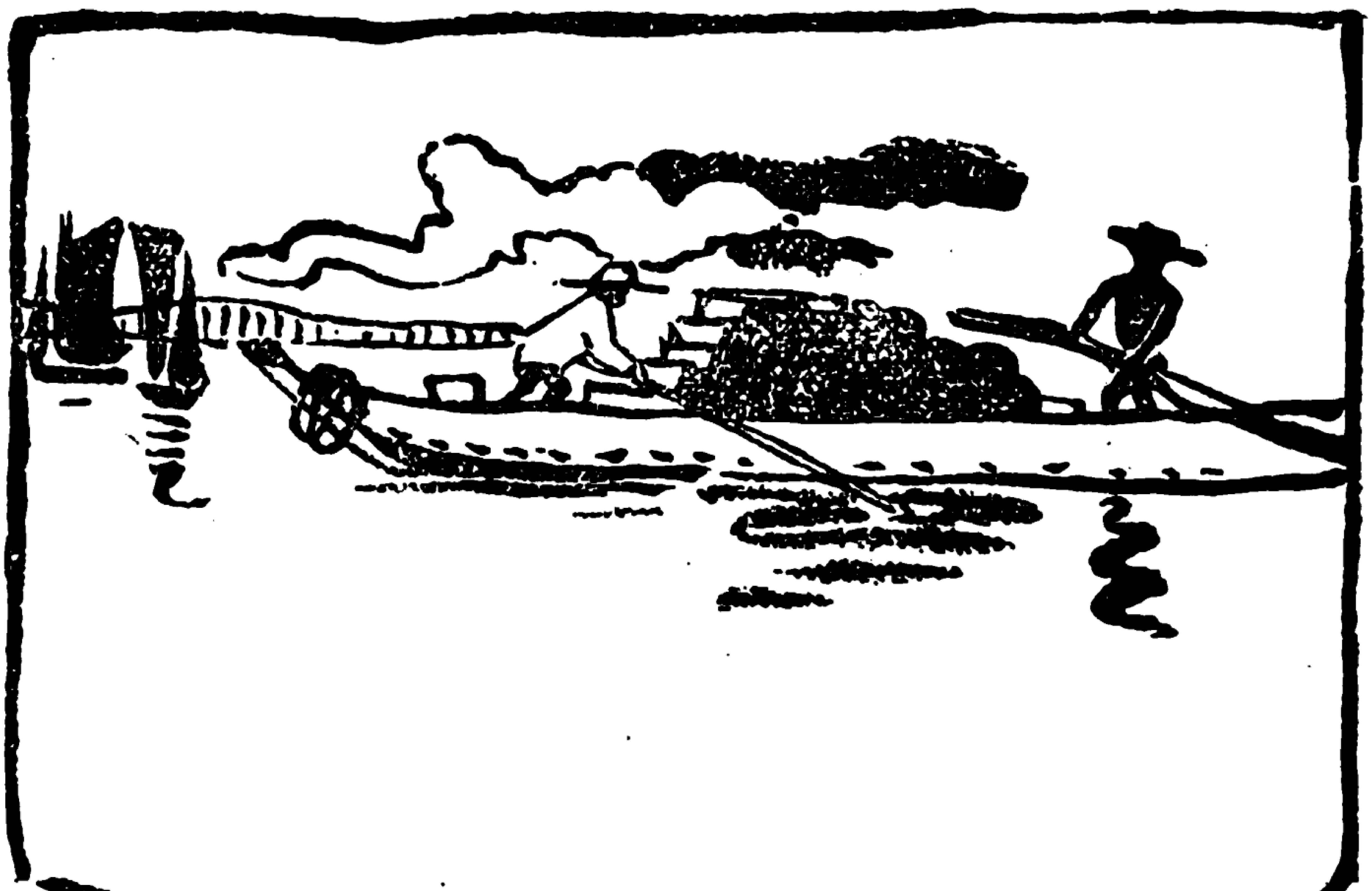
たしたるにて候ふ。もとより質朴にて情け深き里人の、定めし妾を笑みて迎ふるならんと推し候ひしに、思ひきや、行き違ふ人は、妾を見て冷笑を洩しつ。その昔、父のいまし〻頃、有らゆる媚辭をもて妾に接せし時の事と思ひ合はすれば、移り變る人心の、今更恨めしく、落ちぶれし今のわが身のうら悲しくて、思はず涙の滴りて候ひき。

路すがらわが家の跡を尋ね候ふ、榮えてし頃は、出入りする人さへ多かりしを、今は住む人とてなき破れ家の、生ひ繁れる草は物凄きばかり。アヽ、何としてこれがわが家の跡と思はるべき。愚とは知りつゝも、妾は聲あげて泣き伏して候ひき。

明くる日、形ばかりの花携へて、亡き父母を葬りまつれるみ墓に詣で候ふ。掃ふ人とてなき碑の前は、たゞ荒れに荒れて、水も花も絶えたるその様、アヽ、世が世なればかゝる淺ましき事もなからんに、と思ひつゝ、四邊淸めて、花手向けて、み前に額きたる時のわが感想は、……ご高察に任すより他御座なく候ふ。たゞ胸は迫りて涙も出でず、心ばかりぞ彌が上に激して、又沈みて、寸斷されるやう。すまぬ事とは知りつゝも、妾を獨り殘されたる兩親の恨めしう思はれて候ひき。これが爲め、ふる里なつかしの情は、一時に消え失せて、同時に世の人の無情をも知り初め候ふ。

かゝる不快を感ぜし身には、常にやさしきお言葉を賜へるお許様戀しの情に堪へざるまゝ、一兩日中には、必ず

特別第三賞　（かよい船）



京都　川井萩琴女

お側に參るべく候へば、昔に變らぬお言葉のみぞ願はしう候ふ。かしこ。

（兩評）無すなほに、情、人を泣かしむるものあり。地とす。チトほめすぎたり。

人

○蓮の花びらに添へて

三河豐橋かじ町五十五　淺井ふみ子

菩提寺より人の許に送りけむ、昔の人のみやびを習ふとにはあらねど、蓮の花びら白き紅き二つ三つ、文にまきてまゐらせ候。御寮に近き、妻が池の蓮も、花名殘なう散りて、さや〳〵と葉を吹く秋風、たゞ身に泌むやう相成候。忘れがたきは、かの曉、おん供して、殘んの星の、浮葉立葉のひまに、底深く映るを眺め、咲き揃ひし花の香を、身にしめて、露にぬれつゝ、此池めぐりし時の樂しさにて候。其の折り拾ひ取りし花びら、さうしにはさみ置きしが、色さへ未だ消えざるに、懸る文書かむとは、神ならで、思ひもかけず。前芝浦のおん別れにも、來む夏をとこそ誓ひしに、淵瀨の變り易き、飛鳥川には限らざりしよ。悲しき運命の程も、前の御便に悉しく申上候へば、今更言ふまでも侍らねど、父上は、數々の失敗をも、心遣ひせさせむがいとほしとて、母上にも妾にも、包み給へば、何事も知らで過ぎしを、執達吏の來たりて、容赦なく封印つけし日、其れと聞きては、ひたと胸つぶれて、夢ならずやと疑へど、現なるを如何にせまし。愈々破產と決し候へば、住み馴れし家を見捨つるも、遠きことには侍らず。懸くてはこゝに住まむも心憂しとて、父上、僅かなる便もとめて、知らぬ國に行くべき御心なれば、蓮咲く日、御歸省遊ばすとも、いかで、再びまみえ申さむや、あゝ、逢ふ日も知らぬおん別れ、思へばいとゞ堪難く、せめては、最近の御うつし系一葉たまはりて、それとこしへに身につけて、さすらひの憂き折に、取出でゝはおもひ出に、ひとり靜かに泣きたく、おんきゝとゞけ給はらば、何より嬉しう〳〵……。花びらにかいつけたる歌、拙うは侍れど、涙に水ぐきぬらしゝもの、今の身の上には、あはれとも見給はむか。　あなかしこ

（兩評）無優美に才華こぼれたり。人とす。

秀逸

○親友の許に

蘆の江子

秋來ぬと目にはさやかに見え候はねど、扨も此頃のお涼しさ斯くては昨日ぬぎ捨てし許りの一重戀しう、俄に袖重う覺え候折柄、如何おはしまし候や、未單衣の身にある程は、一年も中々に存じ候ひしに、破れ扇手箱の奥深く秘められては今年も早更けぬるかと、いと心細うも淺ましう存じ候。扨も此の許冬籠りの庵の草屋根、先頃よりふき改めさせ候が、今日漸々出來上り申し候。御身も知ろしめす茅屋ながら、古びたる草屋



蟲〔天賞〕 芝區非手町十一 笠井きみ子

根、さすがにおかしう、苔さへ馴れし物をと、父にも恨み候ひしを、斯く新らしう打ち改りては又言ひ知らぬ興も覺え候。さはれ、今日生れてし草屋根の老い行く先幸あれとのお志も在しまさば、いかで君が美しき八雲の音八重の空に通はせ給ひて、榮えある名譽を給はらずや、妾久しう友無さまゝ調べもせねば、折々吹きすさぶ秋風に、八雲は恨めしき音色を立て候。峯の松もつゞれのをより、調べ初めてんと待ちわび候を、哀れませ給ふ君ならば、いかで御出給はらずや、今宵は月も一入と存じ候。彼の尾上に懸る頃黄金色づきそめし田中に、小さき白き物の見ゆる所迄、さ迷ひ給はれかし。只々田舍道露

深うて、秋草踏みしだき給ふみ裾濡しまつらん恐れはあれど、妾前拂ひ參らすべければ、いかで露よけまつるべき。さりとて、又優しき君の厭はれん露は、本意なう候半に、いかで染めなば染めよのお召物にてお越し給はり度く、平に待ち參らせ候かしこ

（雨評）優美なる筆愛すべし。

○友の許に朝顔を遣るとて

長門　孤蕙女子

兼てより朝はとく御目醒の君と承りつるからに、今頃はもはや御化粧も終へさせられ、白きリボン風に吹かせて、朝露ふかきみ園生を御散歩の折りかと存じ、かくは使をさし出して候。いつぞやお越しの節、妾が手づから培ひし朝顔、花咲かば是非君が手なみをみんと、のたまひしに、妾は、園藝に趣味深き君に、お褒め言葉の一も賜らばやと、只管心を盡して培養致し候處、漸く先達より結び初めて、昨今は既に見頃に相成候。元より其のみちの人のそれに比ぶべくは候はねど、手づから培しものと思へば、何となう嬉しく、日々君のおこしをのみ待ち侍りしを、未だに音づれなきは忘れさせ給ひしにやと、いと怨めしう存じ候。けさ初めて結びし二三輪は、今迄になく花も大きう且つ色どりも美しう候を、ひとり眺めんも口惜しう花の心も思ひやられ候へば、萎まぬ内にとかくは一鉢もたせ差し出して候。露ながらと存じ、使のものへも左樣申聞かせ候へ共、道の程如何かといと心許なく存じ候、若し君がみ心動かす所もおはせば、一日柴の戸叩かせ給はずや、釣瓶取らるゝ程の詩趣は候はねど、花毎におきかはる露の色を眺めんも、亦おかしかるべくと存ぜられ候、いかで妾が切なる心汲ませ給ひて、面白き君が御批評賜はらんことを、花諸共いのり居候。まづは右、露のひぬ間を取急ぎ。かしこ

（雨評）露のひぬ間にとの手紙としては、筆やゝくだくだしき嫌ひはあれど、結末といひ、すべて、言まはし器用なり。

○涼の交換

岐阜縣　靑木勝子

養老より　此頃の暑さに、瀧の音も細く相成候に、長汀曲浦の波に戯れ居給ふ御身には、如何なるすさびの候やらん、靑葉そよとも動かぬ暑氣一しきり、亂るゝ頭顱抱へて、直下數百尺の銀河の裡に立ち、靜かに不動の尊名連呼すれば、身は五色の彩雲に包まれて、昇天するの心地せられ候、まして、綠蔭に洗髪晒して、徐ろに菊水の明泉一掬すれば、味は中々甘露を凌ぎ、

節の三年四年は確かなものに候。されば、此の邊り喧しく鳴く蜩の聲までが、涼しきものゝ一に數へられ候。かしこ。

志能島より

羨ましの御たより、妾にも此の頃は中々申上度き數々有之候、つば廣帽にダンダラ染の伊達姿、浮袋なしでもとの得意の態は、今更申し上ぐる迄もなく、游ぎ疲れて、一人去り二人行きて、波音高き長き汀、今は妾一人の專有となりて、夕燒紅う空と水とを彩りつ、後の松原には、弦月淡くかゝりて青う〳〵、其の間は一帶の白沙、岩根叩く磯馴松の垂枝にすがりて立つ妾は、宛然の神の愛兒……星の流るゝ夜、稻田の上辷つて風鈴ゆすぶる汐風のまに〳〵聞ゆる千鳥の音までが、汐の滿干以外に、何ものかの趣を語るらしく、一入に床しく存ぜられ候、かしこ

めし屋［地賞］麹町區平河町四ノ二　加藤豐子



（評）すべて氣のきゝたる文と申すべし。

○旅立ちせし友に

丹波　旭のり子

今朝松原に惜しき袂を分ち參らせしより、目をそらさず、み姿のみ打ちまもり居り候ひしが、霞の中にきえつあらはれつ、終に見えずなりし時の悲しさは、とても言の葉にはつきせず候。あゝ今頃はいづこの道をわけ入り給うてか、あゝ今頃はかしこのあたりゆき給ふらんなど、日ねもす御許様の上にのみ心を走せつ、御なつかしさに堪へかね申し候。朝な夕なに音づれ給はりし君は、今宵いまさずて。松風の音のみさよさよと、一入の悲しさ身にしみるばかり。まして片破月の淋しげに、軒にさし込み居り候を。御許様にも、定めし旅館のおばしまによりて、見そなはすらん。四つの袂をつらね、露草の小路、そゞろ歩きつゝ、互の理想を語りしも、今宵の如き月夜にてありしよ。かれやこれ思ふにつけ、過ぎし日の偲ばれて、戀しさやるせなく、はては罪もあらばと、かなはぬ事を、なほ望み居り候。この上は、文なりとも、御車のあと追はせやらんと、覺束なくも認めまゐらせ候。な

ほ御入學の上は、學びの道を一すぢに御いそしみあらんことを、はるかに祈り上げ候。此の先き、夜な夜なの夢は、君のみ上にのみに通ふらんと思ひ居り候。何卒妾がこゝろくみ給ひて、しげしげ玉章御惠み給ひてよ。

(雨評)　情はくむべきものあり。

○出征中の人の許へ

越路にて　すゞしろ

いみじき御暑さの折柄、御地は猶々しのぎ難う在しまし候由、しかし御障りもなく御機嫌よういたづかせ給ふ御事と推しあげ候。さて先日は、御多忙中御ねんごろにも御尋ねにあづかり、かつ陣中祝捷の摸樣など、誠に面白う承り候。當地にても、戰捷毎祝捷會催され候が、過る波艦隊全滅の折りには、別して盛會にて、異樣のいでたちよりなれる仁和賀はもとより、こゝかしこに色々の趣向も候ひしが、賓田會社の雷氣仕掛に朝顔の花さかせ候は、一しほ珍らしう、美しう存じ候。近くは樺太の占領、兼てよりかくとは存じながらも、喜ばしき事にて候。又講和大使も彼の地へ着せられ候へば、近き新紙に如何なる光彩をかゝがかれ候ならんと、御互にまたれ候。誰やらが口ずさみの樣に、いくさする樣に談判も參り候はゞ、凱歌をあげて歸らせ給はんも近からんと、今より鶴首してまち居り候は、私らのみにては候はず、さぞな御子樣方もと、推しあげ候。

承れば、御辛勞の中にも、御樂しみや、御愉快もあらせられ候よし、さりながら此の頃のやう、久しう休戰の折りには、何かと御思ひいでも多く、故國をしのばせられ候ふならんと存じあげ候。何卒ぞ御慰みとなるべきやうの品も候はゞ、み心おきなく御申し越しくだされたく候。この繪端書、信濃川原にて、自から寫生せしものにて。餘りに拙なう、おはづかしうは候へば、故郷の景色御目にかけばやとの心ばかりを御覽ぜさせられたく候。おひ／＼惡暑にむかひ候へば、一きは御自愛あそばし候やう祈りあげ參らせ候。右御返事かた／＼、例の走り書して、あら／＼かしこ。

(雨評)　先づ大人しく整ひて出來たり。

○避暑地より親しき友の許へ

鹿兒島市　春子

後の森の蟬の聲、かまびすしくなりまさるにつけ、都の御暑さ、如何ばかりかと、おし量られ候ふに、皆々樣御さはりもあらせられずや。こゝもと、祖母の病も、日々さらさるゝ潮風の効しるく、皮膚も色づき、いと健

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

かに相成り候へば、何卒御喜び下されたく候。海の泉水、山の築山、そが中に、あづま家の如く立てる、かりの住居のあけくれ、誠に珍らしきことに候。朝まだき起きいでゝ、清き流れに水むすび候へば、稲葉を渡る朝風袂をはらひて心地よく、老鶯の聲の行方かへりみれば、綠の色、薄く濃く茂れる夏木立の、いと涼しげなるに、思はずも、露しげき夏草の奥深く、さまよひ入ることもこれあり候。見渡す海の面、浪平らかにて、島の姿、白帆のかげおかしく、日、やうやう、西の島かげに隠るゝ頃より、海の風、靜かに軒ばに訪なひくるに、涼しさはいや勝り、さえ々々なる月かげに、打ちよする浪の音、きこえては、夏とも思えぬほどに候。こゝに懐かしき御許樣と、手を携へて、語りつ、歌ひつ、遊びくらし候はんには、いかばかりかたのしかるべく、御用おすみなされし上は、一日も早く、御越しのほど、ひとへに、待ち上げ候。かしこ。

（雨評）先づ整ひたり。



靜海【入賞】 鳥取市東町 箕浦よし子

○歸省せんとて

紀伊國 みゆき

故郷を後に、都へ上る時は、何となく後ろ髮、ひかるゝ樣な思ひせしが、この休暇、都を後に故郷に歸るときの今は、何となく前髮、ひかるゝ樣な思ひ致します、取りわけ妾は二百三高地捲きに、前髮をとつて居るので、去年よりは、いたく曳かるゝ樣に感じますから、何卒少し緩めて下さい（コレハ串談）都へ上る時の汽車は早く思はれ、故郷へ歸る時の汽車は遲く思はれますのは、妾のみではありますまい、

土産はドッサリ買ひました、重たうござります、見て下さい、腕が斯の様に（見エマスマイガ）さて、お父さんには何？、お母さんには何？、千代子には何？、辰雄には何？、言はぬが花、妾に一番先き面會した方には、一番善い物をあげる、さて誰れが第一だらうね。

（評）あまりおどけ玉ふな。おッ母さんがおどろきますよ。

○郷里の友に

大阪　田中千枝子

春子様。唯今何を爲し、何を語り給ふか、母君は御健かにや。健ちやんは、はや尋常三年生にや候はむ。今頃は、東京よりも歸り給ひて、夏休みの樂しき團欒に、涼しき風や繞りてならむ。飛鳥千里の御心安さに引きかへ、妾は去年の冬、新しき小さき一人さへ出て來て、家政の、育兒のと、やれ／＼うるさき事ばかり。かの理想も何も、皆一夜の夢。あはれ、懐し。戀し。あの苔むす巖、われらの名づけし龜岩!!、貴孃は首にもたれ、妾は脊に坐し、夕づゝの輝く夕べを、共に聲張り上げて唱歌を謡ひし廐裏時代、或は、天雲の高き理想に心躍りつゝ、講學に運動に餘念なかりし金山町時代、想へば……あゝ悲しく候ふ。春子様、あの會合、あの時代は、又再び來らず候ふか。あはれ千重の群山三百里、たゞ懐し、たゞ戀しの思ひ、朝々暮々の妾が繰言、定めし夢裡に入り候はむ。

本夜、良人は旅行して那智山にあり。ひとり淋しき妾が寢屋、片破月は梢に懸り、嬰兒は笑みて傍に眠れり。回想は胸を衝いて、遂に筆の雫となり候ふ。春子様、貴孃の片信も、妾が滿身の喜悦に候ふ。何卒最近の福音御洩し給はるべし。月は落ちたり。夜はくだちたり。左様なら。

（評）奥様になりての文としては、今少し心を用ゐられたし。

○團扇を贈る文

陸前　菊地のぶ子

先日は結搆なものを有難う。何か御禮のお印を差し上げたいと思ひましたが、もう小町紅や白粉でもありますまいから、追ひ／＼時候がら、名物の團扇を贈りました。お氣に入りますかどうか。餘りまん圓で、しかも眞白な無地で、興がないと思召すかもしれませぬが。また例のお舅様の御名吟でも、お書き遊して戴いたならば、却て其の方が高尚でよからうと思ひまして。ま

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

たてとさらにまるいのを撰みましたわけは、何卒雪さんが。——私の只一人の妹の雪さんの優しい手につくられる家庭が、何卒あの團扇の樣に圓滑なたのしい圓欒である樣にと、妹を思ふ姉の老婆心からてす。何卒雪さん、姉の心を汲んで、永く秋風を吹かせずに、使うてやつて下さい。此姉のみか、團扇迄がどんなに本望な事でせう。で、ほんのしるし迄に。かへすぐも、旦那樣を大切に、別して御兩親には、よくお仕へなされよ。

京の姉より

（[illegible]評）姉の情一通りきこえたり。

○戰地に在る兄上へ

德島市　たみ子

もうお手紙がありさうな時分と、指折りかぞへて待ちわびてゐました昨夕、『郵便ッ！』と一聲、さア家内惣出で、ぺたぐと玄關へ駈け出しますと、果してお手紙、そのうれしさ。

内地てすらもうぐ堪りませぬものを、九十幾度といふ戰地の暑さ、察しあげます。當方ては母さんも嫂姉さんも、皆んなお達者てす。殊に芳ちやんは、まア丸々と肥太つて、怎んなにか可愛くなりましたらう、それて又腕白と來たら一方なして、私が一生懸命になつて漸つと編み上げた靴下（兄さんへお送りせうとて）を、一寸机の上へ置き忘れてあつたのた、知らぬ間にスッカリ引きほぐしてしまつたり、大切のぐ今着いたばかしの女子文壇の綺麗な表紙を、扯ぎ破いてしまつたり、今も今とて、このを手紙を書いてゐるうち、母さんがお召なので立つて行つて、歸つて見れば、これこの通り、大きな○だの△だのをかいて喜んでゐるのですの、ばんざあいぐッて。

母さんは、婦人會の御用て、此頃は毎日戰死軍人の御葬式に列席なさる。又嫂姉さんは、相變らず特志看護婦會の方へ、日々勤めてゐらッしやいます。私は學校も近々に始まるので、そろぐ復習をはじめています。傍ら水彩畫（つてもお恥しいけれど）の稽古を勵んてゐます。いづれ繪葉書かなんかに、少しうまく描けるやうになつたら、お目にかけるつもり。まああてにしずと待つていらッしやい！。

仰せによつて、おはづかしい腰折を二つ三つ。

　蝉のこゑもすゞしき朝かぜに、
　　のぼりなびくようぶすなの森。

此中、吉井の伯母樣とここに逗留中の寫生です。

　蝉啼つる里のうなゐもかへるなり、
　　さと川つゝみ、日はなゝめにて。

これもおなじく。

　愛でましゝ人は在らぬを、とりぐに
　　籬のあさがほ、いろきそひけり。

朝顔は澤山咲きます。お好きの瑠璃の多いこと。鉢を置いて、丸窓の下のお机に、筆頭いてセッセと筆を走らしてゐらッしやる嫂姉さんのお手紙を、そッとのぞくと袖屏風、『ほゝゝ花さん、見てはなりませぬ！』って……。さよなら。



短篇小説

廣津柳浪選

天

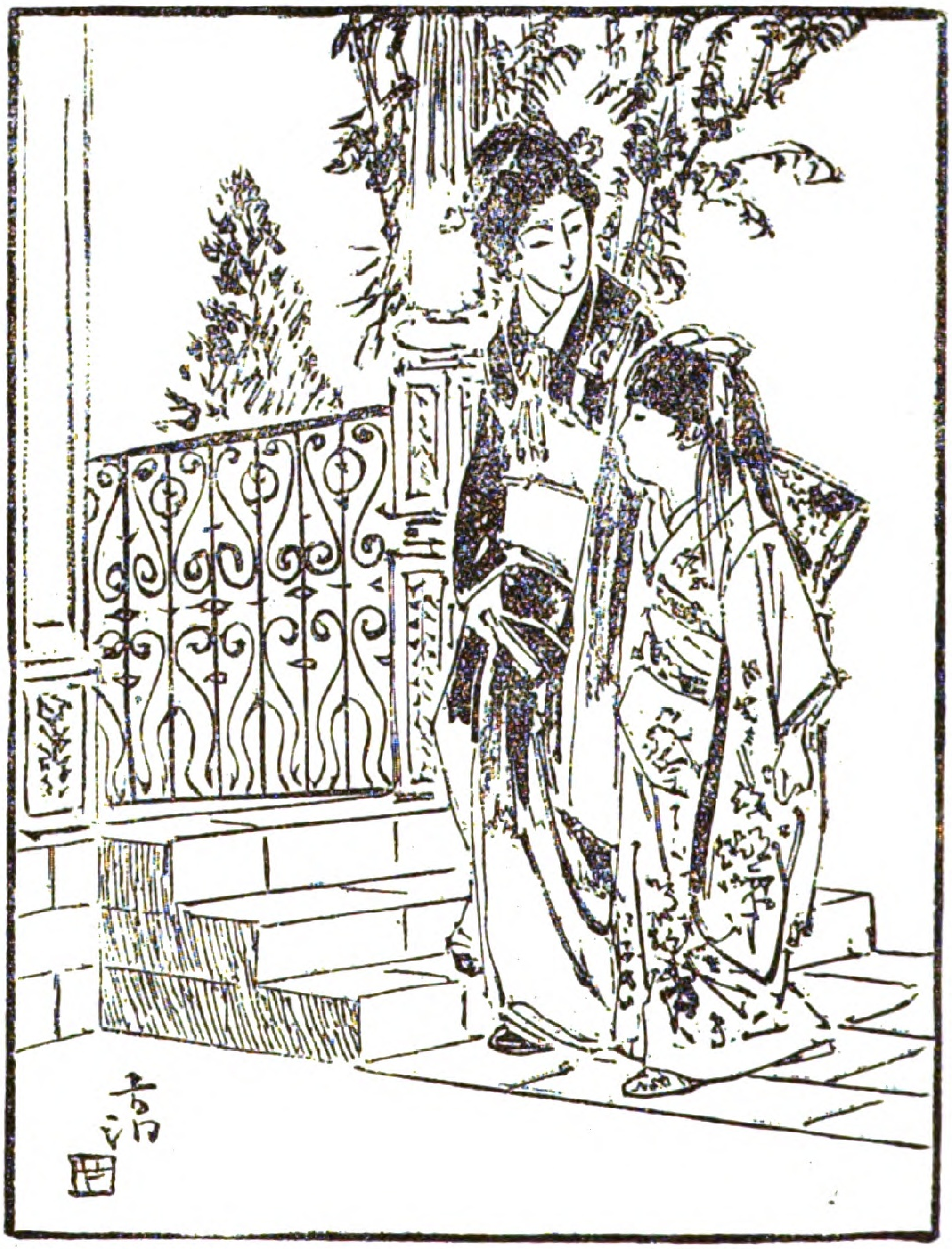
○慈善音樂會

麹町區平川町六丁目三十二　秋山方　小林菊子

松岡孤兒院の、音樂會場の入口に年頃十七八位の令孃と、其妹らしい十歳位の二人の令孃が立た。其時恰度そこに居た婦人幹事が
『ヲヤマ！島林のお孃樣よく入らしやいました、さーどーぞこちらへ』
二人は輕く會釋して、導かるゝ間に靜に歩を移した
『あなた方相濟みまんが、もう少し彼方へ御詰め下さいませんか、お氣の毒ですけれ共何分大變な入場者なんですからねー、はいどうも有難う、さあお孃樣此方へお座り遊ばせ』
幹事は多忙さうに、立去た、兩人は丁寧にあたりへ會釋して其處へ座を占めた。其時院長の開會の辭が濟むだので入變りに壇に昇つたのは十八九の少年であつた少年は一通聽衆の方へ目を配つて、慇懃に禮をした。そして極めて嚴格なる語調で
『エー博愛なる聽衆諸君よ、此暑さもお厭ひなく、我々三百名の孤兒へ同情を表せられて、御來場下すつたのは會員一同の欣喜に堪へざる次第でございます就ては訥辯ながら、私共孤兒の身上談を大略述べまして博愛なる諸君に、聽いて頂きたい考へでございます』
此時先きの二令孃は『お姉樣孤兒て何の事でしよね』
『孤兒とはね、お父樣もお母樣もない小供の事よ』
と可愛らしい耳の邊に私語た
『ではお姉樣、私も孤兒なんですねエーお姉樣』
重ねて熱心にきくので
『さうよ、だから默まつて聞て入つしやい』
といつた姉の眼は異樣にかゞやいたが急に他へ轉じた
先きの少年はつゞけながら
『世の中に何が不幸と申しましても此孤兒位不幸なものはございません如何なる財産家に生れても如何なる名門の家に生れても、兩親の戀いしくないものはあり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ません、況我々の境遇に於てをや、てございます、殊に私などは其中ても、最悲惨な境遇に逢つたのてございます、それは私が六ッの年両親が死亡ましたものですから、其日から路頭に迷ふ様になりました。處が其村に乞食のお八と申て名代の悪婆が居まして私は此女の手に拾はれたのてございます元來產れついての乞食てありませんから人に物乞ふのが恥しいといつては擲ぐられ、もらひに出れば友達に笑われ小供心にも口惜しいと思つて、泣て歸つては又擲られ食事も與へられなかつたことは度々ございました。



そーして三月經過せぬ間に私はドッカリ病床に臥したのてございます、處がお八は私をすてゝ何處へか姿をかくしました」

少年の語調は一變して一言一句低く顫ひを帶びて行くのてあつた。

『で私は此那乞食小屋で死ぬよりも兩親の墓場の前で野倒死ても仕樣と思つて」轉た昔の樣の忍ばれてか彼はほろりと一雫落した、聽衆の方からは、しきりと鼻かむ音がきこえるのである、墓場へ參りまして二日が間飮まず喰はずて寝て居りました。此を草葉の陰で見て居た両親の心はどんなだつたてしよう、今思ひ出すと胸が搔きむしられる様て

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

す』
少年は壇へ乘ねて其逞くましい、右手を犇と顔に掩た
聽衆の方では聲を發して泣くものがあつた。
『其處へ今の院長が通りかゝられて、私は救護られまして、今では懇那に不自由なく生活さして頂いて居るのでございます、談が大變長引きまして、時間がなくなりましたから、これで御免を蒙ります』
喝采に送られて、少年は壇を下りた、軈て其日の音樂會は閉會した。其翌日音樂會場の正面に、左之通大書した立札が立て居た
一金二百圓也。右は今回 島 林里加子同登榮子の兩令孃が本會へ御寄附相成候

人情の波瀾、世態の半面は一場の音樂會にも、能く見陥する事が出來る、脚色は極めて簡單であるが、此作の優れた所以は、一點も輕浮の筆が弄ばない點て、始めから終りまで、細心綿密、一行と雖も疎笨な文字を下さない、感服（選者評）

短篇

○おとゝひ

武藏　ほたる

「じやあ姉さん何しても行の」と、心細さうに見上たのは、年頃十三四の稍さめた双子の袷に下髮の、見るかげもない裝ては有が、何所か品のいゝ少女である、姉と呼ばれたは夫に二ッ三ッも上か、其子に能似た少女て裝も對の双子、只髮計は今結たらしい島田て
「エ、私も少とも行きたくはないんだけれど、玉ちやんも知てる通り、兄さんは軍に行つしやる、跡はお母さんと私等計り、斯な事玉ちやんになんか聞かせたくはないのですけれど、まあね一人でも人數を減した方がつて、叔母さん始め親類の人も云ものですからね」と、之も未少女氣の情なさそうに膝を見詰ながら
「お母さんは何なにしても、傍に置たいお積なのですけれど、此間から叔母さんが度々斯して家に置ても錄な躾は出來す、只遊ばせて置よりは寧奉公させた方が當人の爲にもなると仰しやつて、昨日入らしつて、丁度宜口があるからお目見をさせたらとの事、夫には去年の秋お父さんが急にお亡り後色々お世話に計りなるものですから。強い口もきかれないつて、勿體ない昨夜もお母さんが泌々仰しやつて、貴て兄さんでもお家なら奉公なんかさせるのでは無けれど、之も時世と諦めて兎に角明日行つて見てお呉つてお頼みなさる樣に……何の之が親の爲なら苦海にさへ沈む者が有んですもの、大家への小間使、少とも辛い事は無のですけれ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ど、矢張始終お傍で我儘計して居た者が急に他人の中へ出たら嘸辛かろうとの思召から、そう云て下さると思ふと、眞に有難いやら悲いやらで私泣て仕舞つたのよ」と、いつか聲はふるへてくる。

少女は引入れらるやうに姉の膝にとりつきながら

「宜ワ姉さん、じやあ行つしやいよ、私淋くとも一人でお母さんのお役に立樣に働きますから、私も最十四、來春は學校も卒へますしだけど眞に惡いのね、姉さんは御奉公に行つしやると云に、私呑氣らしく學校へなんか行つてゝは………」

「あら玉ちやん何を云のです、何ぼ零落たからつて、只一人の妹を小學校も卒業させないで何するものですか、嘸々斯なに仲よくして毎晩一所に寐て騒いでは叱られた者が、明日からは一人、お互に淋しい事ね」

夕暮〔賞外〕　大和　富本翔子



「だけど姉さん、未お目見丈でほんとにきまつたのではないのでせう」

「あゝそうよ、一日か二日居て、お氣に入れば續けて居るんですつて」

「それじやあ」と、少女は愛らしき首を傾けて聲密ませ

「あの叔母さんには内密ですけれど、成丈お氣に入らぬ樣にして歸つて來て頂戴な、お母さんは元々義理でお遣なさるんですもの、お氣に入らないで歸つて入らつしやるに別にお小言も出ないでせう」と、思ひ入りし如く云のである、姉は嬉い妹の言葉に、我にもあらずしかと其手を握りしめ熱き涙をハラ〳〵と濺ぎながら

「玉ちやん有難う、眞に未年もゆかぬお前さんに迄てんな苦勞をさせるとは……あゝお父さんがお達者ならこんな事も無かつたろうに」と、跡は言葉も消て二人

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

共暫無言、あはれ思は去年の春新調の着物に一家團欒して、樂しく年を迎へた事など追想するのであらう？やがて乙女は氣を取なほし

「玉ちやん、もう何にも云ないて、今夜は二人での寐じまひです、澤山お話をして置きませうね！」

薄れゆく日の光は力なき影を障子に宿しつ、さすが都も何となく濕りて見ゆる秋の夕暮を、鴉計りがかしましく、己がねぐらにかへるとて啼のてある。

能く情な盡くして居る、短篇ながらも所謂家庭小説の上乘なるものであらう、對話はなか〳〵手に入つたものであるが、比較して地の文は稍劣る、小説氣のある方には盡ひない（選者評）

人

○お孃樣

神田　大澤隆子

「松や、納涼ながら五十稲荷へ行から。お母樣に伺つたら宜いつて、仰有つたから……」

是はまたお珍らしいお孃樣の仰せ。遂しか夜分お出ましになつた事もないのに……と私は不審に思ひながらお玄關へ、御平常の紅緒艶なる藤畳黑塗の東下駄を直しに參りました。

今し方お風呂を召したお孃樣、袂長き大柄の白がすりのお浴衣に、緋の絞り飛しの絹縮の御帶、帶留の水色リボンがいかにも配合よく、御簪の白薔薇一輪。夕風に戰いて床しうかをるかとばかり。あゝ是でお髮が高島田であつたなら、今一層お美しからうものを。あの三枚櫛とか、鉢卷櫛とやら、あれが房々として金糸のお根懸であつたなら……私は譯もなく、此樣なことを思ひつゞけながら、お供して參ります。

涼しい風がそよ〳〵と、袖を飜へして、晝の暑さはどこへやら、空には美しい星の光。よくお琴でお調べ遊ばす春日詣（？）暗の螢が銀砂子……といつたやうな。

今宵の縁日の賑はしさ、納涼がてらの人が多い故でせう、雜踏する小川町通の電車線路を横ぎり、お孃樣は神保町の方へすた〳〵と……其御足のお早い事。平常お靴を召す故でせう、一生懸命馳け出して、やつと追ついたのは、東海堂といふ書店の前。

「和女、此店で才媛文壇出たか何だか聞いてお呉れな。眞實は明日發行んだけれど……」

とお孃樣は傍の電信柱の陰に……。私は店内へ……。

「お孃樣ございましたよ。」「あゝ然かえ。」と仰有り乍ら、引奪るやうに受取さま、忽ち軒燈にすかし見給ふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

幾頁。『オヽ嬉しい〳〵。私のが出て居るわ。』とニコニコなさる。『お孃樣、何でございますの？』と伺ふと『和女に話したつて分りはしないよ。私の詩が載つて居るんだけれど……眞實に考へると和女は無學だから可哀さうだわ。雜誌一つ讀めないんだから。』尚ほ〻笑まれながら。お孃樣も餘りな事を仰有る。私だとて學校へ通學へば其詩とやらも作れるであらう。雜誌も讀めるのであらう。あゝ玉でさへ磨かねば光りは添はぬといふに、增てや私は死にも比すべき身。其上みがく術さへないのだものを。あゝ私もお孃樣のやうに、美しい家庭に生ひ立ち、御慈愛深き御兩親があつたなら——

『松やもう歸らう。緣日も面白くもないもの。』とのお言葉。

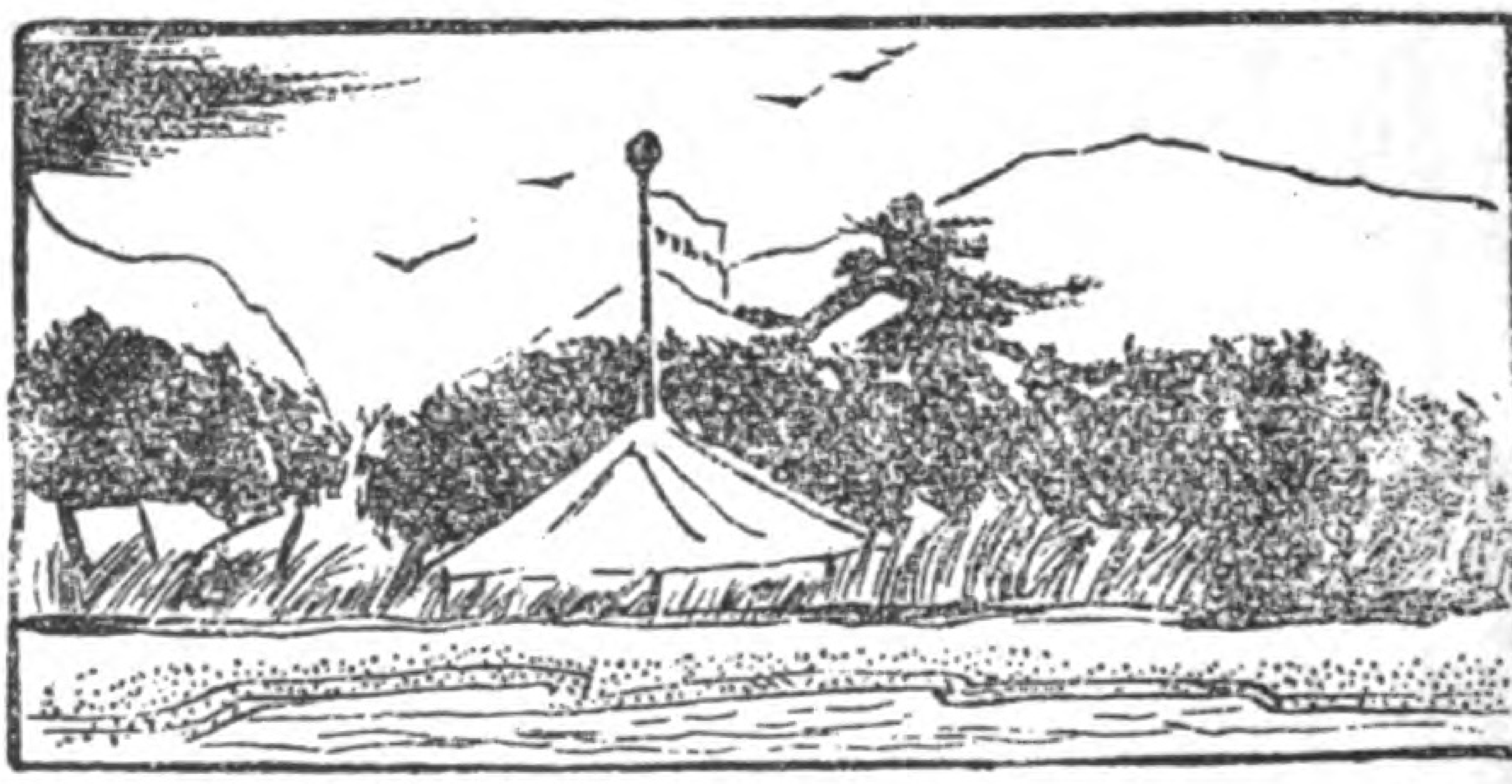
＊　＊　＊　＊　＊　＊

『お孃樣、早十時ですからお寢み遊ばせつて、奧樣が仰有いました。』お部屋の襖戶の傍に蹲まつてこう申上げても一向御返事がありません。其もその筈、お文机に俯向て、さめ〴〵と泣いて居らつしやるので。あゝ先刻御歸邸遊ばしてから、奧樣の——美香さん貴女は何です、未だ生徒ではありませんか、學校へ行つてる間は、勉强が肝要ですよ。此後決して此樣な事をしては成りません——散々お叱言が出ましたのでお孃樣は、きつと其が悲しいのでせう。

『アノウお孃樣……。』重ねて申上げますと『アヽもう分つたよ、一度いへば澤山、私聾じやあないからねえ、いつ寢たつて私の勝手だわ。眠くなれば好な時に寢るわ。エヽ口惜しいつ……。』桃色絹の半帛を、血に啼く時鳥の聲のやうな音と共に、ピリ〳〵ッと嚙み裂いて、又も忍び音に…………。

女子投書家氣質とも言ふべきもの、投書の是非は此處に論ずべき問題でない、只此文、輕妙、女中の口を藉りて當世のお孃樣を映し出すこと、活動寫眞も及ばず（選者評）

水泳講習場　〔賞外〕　山口堀たつ子



秀逸

○譽と愛

名古屋　中平文子

（上）

「貴方まア眞當に、お立派にお成遊ばしてね、而して何時迄もお若くて入らしやるわ」

絹上布の單衣に紫の袴低く着て、濃い黒髪を無造作に束髪に結んだのを、紅石入の髮針で止て、細い金鎖を胳と帶の間に見せた計、餘りに華美々々しからぬ裝の中に、何處か洋行歸りの高襟な處が見える、征矢子の美しい姿を、藤代は今更の如く眺入つて

「私は最早、全然の田舎者に成つて了つて、斯して貴女なんかのお傍にゐるのは、お耻かしい樣ですわね－貴郎。」と床柱に靠れて、兩手を組みながら微笑んでゐる、眉目清秀の若き主人を振顧ると、

「昔からだよハヽヽ」主人は聲高に笑ひ捨た。

「まア酷いわ、覺えて入らしやい。」と可愛い目で一寸良人の顏を睨み上たが、又征矢子の方に向き直て

「だけどね－征矢子さん、是でも田舎醫者の家内には過ぎてますわホヽヽ」

「是は早速敵討だねハヽヽ」

あどけ無き藤代、快活な主人、心から樂しげな平和な家庭の樣が、征矢子の胸には、如何に響いたのか、何と無く物悲しげに差俯向たので、夫婦も暫言葉なく口を噤んだ

折から勝手の方で、けたゝましく子供の泣く聲。

「あ、坊やが起たのだね、子持は之だから困つて了ふ、征矢子さん一寸失禮」と藤代はあたふた出て行たが、又小走りに歸つて來て

「貴郎、何乎御馳走仕升から、征矢さんをお歸し爲すつては不可ませんよ。」

下

後に征矢子は一層の沈默を守つた

「英雄樣、私、貴郎にお願ひしたい事が有るんですが、お聞下さるでしやうか。」

十分程の後、漸く沈默を破つた征矢子の、此言葉はいたく悲痛を帶びてゐる。

英雄が否無く首肯を見て、漸く口を開いた、

「英雄樣、御許し下さいまし、私は貴郎を戀してゐましたので……」

英雄は愕然と眼を睜つた。

「恁う申せば、四年前の私の仕打を、お怪しみてしやうが、まア一通りお聞下さいまし。丁度彼の時分でムいました、私の師ストーリー夫人が歸國なさるに附て

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

平常から大變、私の技術に望をかけてゐて下すつたものですから、此際是非にと渡米を進められたので、大低其と決してゐた時でした貴方からの……吁其時！私は實に三日三晩と云ふ物は、煩悶を爲盡しましたが……：御許し遊せ、私の萌ゆる樣な榮譽心は、遂々初戀に打勝つたので御座います、渡米後とても、初の中こそ輝く希望に慰られてゐましたれ、其後暫くの間に父に離れ母に死れて、全く孤獨の身となりまして、漸く失戀の苦痛に悶へ始めました。其後間も無く聽ての望通り榮譽ある月桂冠を戴いて歸朝の途に着きましたが……橫濱の波止場に、私を迎へて呉れたのは皆他人計でした。扨歸朝後とても此處、彼處の演奏に、ピヤニストと歌はれて、美しい花束を送られた事も數知れませんが……吁其が何て嬉しいでしやう？、私には夫を見て眞心から喜んで呉れる、親身は一人も無いのですもの、私は始めて愛なき孤獨の人世がうら悲しくなつて參りました。名聲が何てしやう？ピヤニストが何てしやう？愛！愛！人世の誠の愉快は、眞に是一つです、あゝ私は眞個に藤代樣がお羨ましくて、否今更悔んだつて仕樣が有ませんけれど、什う乎英雄樣、此私を哀と思召たらせめて妹とでも……」語り終つて、征矢子は英雄の前に身を投げた四年前の、初戀の古疵を再びゑぐられた英雄は、默然と憂愁の眉を寄せたまゝ。



焦がれ　〔賞外〕　越前　菊池のぶ子

『私はあなたを戀して居ました』は少し突然過ぎるが併し短い中へ是だけ入れるのだから無も、緊縮を要するであらう、ピアニスト征矢子の懺悔はハイカラ似てハイカラにあらず、私を迎へてくれたのは皆他人ばかりでしたは一語機徼に入る　（選者評）

○百合ちやん

横濱　寺田光子

白萩の幾株、露がこぼれそうなのを片手に右手に美しい女傘を持つて、今朝も早くから百合ちやんは母樣のお墓へ行くと云つて、私がお窓で呼んだ時、いつもの美しい笑みを見せて一寸ふり返りながら急いで行つた。

何と云ふて可愛らしい百合ちやんだらうと私は呟いたお父樣は文學博士、亡なられたお母樣も質婦人であつた。百合ちやんは何つちかと云ふとお父樣に似て、色白な眉の秀でた氣品のある容貌を持つて居る。

丁度百合ちやんの母樣が大學病院にチフスを病んで入らしつた頃、百合ちやんの顏は青く沈んで、いつもの美くしい唱歌も聞えなければポチ(犬)にからかつて笑ふやうな事もなかつた。庭の百合や撫子を取つてあげた時ばかりは嬉しそうに、母樣のお枕元の罎にさしてあげませうと淋しい笑みをもらした。母樣が亡くなられてから私には前より親しくなつて、何でも姉樣々々と相談するやうになつた。

母樣が白いベットの上にやせた〳〵手で私の髮をおなでなすつて、母樣はもう逝きますよ百合ちやんは父樣に孝行して頂戴と仰しやつて目をおつぶりになつたの、もういくら私が泣いたつて母樣は歸つては入らつしやらないのね。然う云つては私は泣かされた

お葬式の日、百合ちやんの白い喪服を着て首をたれて居た姿、あの時彼の日の會葬者の中誰一人として忘れられないと言つて居る。私はこんな可愛らしい蕾の花を殘して逝かれた母樣のお心を思つて其時も唇をかみしめた。百合ちやんは今年やつと十才で凡の子ならば未だにくまれ盛りであるのに叔母樣にも逆つた事がないので、叔母樣(母樣の姉君)も妹が何んなに悲しがつたろうと思ひやられますと、百合ちやんのお話の出た時涙ながらにしみ〴〵と私に仰しやつた事があつた百合ちやんは一つの邪念のない天使のやうな子であるので而して何より母樣のお墓が好きで日曜日といふと雨がふつても風が吹いてもいそ〳〵として出かける。

母樣はたつた一人の百合ちやん何うか可い淑女にしてとばかり云つて入らしつた。去年あたりからやう〳〵さげ髮に結び始めた百合ちやん此頃では前髮もふつくりと漸々可愛ゆくなるばかり私は其だけ猶亡き母樣がおいたはしくてならない。聞けば此度愈々繼母樣が入らつしやるとかあんな可愛い、百合ちやんを何うしよう。けれども百合ちやんの柔しい心には何んな人だつて邪慳にはしやうがない。

ふとこんな事考へて以前の窓に百合ちやんを待つて居た。暫くして百合ちやんは嬉しそうに歸つて來た。

姉樣！母樣のお墓にも萩が一ぱいよ私も家の垣根のをあげて來ましたの。をかしいけれど姉樣此見て頂戴、といつて小さい手帳を取出した

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

み手向にさゝげし萩の初花を母君見ませす、母君よ
母君の眠りますらんみ墓邊に語るも嬉し白萩の花
私はくり返して胸が一ぱいになつた。
百合ちやんよく出來ましたわほんとに感心ね
といふて嬉しそうに笑つて
又姉樣來てよお父樣にお目にかけてね
とかけて行く私はボンヤリと其後
影を見送つて泣いた
アヽ百合ちやん、繼母樣が入らつしやると聞いたら必と喜ぶにちがひないけれども、私は案じられて何うか其繼母樣がよくあつて下されば可いけれど。
私は凭う思つて何處までもく百合ちやんの幸福を祈つた。

四阿〔賞外〕　日本橋濱町　長谷　柳子

すらりとした誠に百合の花のやうな小說、下手に書けば單調になるが、百合ちやんの可憐は幾度繰返されてもうるさくない、あはれな小說、やさしい小說(選者評)



○陸と海

神奈川　中村せい子

姉は紫のリボンに白薔薇の簪、房々とせる黒髮長く脊に垂れて嚔美しき子なり、歳は十三。
妹は桃色のリボンに紅薔薇の簪、パッチリとせる眸愛を含みて唇蕾の如き子なり、歳は九つ。
姉は父に伴はれて始めて海を見たる時、白く灰色に塗りたる、黒く鐵色したる、數艘の軍艦、高く檣の頭に日の御旗を閃めかせつゝ黒烟中空に蟠る雲と湧かせて走りゆくを眺めしより、小さき胸は烙印せられしやうに海軍を豪きものと思ひぬ。
妹は母に連られて嘗て市に出てける折、黄色の帽黒絨の服、銃を擔ひ、劍を腰にして、騎馬の士官の號令の下に渦巻き上る砂塵を蹴立て、大隊中隊肅々と進み來るを見しより、幼な心に刻み付られしやうに、陸軍を尊きものと思ひぬ。
姉も亦た戀を知らず、されど海軍大將は最も豪き方なりと思へり、我は海軍大將のお嫁にならんと、ひそかにつぶやけることもありき。
妹は未だ戀を知らず、されど陸軍大將は最も尊き人なりと思へり、我は陸軍大將が大好よと、言へり。
姉は海軍大將を豪しと云ひ、妹は陸軍大將を尊しと云ふ、二人は爭へり、學校の歸るさ、往くさ、まゝご

何と云ふて可愛らしい百合ちやんだらうと私は呟いた。お父樣は文學博士、亡くなられたお母樣も賢婦人であつた。百合ちやんは何つちかと云ふとお父樣に似て、色白な眉の秀てた氣品のある容貌を持つて居る。
丁度百合ちやんの母樣が大學病院にチフスを病んで入らしつた頃、百合ちやんの顏は青く沈んで、いつもの美くしい唱歌も聞えなければポチ(犬)にからかつて笑ふやうな事もなかつた。庭の百合や撫子を取つてあげた時ばかりは嬉しさうに、母樣のお枕元の罎にさしてあげませうと淋しい笑みをもらした。母樣が亡くなられてから私には前より親しくなつて、何でも姉樣々々と相談するやうになつた。
母樣が白いベットの上にやせた〱手で私の髮をおなでなすつて、母樣はもう逝きますよ百合ちやんは父樣に孝行して頂戴と仰しやつて目をおつぶりになつたの、もういくら私が泣いたつて母樣は歸つては入らつしやらないのね。恁う云つては私は泣かされた
お葬式の日、百合ちやんの白い喪服を着て首をたれて居た姿、あの時彼の日の會葬者の中誰一人として忘れられないと言つて居る。私はこんな可愛らしい蕾の花を殘して逝かれた母樣のお心を思つて其時も唇をかみしめた。百合ちやんは今年やつと十才で凡の子ならば未だにくまれ盛りであるのに叔母樣にも逆つた事がないので、叔母樣(母樣の姉君)も妹が何んなに悲しがつたらうと思ひやられますと、百合ちやんのお話の出た時涙ながらにしみ〴〵と私に仰しやつた事があつた百合ちやんは一つの邪念のない天使のやうな子であるのて而して何より母樣のお墓が好きて日曜日といふと雨がふつても風が吹いてもいそ〱として出かける。
母樣はたつた一人の百合ちやん何うか可い淑女にしてとばかり云つて入らしつた。去年あたりからやう〱さげ髮に結び始めた百合ちやん此頃では前髮もふつくりと漸々可愛ゆくなるばかり私は其だけ猶亡き母樣がおいたはしくてならない。聞けば此度愈々繼母樣が入らつしやるとかあんな可愛い丶百合ちやんを何うしよう。けれども百合ちやんの柔しい心には何んな人だつて邪慳にはしやうがない。
ふとこんな事考へて以前の窓に百合ちやんを待つて居た。暫くして百合ちやんは嬉しさうに歸つて來た。
姉樣！母樣のお墓にも萩が一ぱいよ私も家の垣根のをあげて來ましたの。をかしいけれど姉樣此見て頂戴、といつて小さい手帳を取出した

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

み手向にさゝげし萩の初花を母君見ませす、母君よ
母君の眠りますらんみ墓邊に語るも嬉し白萩の花

私はくり返して胸が一ぱいになつた。

百合ちやんよく出來ましたわほんとに感心ね

といふて嬉しそうに笑つて

又姉樣來てよお父樣にお目にかけてね

とかけて行く私はボンヤリと其後影を見送つて泣いた

ア丶百合ちやん、繼母樣が入らつしやると聞いたら必と喜ぶにちがひないけれども、私は案じられて何うか其繼母樣がよくあつて下されば可いけれど。

私は恁う思つて何處までも〳〵百合ちやんの幸福を祈つた。

四阿 〔賞外〕 日本橋濱町 長谷柳子

すらりとした誠に百合の花のやうな小說、下手に書けば單調になるが、百合ちやんの可憐は幾度繰返されてもうるさくない、あはれな小說、やさしい小說(選者評)

○陸と海

神奈川 中村せい子

姉は紫のリボンに白薔薇の簪、房々とせる黑髮長く脊に垂れて嘸美しき子なり、歳は十三。



妹は桃色のリボンに紅薔薇の簪、パッチリとせる眸愛を含みて唇は蕾の如き子なり、歳は九つ。

姉は父に伴はれて始めて海を見たる時、白く灰色に塗りたる、黑く鐵色したる、數艘の軍艦、高く檣の頭に日の御旗を閃めかせつゝ、黑烟中空に蟠る雲と湧かせて走りゆくを眺めしより、小さき胸は烙印せられしやうに海軍を豪きものと思ひぬ。

妹は母に連られて嘗て市に出でける折、黃色の帽黑絨の服、銃を擔ひ、劍を腰にして、騎馬の士官の號令の下に渦卷き上る砂塵を蹴立て、大隊中隊粛々と進み來るを見しより、幼な心に刻み付られしやうに、陸軍を尊きものと思ひぬ。

姉も亦た戀を知らず、されど海軍大將は最も豪き方なりと思へり、我は海軍大將のお嫁にならんと、ひそかにつぶやけることもありき。

妹は未だ戀を知らず、されど陸軍大將は最も尊き人なりと思へり、我は陸軍大將が大好よと、言へり。

姉は海軍大將を豪しと云ひ、妹は陸軍大將を尊しと云ふ、二人は爭へり、學校の歸るさ、往くさ、まゝご

との莚に、雛樣の席に…………。

されど姉は十三なり未だ戀を知らず、妹は九つなり未だ戀を知らず。

これは小説と稱する程のものではあるまい、落想奇峭、筆勢勁拔な點を愛して茲に採る、又一種の詩的小品文の型。（選者評）

○野の少女

宮城　菅原蓉子

上

思はず出づる吐息と共に、筆洗に筆を投げて腕組した

『何と云ふ意氣地なしだろう、たかゞ一人の母親であるのに、滿足に養れん上に、あゝ勿躰ないなあ、生活の苦勞から、自分の衣食の世話までもして下さる。好んで御させ申のじやないけれど……エヽ何といふ腑甲斐ない男だらう……先刻も湯屋で同門の者に逢つたらどうだ瀧川先生今度の御出品は、嘸御名作だらうな、早く拜見したいものだつて顏見合せて肩て笑ッて居たそれにつけても、此腕ぢや』恃む所もない樣に目を閉ぢてうなだれたのである。

二十四五の痩た男で、洗ひざらしの糊の强い單物を着て風の吹く毎に、髮の毛が、うるさそうに、肩のあたりを撫てゝ居る。

折柄臺所に、女の話聲の聞えるのを聞くともなしに聞いて居たが『自分が意氣地がない爲に他家の裁縫まで御させ申すのかなあ、あゝどうかして……』かきかけて居る唐紙の上は怪しく濡れたのであるが術なさゝうに立つて机の前に坐つて四君子論を讀む樣子である

中

見渡す限り一二軒よりない山道を年老いた母の手を引きつゝ行く一人の青年、母は嬉しさうに子は樂しさうに邊りの石に腰を下して煙草を吸ひ乍青年は其處此處の景色を説明して居るのである

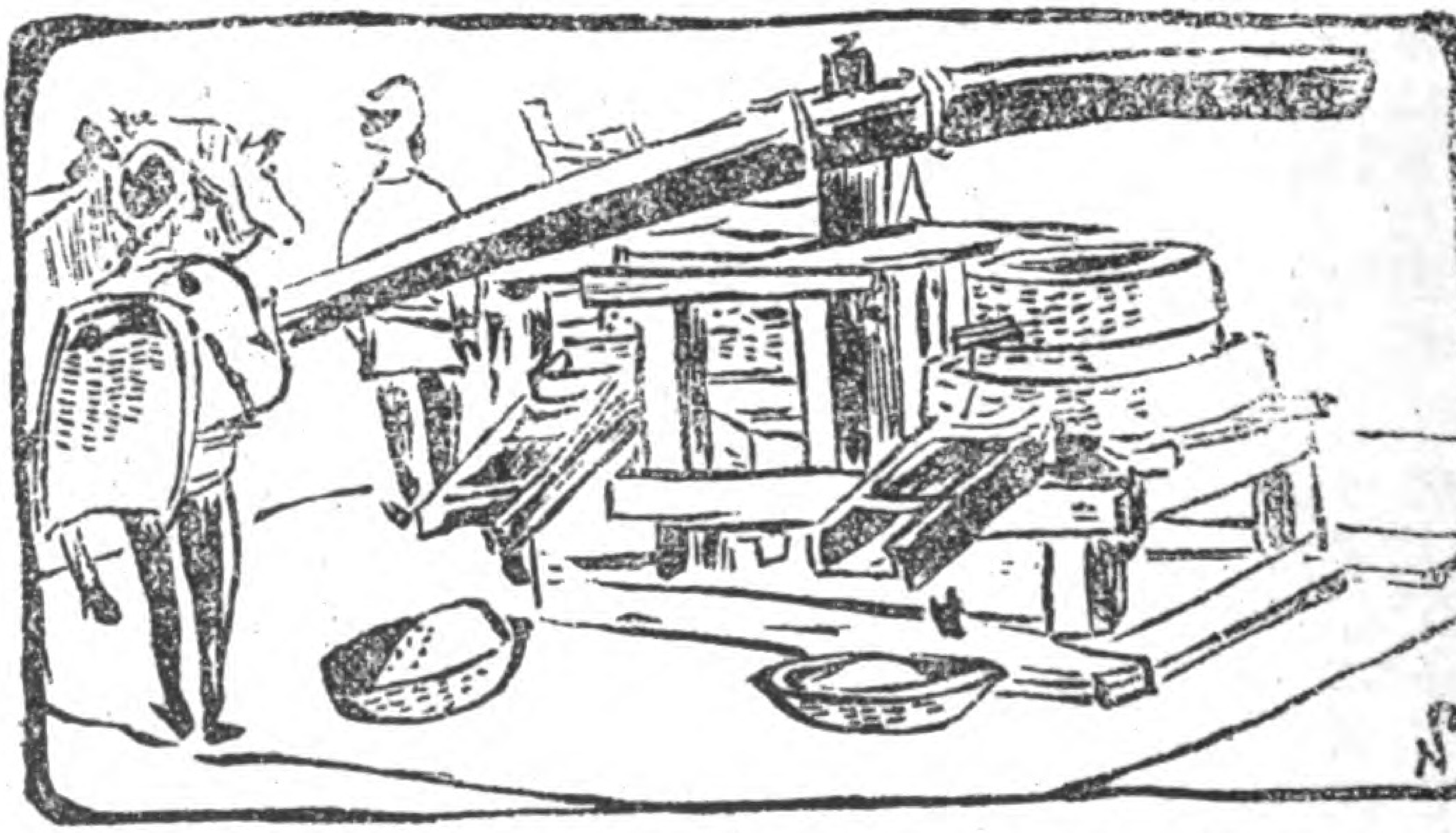
『御母さむこゝは小湧谷といふ處で昔の七湯にはなかつたが近年は中々繁昌する處です是から下へ行くと宮の下へ出るんですけれど横へ入つて宮城野へ出ませうそこには蕎麥の名物があるですハヽヽ名物に甘い物無しつて云ふけれどどうしてそうでもないですよ』と心地よげに笑つたのである此青年こそは瀧川であつた、どうしてこゝへ來るだけの餘裕が出來たか實に彼は母の嬉しさうなのが何よりの愉快で母は其愉快さうなのが何よりも嬉しいのである

話し乍行く中に宮城野へ下りる道にかゝると左右に女郎花の咲き續いた處がある其末が兩方共山が見えて左

は山下に薬家があつて細々と上つて居る畑が其景色と云つたら實に何ともいひやうのない趣がある瀧川はさすがに見捨て兼てか小さいトランクの中から書帳を出して鉛筆を走らせたが半かきさしてふと氣がつくと母が見えないあちこちと見廻すと向ふの花の中に人聲がするのでわけて行くと先でも驚いたかヌーッと立つたのであるそれは年頃十七八の束髮の令孃で白絣の帷子に藤紫の繻絆の襟が少し見える手には女郎花と河原撫子とを持つて居るのであるがキッと見た其目の美くしさそばに居るのは十ばかりの妹らしい……是は結むで下げた髮にとき色のリボンが風をうけてヒラ〳〵して居るのと帶の赤いのとが此景色によい彩色となつて居る瀧川は母でないからもとの道へ歸らうとしたのである

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『翠さん〳〵風を引きますよ大層靜かだと思つたら寐ておしまいなのだもの……翠さん』ハッと眼をあくと野もない令孃も居らぬ却て居らぬと思つた母が居て身は依然紅塵につゝまれた都に居るのであつた



肥後の籾摺　〔賞外〕熊本　平岡信子

『あゝ夢でしたか』

何を御見でしたと微笑んだが母の優しいのは實に瀧川の心を責める種であつたので少し狼狽た躰で

『イエ何つまらむわけてお母さむをおつれ申して箱根に遊むで居た夢でしたが……』身の廻りを見廻して淋しげに欠伸をして居るのを老母はヂッと見つめて居たが鼻聲になつてしかも元氣なく『それは面白かつたね』山へ上る夢はいゝ事がある知らせだと云いますよ私も晩に連ていつて貰つた夢でも見ませうよと相見て思ひ出した樣に笑つたのてあつたが手持無沙汰なので母は勝手へと立つた瀧川は意氣地がないなどゝ呟いて居たが何か心に得た事があると見えてそれから云ふものは勢ひよく畫筆を取つて揮毫て居た毎日……毎日……

青年競畫會と云ふ札を立てた家の中から幾人となく出て來る老若男女

「どうです驚きましたね」

「あの眼つきといつたらないのね」

「どうも旨いもんだあの位な人がどうして今迄僕等の眼にふれずに居たのかなあ君あの瀧川と云ふのは」

「生きてるやうね」

「あれが一番眼につきますよ」

氣遣はし氣に佇むで居た老婦人があつたが是等の評語を聞いてさも〳〵嬉しさうに淚さへこぼれたのであつた

＊　＊　＊　＊　＊　＊

今度の青年競畫會にはいつもあまり名を聞いた事のなかつた瀧川翠峰とかいふ青年畫家が場中第一の傑作といふ名譽ある評を大方から得た成程人物と云ひ景色と云ひ皆異彩を帶びたもので當時丹青界の一談柄と成り寄るとさはると此噂になつたのであるが畫は秋の野に少女が二人語り合ふ處であつた

畫中に畫題を得たと云ふ趣向は、さして珍しいこともないが、青年畫家瀧川翠峰が、寢ても醒めても、母を思ふの情は、野の少女以外の、此小說のやさしい花であつた。（選者評）

○濤の音

神田　小磯君江

一

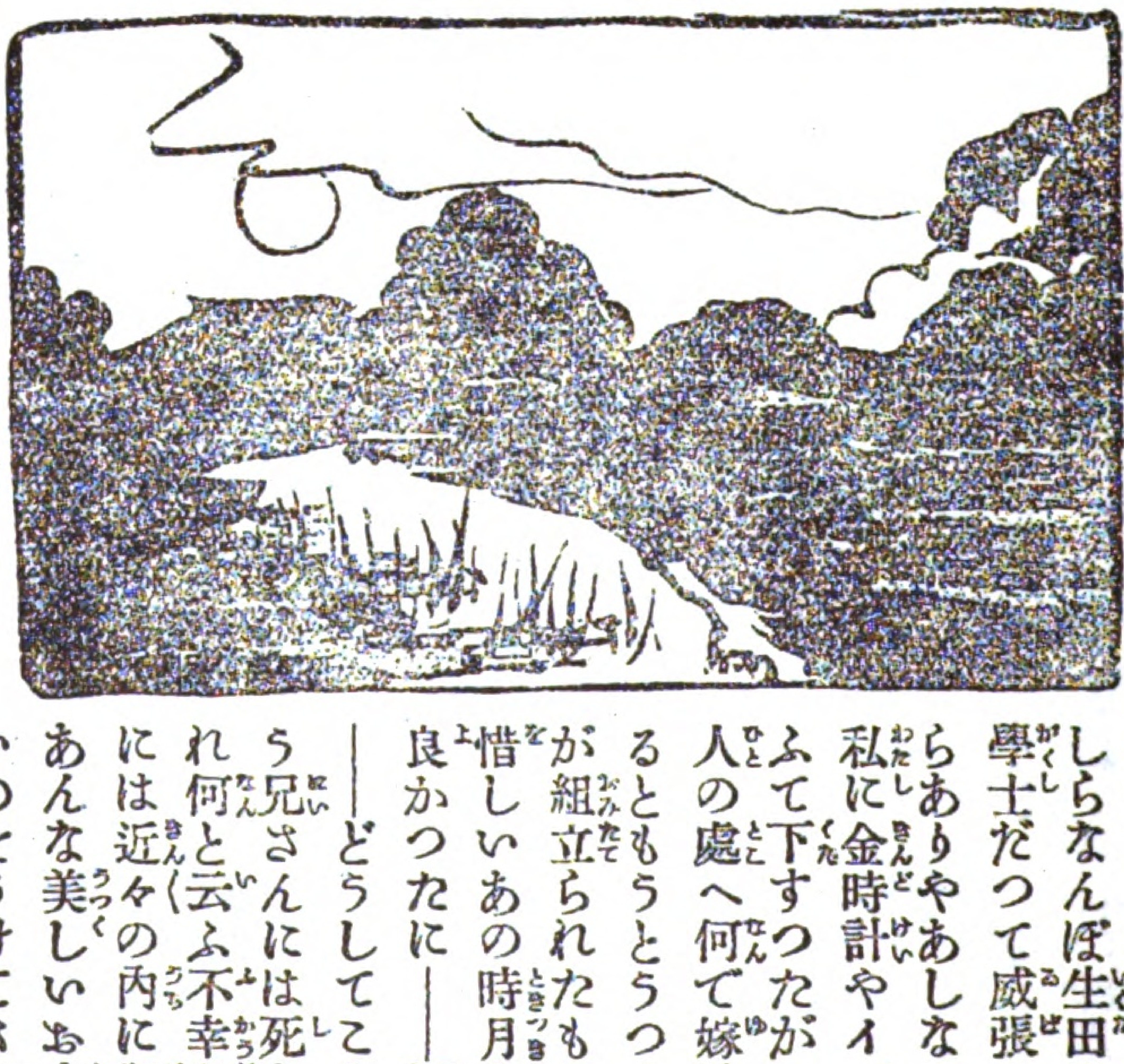
今ベルが鳴つた。海老茶紫ひさし髮鼻先眼鏡に佛蘭西靴さては獅子ッ鼻に至るまでガヤ〳〵と廊下を出て廣くない運動場を三々五々、歩いて行く中に一本の高い青桐の下にもう一週間で卒業すると謂ふ五年連の一群が居る『今日の代數はほんとにむずかしかつたわ』『あんなむづかしいのを試驗に出されたら大變だわ』『あんなのは出やしないわ、だけど橘さんはほんとに良くてきるわね』『橘さんなんざあ四年間品行方正學術優等の突ッ張り私ほんとに羨しいわ』『然し橘さんはお母樣がマヽて被在るからお可哀想だわ此頃毎日考へてばつかり被在るのよ』『マヽッて何？』『オホヽヽヽヽマヽは繼に通ずだわ』『アラまあ大變な新語ね』『橘さんは田代さんとか云ふ醫學生の戀人と自由結婚論主張者だつてネラ慥○△雜誌の二號だつたかに結婚に就いてと云ふのが紅百合つて名前で記載たてしやうあれは橘さんだつて』『あらあんな良い人でも』『況んや青春燃ゆるが如き妾等に於てをやですかオホヽヽヽ』『非常な勢ですね』急の梢て油蟬が鳴きだした、折からけたゝましゆ

う」あらベルよ」

二

『こう云ふ時に兄さんが被存ると良いんだけど』と云ふて瞬をしたのは空色の羅衣に桃色の長襦袢を透かし大理石のやうな腕がチラホラと髪には品の好いオリーブのリボンをかけ後毛が五筋六筋煩さそうに夕風にゆらいで居る…いくらお母樣が生田さんに嫁けと仰有つてもそりやあんまり無理だわ何であんなハイカラ紳士が好きなものがあるものか自由婚結でなくつてどうして神聖な愛が成立たうお母さまはお金に眼がくらんで被在るんだ若し此の樣な時に兄樣が居られると兄さんは田代さんと親友なのだから私を思ふてお母樣に譯を云ふて下さつて私は田代さんの處へ嫁くとが出來るんだけど――色の飽くまで白う頰はボッーと桃色にほてつて左手に持た絹團扇をなぶつて居る水平線を三尺離れた月は雲の屛風にかくされた儘

月夜　〔賞外〕　日向延岡　佐野とく子



日の船出を恐れてか沖には船一艘もない岸打つ波の音更に高いのである――田代さんは今何處に居るだろう私の此苦しみを知つてるかしら醫科大學を卒業したかしらなんぼ生田さんが洋行がへりの法學士だつて威張つてもあんな嫌な奴たらありやあしないお金持だもんだから私に金時計やイブニングドレッスや買ふて下すつたがいやらしい品行の惡い人の處へ何で嫁けやうか兄さんが被在るともうとうつくにスウイートホームが組立られたものをあゝ兄さんの死が惜しいあの時月島丸が沈沒しなければ良かつたに――鯔が一匹波上に躍つた――どうしてこう私は不運兒なんだろう兄さんには死なれお母さまには死なれ何と云ふ不幸兒だろうまたお母さまには近々の内に御出產があるんだつてあんな美しいお方にお父さまの勇ましいのをうけてさぞ可愛らしい赤坊さんてあろうそうすれば猶私が邪魔もの故猶お母さまは攻めなさるだろう聞けば今度の土曜日に結納を取り交す

んだつて思へば猶嫌になつちまういつそ死んて仕舞ふかしら然しお父さんがおなげきになるだろうと云ふて味氣ないつまらぬ家庭をつくられようか自由結婚の爲めに犧牲……—。橘君子はその胸の煩悶に堪へかねて最後の光明を祈つた荒浪高い遠州灘御前崎の燈臺の光が浪のまに〳〵にかすかに輝やいて居る空の彼方流星が一ツ長い尾をスツーと引いた

三

翌日磯の漁師の口に由て君子の入水が傳へられたその亡骸は遠く田代潔の苦學をして居る亞米利加まで漂いついたてあろう君子の部屋に殘るものは愛らしい子猫が主を失て泣き廻て居るばかり生れた赤坊さんは大變君子に似て居るとやら。

(一)に於て學生の口から君子の評判をさせたのは、流石に小說の體を得て居るが、其他には格別趣向に變つた處はない、(二)は必要ないやうて、實は最も能く筆が動いて居る、女學生の狀態觀るが如きものあり(選者評)

○毎日

安藝　池之子きよめ

上

「好く入破いました今日は如何と思つて居りました」と澄江は笑を以て靜子を迎へ、「靜子さんさあお上り下さい母家は暑つ苦るしいてすから今日は離家てお復習致しませうね」、「は、母家でも好ござんすわ」、「でもね八度位違ひますよ」、「左樣てすかては御免下さいまし」と靜子は輕く會釋して互に手を採り離家に行きぬ、

「此室は實に風通しが好う御座いますね、あゝ凉しい事」

「凉しいてせう?、」折柄サツト一陣の凉風二人のリボンを掠めて行きぬ、

「さあ是れから御復習致しませう今日は英語に家政學をね」、と靜子は包みを開きぬ、「はい五時迄丁度四時間ね」、語ひつゝ互に復習を初めけり。

下

靜子さん早お歸邸?、私お願ひが御座いますの」、と澄江は含笑む、靜子も溢るゝ許りの笑を浮べて、「は左樣て御座いますかつまらない私でも出來る事てすならどうか御一所に」、「アラ嫌てすよ靜子さまのお世辭よ、夫人ぶつてらつしやるわおほゝゝゝ」、

「あら澄江さまこそ…嫌てすよ…私お世辭なんぞ申ませんわ…ねー貴女の御用とは」、澄江は事もなげに、「私の用はね、あのね松竹梅の花瓶敷ね、あの編方が分らないのよ彼れを一寸敎へて頂きたいのてす、が御都合は如何で入破います、」「は、あれてすか私の都

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

合は御座いませんからと一か御一所にお願ひ致しませう』、『靜子さん難有よ、ては此糸て……私ね此の竹の編方が分らないのよ此所は如何致すのです』、と澄江は編針と共に糸を差し出しぬ、

『あ、此所はね藤目を八つして此方へ返して、其れから一々永編を入れるのですよ、あ、そうです、御上手ね、直き出來るてせう是れ奇麗なのね、靜子さん、私一番好きよ』、『私も、』もう机上の懷中時計の針は午後六時を指して居る、

『あら最早六時ですよ澄江さん私ね今日は早お暇致しませう』、『オヤ早六時、ては阿母もお待ちてせうから』『はい今日は靜岡の姉も參る積りてすから少し早く左樣なら』『失禮致しました』、靜子は斯く澄江の邸宅を辭し愛用自轉車に乘り鬢の亂れ毛を夏風に弄らせながら全速力にて歸邸しぬ

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

山河靜子と小野澄江とは○○女學校の三學年にて姉妹も及ばぬ程の親友で日々集りては仲よく復習するなど一對の美しき令孃てある。

『毎日』は題の如く毎日て、毎日繰返す日記に過ぎぬ、併し其毎日繰返す日記の中にこそ感物陶情、人世の眞味は籠つて居るのて、毎日だからとて、決して平凡てはない、吾れ此『毎日』を捨てざる所以（選者評）

編輯だより

○毎號の表紙。本誌は次號から毎號の表紙を變へます、着々として刷新を實行するに怠らない本誌は、啻利を顧みるに暇なくひたすら多數讀者の愛讀に酬いたいと思ふばかりてす

○繪葉書添付。いよ〳〵本號から多數愛讀者の希望通り繪葉書を添へることにいたしました、繪葉書流行の折柄、又聊か讀者に樂しませ得る事と信じます

○短冊筆蹟、毎號和歌欄に挿入して來ました名家筆蹟の短冊寫眞版は、本號は製版の後れた爲に次號に載せることゝいたしました

○原稿輻輳、愛讀者の寄贈にかゝる玉稿は多々益々増加するばかりて、毎日机上に山積してあります、自然掲載の遲延もありますし、成るべく優れた作が出るわけてすから、此際奮つて錦心繡腸の作を寄せたまへ

▲東京府立第一高等女學校同窓會　にては日露開戰以來出征軍人慰問の爲め會員の揮毫になれる繪葉書一萬八百枚を戰地に寄送せしが今回又々傷病兵癈兵及び遺族慰問の爲め來る十三、十四、十五の三日間淺草七軒町なる全校に音樂會を催し場内に種々の賣店を設けその純益を擧げて如上の費に供する由時節柄好擧といふべし

はがき文

編輯局選

特別第三賞

○自炊

東京京橋區新榮町三ノ一　鞠子

鎌倉に來てからと云ふもの、手馴れない自炊にばかり忙しくつて碌々御化粧も出來なかつたが、今朝は弟に御飯を頼んで久しぶりに鏡臺の前に坐つた。髮も漸う梳いて終つて掌に水白粉を二三滴。『姉樣、大變〱御飯が焦げ臭い、早く來て』

朝餐は姉も弟も一杯限り

天

○百合のつゆ

靜岡縣藤枝町　石神喜惠子

お白粉をときながら、今小椽へ侍女が置いていつた、鉢の白ゆりを見ると、花に葉に露の玉が、こぼれそう。手のひらに集めて顏へひつたり、どうか此花の氣高く美くしいのに、あやかりたいと思つて。

百花譜以外、新機軸を出せるもの

地

○愛の力

南豐紹葉河畔　富末八千代子

風波の爲め彥根に寄る事叶はぬ白崎丸竹生島の邊りに漂はされて、四十餘人の乘客中一人醉ひ二人倒れ、殘るは當歲の赤兒をしかと抱ける若き女のみ、柱に凭れて身動きもせぬ。

奇警の着想

人

○夕顏の花

鳥取市鍛冶町五七　上山千重子

夏水仙白粉の空瓶に薰る鏡の下、湯上りのぬれ髮を梳けづれる折柄、今年五つの妹の三重子あへぎつゝ「姉

様十の次は何？」と突飛な質問、いぶかりながら十一ぞと數ふれば、「ア、夕顔が十一咲てよ姉様」。

羽翼あり對偶あり文の詞態を以て優る

秀逸

○夜の日記

淺草 夕江

美しい彩雲も鐘の音と共に消えて、邊りは暗くなつたから姉さんが燈をつけると、皆燈のそばへよつて、父様は母様と話をして居らつしやる、妾は姉さんに裁縫を教へて戴き、弟は兄さんから算術を教はつて居る。

幾年くりかへしても厭にならぬ日記

○初秋風

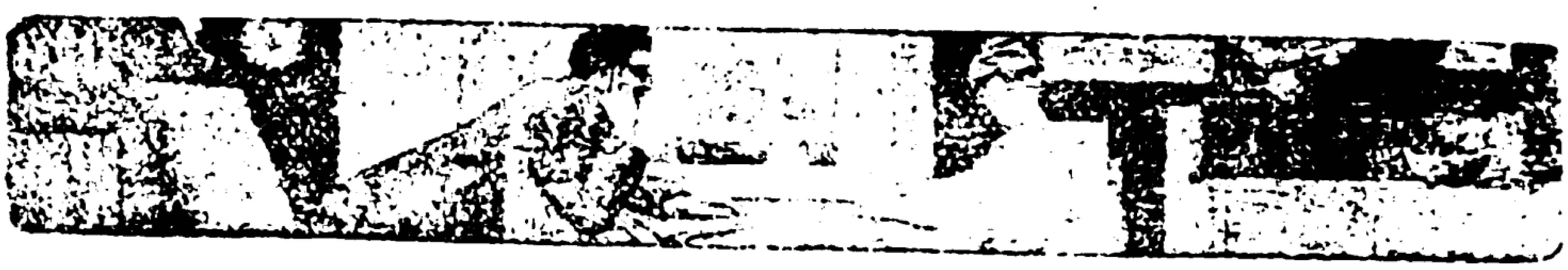
靜岡 武井鈴子

夕化粧を終へて、ふと湯殿の戸を開けた一刹那、面をはらふ一陣の風に、櫻落葉はら〳〵として、末は畑の粟の葉をしきりにならしてゐる、自分は思はずぞつとして、眞白な浴衣の衿をかたくかき合せた。

女子秋風之詩

○仲好

吳市 大上くま子



竹垣を境ひにして居る、隣の靜ちやんのお植ゑなさつた、白の朝顔が私の植ゑた、紅の朝顔ともつれあつて咲いて居ました。其配合の美しい事、

色彩の配合は女子の美的要素

○雛雞

周防 [illegible]百合

ゴーンと夕の鐘の音、妾は驚いて雞小屋に駈付けた、一番二番、何心なく閉めやうとしてと見ると三番目のそれには三日前孵化した許りの雛兒が親雞の翼の中から頭を出して妾を見詰めた、續いて又一羽、その愛らしい事つたら……

地方の讀者は多く同感ならむ

○我が身

小倉 入重子

今は茫々たる天地の間、父母なく又家なくして早く妾は浮世の苦を嘗め盡し、泣きたいのも耐へ、悲しいのも耐へ、苦しいのも耐へ、叫びたいのも耐へて居る程苦しい痛らいものは無い。

文章上より云へば漸層法の整へるもの

○待つもの

京都 堀池靜子

女子文壇を、持て來てくれます、郵便屋さんと、夏休に歸つて來られる、姉さんと、戰地から、送

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

つて來ます兄さんの御手紙と、十五夜の月と、夫から、朝顔だけは早くから起きて私を待つて居るでせう、

淑女に待たれる郵便屋の果報なるよ

○美ちやん　芝區　潁川よし子

美ちやんのお父様は、毎朝新聞がくると寐てお讀みなさいますが、いつも美ちやんは、其をジッと見て居まして、お父様が、お務めに、お出になつてから、そこて寐ころんて、お父様のなさる通りにまねをして居た、

家庭の感化恐るべし

○ためらひ　兵庫　柳田のぶ子

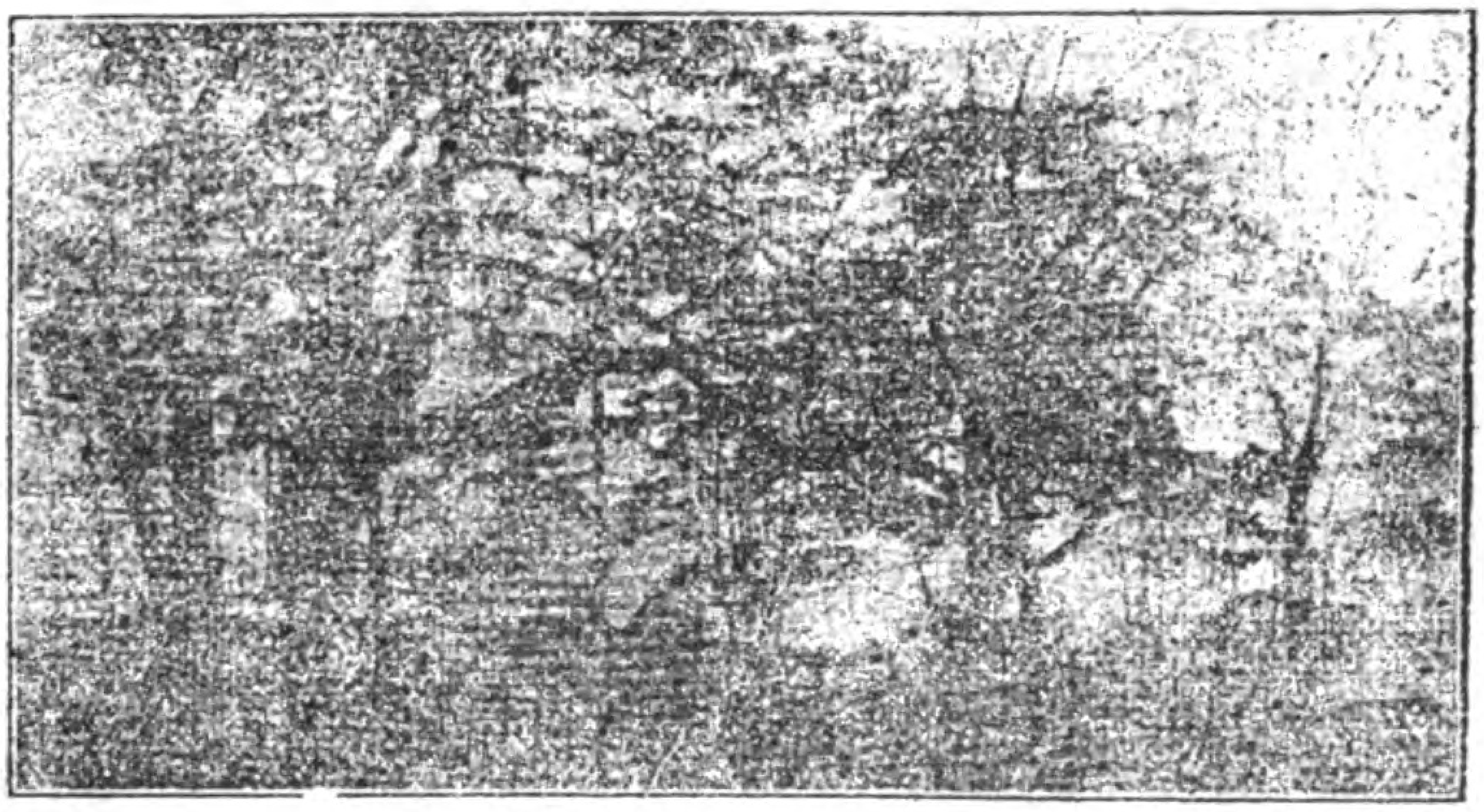
此まゝを歌に讀ふか繪にせうか手折らんか見て止まんか妾は怎麼にためらつたか、ま白な花瓣に露重くうなだれた姿を下ゆく水に映して絶えず香をはなつ神の化身の白百合の花を朝の逍遙にゆくりなく見付たので

歌にもし繪にもせよ

○ゆふべ　宇都宮　横山きつ子

大空を彩りし夕日の影も、西に傾きて、其の光は彼方の森蔭に花と散りぬ、野川の水はさら〳〵と、夕の曲を奏て初めつ、今し過去れる少女の影は、早霧に入りて、優しき鄙歌唯微かに。………露を帶べる草の葉には、淡き星影二ツ三ツ

吾人ハガキ文に自然を叙せしもの少きを憾む



王子と飛鳥山

○取入の晩　麹町　加藤豊子

湯上りの體を拭きながら「今年も稻が大出來と御蔭でうまい酒も飲めるわいとお父さんが仰しやるとお母さんも共にお笑ひなさるお烟をつけて居る妾も何となく嬉しくて〳〵。それは取り入れの晩です。

名づけて田園思想と謂ふ

○テニス　飛驒　鈴子

樹蔭涼しい廣庭て千代さんと雪さんがテニスに夢中になつて在らつしやる、千代さんは御垂髪に雪さんは庇に結うて御出だ、アラ千代さんの强いボールが雪さんの庇に打つかつて　アラあのお顔！マア庇がつぶれてよ

敢て斷はつて置きますがお雪さんは決しておてこてはありません

○可愛らし　羽後　しゆん女

今年二ッつになる花ちやんが、妾に抱つてされたいといつて、紅葉のやうな、可愛ゆらしい兩手をのべた時はどんな、忙はしい用事をかゝへて居ても、妾はそれを抱かずには行けないのよ。

「用事」の二字あつて全文活氣生ず

○草苅籠　千葉　島津つる子

今朝妹と田圃を眺めて居りましたら妹がふと驚いた樣にあら姉ちやん草苅籠が歩いて居るわと云ひますから指さす方を見ますと太郎兵衛の婆さん、つと腰を延して顔を上げたので、二人は大笑ひ

婆さんが居て二度びツくり

○釜の中　福岡市　尾藤ひで子

下女は病で、誰も御飯をたく人がないんですもの、妾がたいて見ませうつて阿母樣に威張りましてね、やつと新に火をつけましたの、暫時して阿母樣が臭が變だと仰付つて、中を見られますと、まあ水も入れないで。

經驗なる哉

○紫は嫌ひ　秋田縣　出羽蝶子

妾、紫鉛筆を使用て眼を惡くしてから、凡て紫は、何だか毒々しい樣で、茄子も食べませぬ。菫、杜若も憎らしい。彼の『ムラサキ』も購讀しませぬ。紫の袴穿ふたもいや、妾、紫は嫌です

これは極端

○初戀　埼玉　中村白百合

湯上りの袖輕ろ團扇片手に餘念なく池の面を眺めて居ると不意に肩を叩いた者があつた。はつと思ふ途端團扇は落ちて池の面へ大波を打せた。何故か顔は燃える樣に熱く池の波は靜まつたが胸の波は未おさまらない

後ろの人を言はずしてよし

○衣服　秋田　庄司錦子

長い長い布を種々に裁つて、細い鐵の棒に、細長い糸を通し、さて、あつちこつちと縫ひ纏めた物が衣服で此品が社會に活動しつゝある人間が、外部の裝飾です。

此文にはきぬなきせず

○栗　愛知縣　白萩女史

枝が大蜘蛛の網を張つたやうに、瓦廂へさしかゝつた脊戸の栗は、毬果がもう小鬼の笑つたやうにえんで來ました、火鉢の側で燒栗を食べながら、阿爺樣からカチ／＼山のお話を聞く時が近うなりましたのよ。

少妹の爲にと註がありたい

○夏を嫌ふ　越中　山菊

私は四季の中で一番夏を嫌ひてすなぜと云ふに晝は暑さに苦しく外へ出ればぶとに食はれる家に居ればはいにむしられ夜になるとのみに食はれ蚊にさゝれ夜る寢るせめられどうしてすから嫌ひてす

○黄昏　小倉　米村すみ

勇ましい馬子の鄙唄が聞えて蹄の音が近くなると、姿さんは、いそ〳〵七輪を煽ぐ、軈て、火が起る湯が沸く若者が足を洗ふてあがる、飯臺がでるお鉢がでる淵瓶が三つも倒れた時はもう此のありは既に夜の闇！

○田舎より　飛驒　小夜子

千代さん、新橋で御別れしてからもう一月れー、不相變鈴さん達とテニスでもやッて在らしつて？それ共海水浴にでも？妾れー毎日山や川へ計り行てるの、此のまア色の黑うなつた事、御目に掛つた時、貴女きつと見違へてよ

○女に學問　神田　山本光子

妹が今年の土用は凉しいと喜ぶ故私が否やさうでない、土用に凉しいのは、農作物に非常に害があつて、喜び所か反つて心配であると、聞かしたら、傍でお聞きの父樣が、それこそ學問をさした甲斐があると。

○思ひのまゝ　能登　松岡毅子

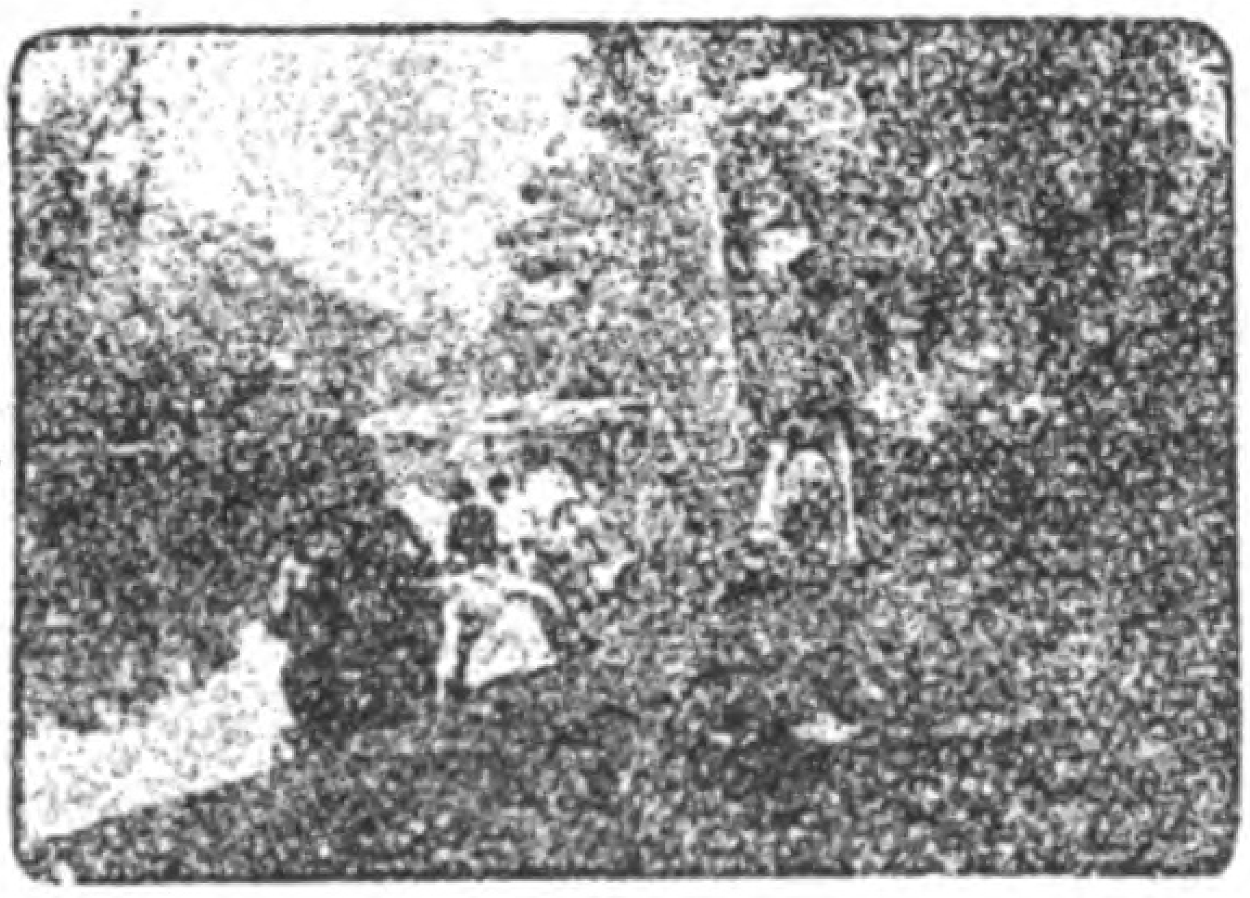
學校時代は早く嫁して、良き家庭を作つて見たいと思ふて居たが、今の樣に子の二人も持つ身になると、又も昔の樂みが沒ろ偲ばれて、今一度學生時代に立ちかへつて見たくなる。

○自筆の繪葉書に　札幌　杉山珠子

これは今朝散歩の踊り路で採つてきた草花でありますが赤いのが撫子、紫のが桔梗黃なのが女郎花、繪が下手ですからそらは見えますまいれ、露がついて居た時は隨分奇麗てしたよ、さよふなら。

○秀ちやん　飛驒　千代子

岐阜の姉さんから、奇麗な繪葉書が來たので、嬉しくて〳〵、大事に仕舞て置たのを、何時の間に見出したか、弟の秀坊紫インキでめちやにして仕舞つたの、此時計りはいかな秀ちやんも憎らしかつた



○田舍生活　山口　寺内つき子

學校のお友達は皆高等の學校やら家庭やら皆樂しい生活を爲さるのに、妾は只獨り田舍へかくれて只老いた哀れな家庭を助けて居ます、私ははづかしくも何ともありませぬ、神のまに〳〵に致しますれば、

○金堀　大隅　紅花

願ひは破れ望み絶え、うらぶれの果は離れ小島に、金堀りの身、打下す鐵槌に業火をもやし、人の世かくあれと碎く鑛あゝ、おぞましの身や。

○つらかつた　伊勢　守岡すゑ子

『先生はいつも私等に大きくなつたら、良い奥樣になれと有仰つて、なぜ御自分は御一人で御座るの。』日頃愛らしく思つてゐる小女に、恁う問はれたので、妾は其の時、後にもない程辛らかつたわ。

○歸省　山梨　內藤敏

今年十一愛らしい妹と共に野に行つた、「姉さん此稻は妾の植ゑた稻なのよ、あら御腹が最早大きくなつたわ、あゝそーそー姉さん靜江樣も矢張りよ」靜江さんは妾の幼な馴染の最も仲のよい友である。

○二年前の校規　某學校　露子

二年前の本校は憐れなりしよ、袴は海老茶、髮は前髮なくして根を束す勿れ、衣服は改良服ならて筒袖、作法の時は其に廣き帶をせよと、あゝ父兄の如きは見るに忍びずと云ひしとか憐れなる哉

○聞たい事　韓國京城　實木葉

女子文壇は妾の許を月に一度屹度音づれ來るけれど諸孃の交際紙上に御交際願つて繪葉書御送りてから変わろうと御返事下された方は其後何なされたのだろうか、

○鳴子　本郷　淨貞女

がら／＼と音がするので見ると高い木の枝に刈り込むだ稲が干してある其處に鳴子がぶら下つて居て、若い者が殘らず野良へ出かけて終つた後は爺さんが獨りて爐の土間て草鞋を作りながら時々思ひ出しては引張るのてある。

○下女の獨言　福岡　野口辰子

まあお庭の花が奇麗に咲いたこと、蝶も舞つてゐる。オヽ今日はお天氣がよいから洗濯でもしませうか、オツト湯は湧き返へつてゐる。

○可愛らしき弟　大隅　菊島友江

今年五つの腕白なる弟自分の影法師を無暗に追ふた。一向追ひつく事が出來ないで暫らく失望の體てあつたが、障子に寫つた時じつとおさへて萬歳と呼んだ。ああ如何に無邪氣て可愛らしいことよ。

○俘虜　下谷　尾崎かへて

新宿て俘虜を迎へて見ました時、最初は體軀が牛のやうに大きくて强さうなのに驚きました。がその人々が小犬のやうに手巾を振りなぞして哀憐を請ふ樣を見て、嗚戰敗國の兵士には、なりたうないと深く感じました、

○朝顏の花　名古屋　山内とし子

種を蒔いてから待ち兼れて居た垣根の藤色の朝顏が二輪咲いた、弟の喜は千萬無量、母は、「御前等が花を思ふ心は私が汝等を思ふ心と違はない」、弟は母の膝に打つ伏した、

○納涼臺　大阪　辻村榮子

去年の暮出征して今年ならずに戰死して了つた息子の事を思ひ出しては涙に咽ぶ隣の家族取分けて此頃の夕納涼、話はいつも其息子の事が出るのてある、戰死者の遺族淋しき凉み哉と誰やらが云つたのも思ひ合されるる

○母の命日　兵庫　梅舟

三日前に來た丁稚の末吉が一文菓子を掤にのせて一生懸命におがんでゐる、「オヤ末吉何をして居るの」「ハイ今日はお母さんの命日でございますので」

○布衣の傘　神田　小暮君江

或る朝朝顏があまり美くありましたからそをとつて花瓶にさしたらだらりと葉はたれて下においた布袋の置物の傘をつくりました

○軍事郵便　京都　井上ゆたか

妾うれしいつ、姉さんも嬉しいでしようと笑いちやんは一人でうれしがつて居る、嬉しそうに何ですと尋ぬれば赤い字よ、あてゝ御らんとまだにこ／＼して居る見ると「軍事郵便」の四文字。

○柘榴の木　麴町　細香女

私が十二の夏うゑた二寸許の柘榴は十五の年私の肩位になつた、其春私は物學びにと都に出たそして三年振の今日栄牛にして病を得て歸省した嗚の柘榴は私の丈よりはずつと高くそして美しい實がなつて居る

○舊家　大和　齋藤靜子

ゆくりなく通りかゝつた舊家の前、住む人なきを幸にさしのぞけば、人跡絶へて深く、夏草の背々と、梁木に宿る螢の光の美はしきを見るにも先づ催さるは涙なり。

○愛の神　本郷　小島すみれ

十六の春不幸なる初戀に泣き二十一の秋再び失戀に煩悶せし友の云ふのに「もし世間のなんにも慾望はないけれど出來る事なら天に昇て白翁となるキユーピツトになりたいの」と思はず妾も同情の涙に咽びました、

○いとしき妹　本郷　貞方女史

姉さん、姉さんは、お嫁に行きなさるつて、眞正と?。妾いやよ、寂びしいわ、姉さん行くならつれて行つて頂戴いなと穢れのない女神の如な、妹の心の奧より湧き出る涙と共に、妾にすがつた時、思はず妾も泣いた。

○犬よ　廣島縣　壽々奇女史

私が岩谷山からの歸道に百姓が多く集て一疋の犬を捕へて殺そーとして居りました、餘り可愛そーなので百姓等に金貳圓を與へて買受けまして助けてやりました、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

○秋　風　相州　室田白百合

一陣の風颯と吹いて、床の間に懸つてあつた亡き兄君の寫し繪を墜す。はつと思つて直しに行かうと立上る途端に、青葉ながらの梧桐の葉が一つ、連枝窓から机の上にばたり。

○人　形　上毛　花の國人

姉樣〳〵あれ〳〵助けて下さいあれ〳〵お池へ落てよとけたたましいさけび聲、もしやと驚いて馳せて行くと妹の最愛の人形が水にをぼれてたゞよふて居る

○私しは　京都府　松田ひて子

斯ふ思ふの、如何に立派な袴をつけて絹の着物を被て行く人達よりも妾しの樣な着物は木綿物でもびんぼうても家の中さへ此樣に整つて居れば、これほど勝つて居るものはなからうと。

○涼しい物　三河　かけい女

涼しきは、丸窓の朝顔、軒の釣葱、芭蕉の雨、生簀に魚の水はれる音、苔を滑る岩清水に、緣蔭のハンモック、二重瞼の瞼毛長き眼、湯上りの雪の肌、風鬮に露をきたると、青葉隱れに瀧の見えたる。

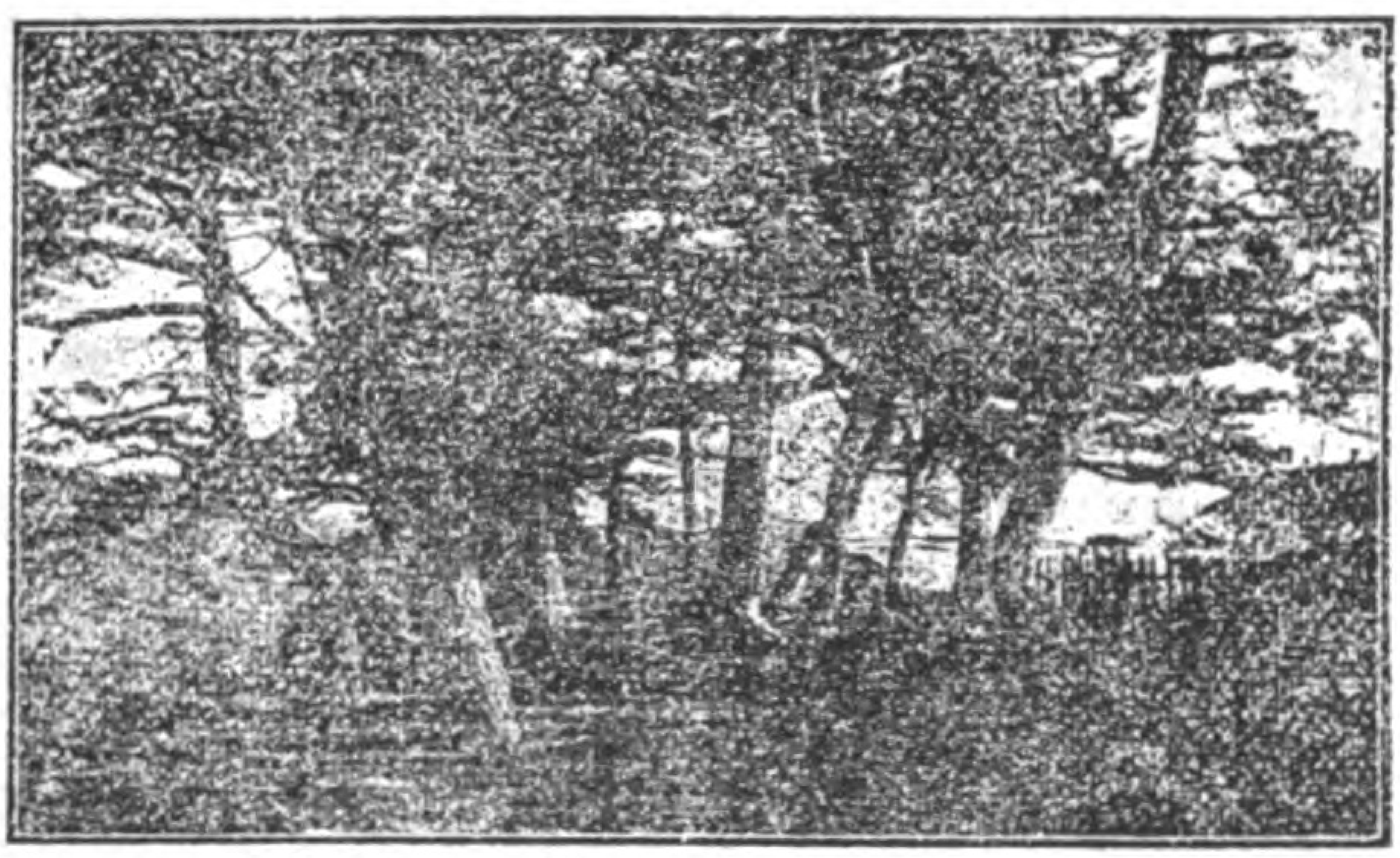
○俘虜と語る　金澤市　なみ子

俘虜の覺束なき日本語にて、あなた平和ありますかと問ふ。平和ありませんと答えし時の彼の失望は見るもの氣毒なりき。

○ほころび　備後　鯰和子

今日はお祭禮、朝なら衣服を着かへて遊び乍らも、破るまい、ほころばすまい、と用心して居たに、まあどうしたらよいだろう、こんなにほころびて、きつと、お母樣にしかられるだろう、妾悲しく成てよ

○いたづら　秋田　大越幹子



勿來

東都から歸らた兄さんは、夕くれの鐘が鳴つても、未だ椽先に讀耽して居られる、妾は起すべく、井から冷し瓜一本を上げて行つて、兄樣の頰の所へ當てた。

○嬉しいこと　神田　たか子

『何が嬉しいと云つて、自分の作つたものが誌上に出た時と、花簪やリボンのお土產を、頂戴た時ほど嬉しい事はないわ、是は私と同年位の方は何誰ても左樣だらうと思つてよ。』とはお友達の八重子樣のお話

○井　戸　川越　山田松子

先日私の家て、井戸がへをいたしまして、ポンプ井戸にしたのよ、それからは、清チヤンの「水くんて頂戴」の聲も止みました、

○犬と猫　府下　森田喜代子

犬と猫とは敵同士の樣だと聞て居ましたが家の犬と猫は中がよくて毎日妾の側に來てじやれます同じ處て育つたせいてしやうか

○月見に招く　大坂　楠白百合

新らしく出た纖弱い芒の穗の下、銀の珠を綴つた樣な白露の間に、淸しい虫の音が絕え〳〵に‥。月も宜しい、明晚は必度仰入いな。待つて居りますよ。

○小　蝶　京橋　伊東幸子

私の大好な桔梗が咲ましたの、そしたら何處から尋れて來たのてしよう。きれいな羽の小蝶が來て、花の中へ飛入ましたが、ちつとも出て行きませんの、どうしたのてしよう、花の色香に醉つてるのてしようか。

○雀　遠江　奕名子

私の庭へ、三羽雀が飛て來ました、一羽は子雀て二羽は親雀なのです、子雀は翼をぶる〳〵しながら、愛らしい口を開いて、親雀の後々飛て步

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

きます、親雀はしきりに餌を漁ては、自分は食ずに子雀に與へます。

○人生　駿河　山本俊子

貴女は人生は夢だと仰せらるゝが妾は人生は花だと思ひます、人生は短い樣で長い者だと思います、人の成すべき事は深山あります、逆境に立つて戰ふのも愉快ではありませぬか、人生は恐るべき者ではないと思ひます

○磯にて　駿河　千草

今日も赤美ちやんと濱へ遊びに參りました、あちらこちらと歩いて貝を拾ひ小石を拾ひました、川口に行きますと石の上に小さい鷺が眠て居ましたからそつと二人て足音をさせない樣に歸つて來ました

○露　弘前　ぶの子

朝早く垣の朝がほを見舞つたら、夕べ數へた蕾よりも一つ多く咲いて居る。きつとあの御星樣が、夜の間に下界へおりて花に化したのであらうよく見たら一枚の若葉に美しい〳〵露が一ぱい、アラマア

○夕顔　攝津　稻穂子

私の大好きなのは夕顔です、毎日夕方になりますとそれは〳〵は勢よくメツと音がするやうに男ましく咲きます、その大きさは簾尺て四寸五分。色は眞白。私はこの花が日本魂の潔白なのを示してるやうに思ふのです

○茄子　濱迷　拾小舟

今朝私が買つて來て漬けた、御茄子が夕方美しう漬かつてゐたから、御祖父樣に出してあげると、さも嬉さうな顔つきて、そしてさも、おいしそうに食べられた、之を見てゐた、私は何んとなく嬉しかつた

○可憐　磐城　會田富智子

草の葉末の白玉を踏み分けて。老杉二三本樹てる墓所に差掛る折。前に人聲のするよりふと見ればこは幼き童父の墓前に跪き何やら涙ながら語ひ居りしなり。かゝる中日は東山に顯はれ可憐の童を照しぬ。

○田舍の夕趣　横濱　井出君子

路傍に匂へる野菊の影長く東になびくや富士秩父の諸山煙よりも淡く靄

を負ひ白百合を手にして過ぎ行く少女の姿お彼方の鎭守の森に消へると調面白き部乃が聞へて月出てたり

○公徳家　遠江　名倉寶子

先日千歳座へ町人をお呼びなされて公德の必要てふ題名て意氣揚々と御演說なされた先生が翌日奕君と汽車待つ暇に停車場の禁制の木の枝を二三枝折つたのを確に妾は實見しました

○暑中休暇日記　青山　林誠子

今日は、五時に起床し、かみゆいなどし、兄上、及び姉上と共に稻田へ散歩せしに、風涼しく心地よし、稻、青々として波をうつ、其の景色の美しき事いはん方なし、水無橋へ行き、歸路、山根氏の家に到りばらはみがきの製造を見、歸途につく、歸りて朝食常よりも味かりし

○草刈り　磐城　大森波加子

今妾は、草刈らん爲め、秋の野に立てるなり。萩、女郎花、桔梗など美しう、咲けるを刈らんは、あまり罪深し。哀れ一日に刈り居し、草の籠に女郎花、桔梗などとりませ、籠に一ぱい

○幼ごゝろ　下總　岩瀨千鳥子

四ツになつた宅の芳坊、スタ〳〵跳て座敷へ上つて來たので、「オヤまア汚い足て……………不可ないね」と卅樣が有仰ると。芳坊は「だツて猫も跳て上るもの！」と澄した顔、其は〳〵ドツト大笑したので。

○無邪氣　白百合

私が、明日歸京すると云ふ前日、御餡が出來て、皆の御吸物椀に、蓋がつきましたの、そうしたら、小さい弟が、僕今日は、御客樣みたいね、と申しました、

○別れ　陸前　矢名女

汽車は今しも見送の人、住みなれし故郷をあとに汽笛一聲靜にゆるぎ出した、と、同時に今まで母樣のふところに乳をいぢくつてた妹はわッと許あゝいまだ三ツに足らぬ幼兒、早別れの悲しき味ちを知つたてあろうか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



讀友倶樂部

○諸孃と記者

○記者樣伺ひます 妾は高等四年生なのですけど投書してもよろしいか論文抒情文敍事文などは口語でも文語でもよいのですか（宮城縣伊具郡角田町天神町區新町四〇三 加藤よしの）（記者曰、口語でも文語でもよろしい）○記者樣、詩文の原稿と讀友倶樂部への通信と同封しても矢張り卅匁迄二錢で差つかへありませぬか（丹後小枝女）（記者曰、差支ありませぬ）○此女子文壇が一番私の理想に適しました無學なわからない者ですけれども是れから少しづゝ投書致しますからどうかお直しを願ひます（熊本市つれ子）（記者曰、何うか少しつゝでも永く續いて）○記者先生に伺ひます私は讀友倶樂部へだしたいと思つてるのですが如何にしてだしたらよいのですか何卒御敎を（山中子）（記者曰、別に何うすることも入りません）○私は十四歳の少女ですが當分匿名で投書します尚私に號を御面倒ながら次號でおつけ下さい御依賴申します（武生なにがし）（記者曰、如何に萬能なる記者でも、雅號紙をおつけ申すことは一寸躊躇されます）○用は規定のものとありますがどの紙のことですか御敎へ被下（一葉女）（記者曰、半紙でよろしい）○中内蝶二先生の伊勢物語面白く樂しく拜讀致して居ります先生願はくば永く御揭載下されむ事を鹽井先生の選評餘談に先生がみ情深き御敎へ感謝の外ありません こゝにて兩先生に深く感謝致します尚諸先生の御健康を祈る（埼玉、石田琴子）（記者曰、兩先生に代つて貴孃がわざ〳〵謝辭を寄せられたことを拜謝します）○はがき文短題などは端書で投書してもいゝのですか（德島愛讀者）（記者曰、よろしい）○記者樣、圖畫の書方は、これでもよろしう、御座いますか、私は、これからどし〳〵と投書いたしますが斯樣にかいてよいのですか（千葉花月女史）（記者曰、圖畫は一寸と二寸の寸法をお守り下さい）○記者さん私は今度れ東都の人になりましたから宜敷御願ひいたします（撫子女史）（記者曰、御上京なさると樣子の違ふものですが、相變らず、投稿し愛讀して下さるのは欣ばしいです）○記者樣とか記者先生とか申してお名前は一向存じません、恐入りますが次號でお名前を知らせて下さい（美濃女郞花）（記者曰、何れ申上ませう）○和歌半紙半枚に一首づゝ二三首かいて投書致しても御差支ありませんか又其時はがき文も同封しても御咎めはございませんかお伺ひ申ます（和歌山靜枝）（記者曰、はがき文の同封は差支えありませんが和歌は一首に限ります）○記者樣私女子文壇大好き從妹と二人で愛讀して居ります其から圖畫の寸法は金尺ですかかそれとも鯨尺ですか（麴町ゆより子）（記者曰、曲尺です）○短歌や俳句などは一封で二章以上でも、よいの一寸次號で御答を（堺しぐれ）（記者曰、一封に歌一首句一句等の例です）○記者樣私お願ひあるのよ、當選者のは勿論愛讀者の寫眞を募集して頂戴な、親愛なる諸姉よ何うか、御贊成下さいまし（北海道龜田郡七飯村松井長子）（記者曰、此御注文は貴孃一人でなく、澤山あるのです、都合があつて未だ實行の運びに參りませんが、いづれ實行したいと思つて居ります）○記者先生初め皆樣私も愛讀者になりましたから宜敷おたのみ申上ます 私は本年小學を卒業した計の者で御座いましてかぞへ年の十五で御座ひますふつゝかな者で御座ひますけれど何卒妹と思召て之から投稿もいたしますから宜敷御賴申します（鹿兒島さくら少女）（記者曰、女子文壇愛讀者は皆思想上の姉妹です）○記者樣、繪葉書付けて下さつて、誠に有りがたうこれでこそ皆樣がお進め申した甲斐があると申すもの、私ほんとにうれしいわ（みれ子）（記者曰、本誌編輯者は、勉めて諸孃の御意見を伺ひ、多數諸孃の希望に背かないやうにしたいと心がけて居ります）○記者樣へ折入て御願ひ申ます私つれ〳〵針の道をきわめて身を立てたいと思ふて居りますが不幸のみ打續いていまに宿望を遂するとができないで居ります、で私かなしいとには充分學資を投じてひとかどの學校へはいると云ふとができませんのけれども一度もえそめた私の希望は到底打ちすてると云ふとはできません、いつかはこれをとげたいと思ふて居ります、どうぞ不びんの者と思召して校資て入れて下さる學校がありましたら御敎へ下さいませ それについての手續もどうぞ御敎へ下さいくれ〳〵も御願ひ申ます（群馬一愛讀女）（記者曰、裁縫で身を立てやうとなさるのは、至極結構です、校費で生徒を養成する裁縫學校のあることは、記者未だ聞及びません、若しあるやうでしたら、次號でお答へ致します、最も裁縫家の名高い先生の邸へ、女書生のやうにして、おはいりになつては、何うかとも思ひますが、之はほんの記者一個の私考です）○記者樣鹽井先生の選評餘談の樣に讀の選評餘談を出して下さい何卒御ねがひであります（陸中百合子）（記者曰、考へて置きませう）○記者樣に申し上げます讀友の中で外の人の作を取つて我が身をあらはさうとする人が毎號出てならないことはありませんのをくやしく思ひますどうかしてこう云ふ人がないようにしたいものであります（白石B生）（記者曰、誠に仰せの通りです）○記者さん、外國の寫眞を送りますが載せて下さいな（やす子）（記者曰、本社寫眞部には外國の珍しい寫眞も澤山に參つて居りますが、拜見の上で、よろしかつたら載せませう）○記者樣私はと云ふはこれが始めてですよ、かきかたも知らないのです、こんなものでものせていたゞかれるでせうか、（せん）（記者曰、先生の方へ廻して置きませした、紙上へ出るか何うかお受合は致されませんが、始が大事ですから、念を入れて、多くお作りなさい）○私は（試に投稿せよ）を實行致します何卒沒書なすつて下さい（埼玉山田松子）（記者曰、御勇氣感心です、蛇度お作は紙上へ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

出るやうになりませう）○書は雁皮紙と仰ろけど農家にはめつたに有合せもありませんしたつてとならば三里も山道越えなくては買てなりません改良半紙で濟みませんが私の樣な境遇を察して下さい記者樣私はまだ滿十五才の少女よ投書なんて大膽ですけど好な道とていつまらぬ作物を御笑ひに入れます今に出るでしようか誌上に（武州山里にて桂子）（記者曰、改良半紙でもよろしい、山道三里はお氣の毒です、追々紙上へ出るでせう）○記者樣に一寸御伺ひ申上ます私は殊に字が一ばん下手なのです習字帖を買つて獨習してもよろしいでしやうか又投書に字の下手は關係するてすか何卒御聞かせ下さい）（大阪府春子）（記者曰、左樣、字の上手になる法は習字帖で稽古なさるが一番宜しいでせう、又投書に字の上手、下手は關係しませんが、只書きくずした字、なぐりがき、走りがき、ちらしがき、つめた文字などは讀みにくいから自然沒書になる恐れがあります、下手でも宜しいからきれいに分るやうに書いて下さい、あなたのは能く分ります）○妾の町に女子文壇愛讀會を開きましていろ／＼の文や歌をつくりますこのたびは皆がつくつた歌などひとまとめにして御送りしましたからどうか御撰びを願ひます當會では二十八名の愛讀者がなります－茨城縣下妾町讀者一同）（記者曰、愛讀會とは好い思ひ附きです、近ければ記者も席末を汚したいですナ）○妾は本誌に初めて投書しましたがあれで間違つた所があればきかして下さい、それから記者さんたちの忠實なのには感心しますよ、通信の問ひには皆詳しく答へを書いて下さる妾大好です外の雜誌で見ないのはこゝです（石見かつ子）（記者曰、玉稿は凡て規定に外れて居りません、又記者をお褒めに預つて汗顏の外はありません、此上とも充分に勉めるつもりです）○記者樣いよ／＼待ちかれの繪葉書が次號から出るとの事よく御聞き下さいましたどんなに美しいのでせうか私は門に出て配達夫の來るのを待つて居ませう（伯耆榊原松子）（記者曰、お待甲斐があるか何うか、兎に角濟方先生の畫ですから、坊間にありふれたものとは違ひますし、それに雜誌について居て、繪ハガキだけと云ふわけにゆかない處が、價値です）○記者樣よ私は一二度投書しましたがまだ一度も掲載された事がありませんが妾は落膽しませんて毎月投書して居ります記者さん宜しく願ひますそして投書は之れでよいでせうか（宮城縣横澤さつ）（記者曰、落膽なさつてはいけません、たとへ紙上へ出なくても、作れば作るだけ御自分の稽古になりますもの）○記者樣私は出來ないくせに投書がしたくて／＼しやうがないのです拙作ですけれども次の樣な物を投書致しましたから何分お願申しまずそしてきそくに違て居はしませんか次號でお答を（茂見利子黄菊）（記者曰、御遠慮なくどし／＼投書して下さい、規則には外れて居りません）○敬愛する記者樣いつも／＼幼ない無學なる私まで御力そひ下さいますので實にありがたく嬉しく思つて居ります此度もちらもないものですがたくさん投稿いたしますから何卒よろしく願ひます（西瓜蟹）（記者曰、御中越の郵紙の事はよろしふございます）○記者樣私は草深き片田舍へ住まふやうになりましてからは唯此淸き女子文壇から無限の慰藉をうけつゝあるのですよ文壇の永に盛えんことを祈つてやまないのです。（愛知品子）（記者曰、各地方の方に慰籍を與へ得るかと思ふと記者も大滿足です）○左の諸撰は投稿に添へて特に規則に背いて居るや否やを問はれたので今一々お答へをするには多大の紙面を要しまするし、且大躰に於て凡て規則には背いて居りませんから凡て選評の諸先生の方へ廻しました、畢に芳名を掲げて御答へに代へました、惡しからず思召て下さい

○陸奥、植西なか○深山女史○小方春女史○上野の一少女、○大阪、花すみれ○R五子○翠嵐女史○大阪、愛讀少女○富山縣、松田ひろ○秋風子○在大阪、かすみ子○高子○松子○德島、若山操○漁女○延岡、佐野とく子○松葉女史○山口縣○境敏子○山口、一少女○甲斐、登美子○奥州の女○長野、秋野露子○備前、瀧津瀬○伊豫、朝露○小石川、あ、き○しろづばき○伊豫、得能湯月女○もみぢ○衞蕣子○野菊○大阪府、山田きぬえ○横濱、秀子○翠園鮮、靜枝○埼玉、石田琴子○花月○花蓮○利根の河邊、淸き月○みち子○駿河、村上節枝○宮城、松江○柳葉○丹律、小枝子

○剽竊詩文の注意

○剽竊詩文の注意も號を逐ふて減じて來るやうですから先づ以て結構です、一寸剽竊詩文を注意される方に申しますが御注意下さる時には何々雜誌の何號の何頁から剽竊したと云ふ事を詳しくお知らせ下さい、それでないと折角の御注意も曖昧で發表する譯に行きません、八號以前の分にも二三注意がありましたけれど、はつきりしませんから發表を見合せます、第九號の詩文に對して剽竊注意されたのは左の通り

▲文章の部

○叙事文秀逸名古屋中平文子の「畑の笑」は明治三十八年一月十五日發行「女學世界」增刊「家庭小説」中の「春宵記」「物集梧水氏作」を短くつゞめしだけなり

○叙事文秀逸十六夜女史の「あさがほ」は「少年文學」にある由

▲はがき文の部

○秀逸伊豆加藤海子の「夏」は德富蘆花氏著「自然と人生」三百八頁の「夏」と一字も相違なし

○秀逸大分綠野みさをの「德利と足袋」は萬朝報百字文第五回一等賞沼津胡茄氏の「燗德利」と一字も相違なし、以上共に剽竊と確定す

▲新體詩の部

○秀逸神田區山本富美子の「淸水」は明治三十五年十一月五日發行「女學世界」增刊第二卷第十五號新体詩秀逸七十五頁信州春江女史の作と一字か二字違へるのみにて剽竊たる事疑びなし

▲俳句の部

○特別三賞千葉縣山武郡千代田村小川芳枝子の「雞や秋を透ける小短册は」「新思潮」に在りし竹南氏の作を剽竊せしものなり

▲謝畫の部

○賞外薫女史の「初夏」は「文藝倶樂部」第五卷第十一號の口繪より剽竊せしものと認む

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

例に依り右側詩文の芳意を送られたる諸孃の芳名を左に列記して謝意に代ふ

○京都すみれ○東京、はつ子○神戸、むらさめ○神田、小磯君江○逗子にて、濱の子○神奈川在、中村ゆかり女史○肥前、久子○和歌山縣人、淸水百合子○京都、田島かをる子○福島、濟子○釜山守○其他失名數人

○繪葉書交換

○記者曰く、當誌友倶樂部の欄は何時も投稿多數で載せ切れませず、殊に繪葉書交換と交事百般の二欄は前號も前々號にも休むの已むを得ざるに到りました。併しそれでは多數諸孃の意にも背き、且又本號から當女子文壇にも繪葉書が附く事となりましたから、交換の記事も一層必要と存じます、そこで本號も誌友倶樂部欄が多數ですから、此繪葉書交換の欄に限り、交換希望者の姓名住所だけを載せる事にいたしました、一々希望やら注意やら書いてありますが、それを載せると多大の行數を取りますから、不本意ですけれど姓名だけに止めました、交換希望者は左の諸孃の許へお出しになれば、必ずそれ〴〵お返事があるでせう。

○韓國釜山港南濱街伊豫屋方池田蕗子○福岡市博多上新川端町五百番ノ二坂梨芳子○下野河内郡姿川村西川田松本ふくの○京都府相樂郡祝園村大字菅井堀池靜子○秋田縣平鹿郡角間川町金子武彦方松田政子○芝區金杉一ノ二三穎川とき子○香川縣大川郡三本松町松永あやめ子○丹後加佐郡丸八江村字八戸地世傳喜作方青葉女○北海道江差佐平治町森野小桃○大阪市西區靱下通一丁目毛利方滿子○備後神石郡豐松村上豐松愛宕社大内安子○北海道小樽區稻穗町十四小堀乾三郎方梶水仙子○福岡市稚町高松ひて代○本郷弓町一丁目二五兒島葦子○下關田中高等女學校ノ上瀬殿寺宿生山義子○下野眞岡岡部久四郎方前川しず子○奈良縣郡山いの丁廉元二葉子○神戸市加納町三丁目一二五ノ六秋山勇子○備後三次町魚濱方片村沈香○神戸相生町四丁目一五一ノ七末田しげ子○紀伊橋本町堀江粂流子○越中上新川郡新保村字友杉村二二二野上方董女○茨城縣高濱町東大橋小泉拾紫子○兵庫縣明石町ノ内大明石岡崎方橋文子○函館區眞砂町三大島豐造方大島春江○京都綾小路室町東井上ゆたか○福井市佐佳枝下町六三高柴小面○信州小縣郡中鹽田橫關愛造方郡熊嵩子○大分縣下毛郡上津田落合西萩子○下關市裏町長野重治方同兼千○紀伊田邊神子濱福本初惠○金澤市玄番町一ノ三大地波子○長崎市本徳町松本たき子○廣島市水主町五百五十一番邸海野くめ○愛知縣中島郡豐田村平野村平野嘉重方や野俊子○山形縣新庄町高山きゝ子○高知縣長岡郡東本山杉森しげ子○崎玉縣北足立郡大砂土村大字大和田十四番地細沼藤子○靜岡縣小笠郡南山村高橋松下德子

○諸孃の交際

○信州の伊藤ろく子樣貴女は名山淺間山のふもとにお住ですか妾は米山城のふもとです何卒御交際下さいまし住所姓名をお知らせ下さい（長野縣小縣郡神科村手塚とも子）○拙なき文して申上げます皆樣私しは眼病のため衷所の病院に先月參りましたのよ私の不在中に御手紙下されました方々には紙上で深謝致しますあの鶴澤樣へ繪葉書上げましたらもどつて參りましたのよ九月十五日は退院致しますのよ（札幌北海眼科病院にて本郷なほえ子）○「暑中大深編」御望の方は七名でしたが先着故埼玉の石田琴子樣に差上ました繪葉書交換御望の御方には皆御返事差上ました此後とも繪葉書交換御望の方々はいつにても私は白紙か同等以上の物で御返事差上ます（茨城石崎秀子）○「女子用敎訓書類」各種凡二十册「家庭小說」凡三十册右は亡き姉上のかたみに候せめて生前愛讀致し居り候女子文壇誌友御さま方へ一部づゝ進呈致したく候御望みの方は御通知下され度候（備中玉島町字築町角八重子）○信濃の伊藤ろく子樣御親切に御手紙下すつてどうもありがたうこれから淺野樣と御同樣に末ながく御交際をれ「常州叶月女史」○大阪の鈴木せき子さん及び越後の長島はつ子さま、御たづね下されうれしうございました（宮城縣伊具郡角田町字入谷地町高橋りわ子）○女子文壇愛讀せられます越後のきよし樣先日は繪葉書の御便り有難うございました直樣御返事差上度いですが御處と御姓が分らなくて誠に殘念です私は九月五日に出發して北海道夕張郡由仁村字イハナイへ歸國致しました（橫濱初子）○誌友の皆樣妾も第八號よりの愛讀者となりましたから此後は親しく御交際を御願ひ致します（熊本縣小川町八百六齋藤りん子）○賢明なる誌友諸姉、繪葉書、お手紙を戴きたう御座います早速お返しします先着の方五名には當地の名所古跡の寫眞と私の寫眞をきつと送ります（福岡市雁林町高松ひでよ）○駿河村上節枝樣淺野しげる子御なつかしう御ざいます御住居明記して直接御手紙下さいませ私も上げますから誰方か樂と繪ハがキと交換して下さる方はありませんか（埼玉縣北足立郡鳩ヶ谷町字里村六石田琴子）○誌友諸姉よ私は文通致し度いのですが御望みの御方は何卒どし〳〵御送り下さいまし（美作國英田郡福本村國司彦治郎内國司薫子）○私は病氣の爲當地へ遊びに來て居りますが不在中私に繪葉書交換御望みなされた方は四十七名だそーですが歸宅いたしましたら早速御返事差上ます（瓦谷にて石崎秀子）○宇都宮金田樣同田野樣、大阪河原樣同十石樣相州ひさ子樣毎度御文通難有う私近頃發靈してるのですから、多忙でレター上げる事出來ないのよ、惡しからず（北海道龜田郡七飯村松井長子）○今回おゝけなくも、第九號新體詩欄に於て天賞の榮を得ました事は、非常に汗顏の至で御座ります、付きましては私事、去る四、五、六、三ヶ月間程、上野日々新聞紙上に拙筆を採つて、居りましたので、該誌は其際「故郷の深林」と題しまして、紙上に掲げましたからさぞかし、賢明なる讀者諸姉から何れ何等かの御報告があろうと存じますが、あらかじめ、御通報申上置ます（信濃長野市狐池、安孫子美都子）○淨山繪葉書頂きまして有難度う第一着岐阜の蓮樣妾は早速御返事差上度のですが御住所消印で判りません其から五月以後の文にお詫申升私は止を得ぬ用事で暫く京都に居ましたので其故諸姉樣への返書を延引致しました、どうぞ惡からず（山城パイラレツト）○私は巳を得ざる事

情にて九月五日に當地を出發致しまして北海道夕張郡由仁村字イヘナイへ歸國致しますから一寸誌上で御知らせいたします（横濱小川初子）○皆樣私も、本誌五號から愛讀者の一人になりましたから、何卒末ながく御交際下さい、（千葉縣夷隅郡古澤村谷上石野靜子）○北海道の本郷なほゑ子樣何卒妾にもしなりを下さいませんか相當の物で御禮を致升それから給葉書の交際も愛讀の方々に御ねがい申ます（陸前國志田郡敷玉村今野榮子）○私は皆さんと交際がしたう御座います、から文を送つて下さい、私も御返事を致しますゝ又給葉書交かん手紙交かんを致したう御座いますから何にとぞ御手紙給葉書を送つて下さいまし（廣島縣高田郡甲立村深瀬蜜郎ちと子）○山田千代子樣伊藤ろく子樣卜部久子樣私は今度上京いたしましたから御手紙を下さいます時には左記の所へ御宛下さいそれから愛讀者の皆さんへも宜敷御披露いたします（麻布區東鳥居坂町六番地久米樣方淺野しげる子）○北海道の寺尾みさ子樣に申上ますあの手紙を差上げましたがとゞきましたなら早速御返事を（宮城縣没登子）○皆樣寫眞をお惠み下さい私もお返しに妾の寫眞を差上ます（富山縣下新川泊町松田ひろ）○松井長子樣、加藤潔子樣、白妙女史樣、加沼藤子樣お年をしろしてお手紙を下さい（宮城縣伊具郡角田町天神町區新丁四百三加藤よしの）○園藝の好きなお方へ二十人を限り草花の種を差上げます、最も私は男子ですから無理にとは申しません御入用ならば下名まで（北海道札幌區南二、四三、二春谷露山）○前號で申てなきました女學世界の定期增刊を御望み下さつた方皆で八十六名でした併し四册でしたから八十二名の方は不本意ながら差上られず一々御返事致すべき筈でしたが何分澤山な方ですから畧して誌上で御斷り申ます又此中で寫眞や給はがきので交換を御望み下さつた方が三四十名御在いましたが悲しいかな私は貧女の身でありますから御言葉に從ふ事が出來ませんから惡しからず御承知を願ひます次に神戸の吉田薗江樣御肉筆の給葉書ありがたう又岐阜の蘆花女史樣結構な給葉書やハガキ文學を御送り下さつてどうもありがたう右お二人樣に厚く御禮申上ます（大阪府香子）○誌友諸姉よ短歌又は俳句を書いた給端書の交換を願ひます。横濱の寺田光子樣、麹町の重田春子樣甚望御風交を願ひます（福井市佐佳枝下町勝木方高柴小靜）○寺尾みさ子樣、妾先月十五日に出した手紙の返事をまだ下さりませんが若しとゞかなかつたのではありませんか、そうなら貴女が御手紙を下されば妾も直に御返事致しますから（群馬縣甘樂郡富岡町水田まん）○矢嶋露子樣私も長野縣てす今は或る事情のため栃木縣に來ましたが長野ときくとなつかしくてドーゾ御交際を願ます（澁谷分院内いと子）○アノ皆さん妾お恥しいことには未だ梁を造ると を知りませんの、有志の諸姉はどうか御惠み下さい妾はそれて稽古して見ようと思ひますの、きつと御禮はいたします（大阪高津局區石ヶ辻菊池方澄子）○交際欄へ御投書遊ばす誌友諸姉樣よ何卒向後は住所御本名をおんしたゝめ下さいますやうに願ひます左樣でないと私の如き三手紙三葉給葉書をお送り致しましたのが葉書二葉手紙一本不分明との附箋つきて戻りて遼りました（江州彦根四榮小田知興）○備後の長谷川みどり樣市岡まさ子樣伊藤波子樣高杉みゆき樣曾川秀子樣及び靜子樣私も今は廣島市に住居して居りますけれど生れはやはり備後ですからなつかしく存じます誠に失禮ですが御住所をお知らせなすつて下さいませ御願ひ申ます（廣島市深雪）○妾も愛讀者です諸嬢方と手紙給端書綴物の交換を願いたいです（大阪東區上難波南之町武藤蝶子）○皆さま妾も愛讀者になりました畫はかきや御手紙などの交換もしませう（大阪府豐能郡池田南新町金澤はろ子號は積美）○廣島高等女學校の諸姉願はくは文通して下さい他の愛讀諸姉も（秋田高等女學校寄宿舍今立いま子）○今紫久子さま、同名の御縁を以て御交際下さる由以後給はがきでも何んでも送つて下さい、又他の久子さまたちも送つて下さいな、妾も送りますから、妾の住所は千葉縣長生郡新治村上太田森久子で森美智子の妹でありますから妾の姉樣とも御交りを願います○私はほんに氣にあつた友がひとり丈けほしいのよ、親友になつて下さる方はないてしよかれ（小石川原町十三秋元方、きよ子）○誌友皆樣私は田舍の者で御座いますが毎月姉樣から本誌を送つてもらひます。やはり妹とおもつてどうぞ御交はり下さい、又記者樣私はまだ何も出來ませんのは殘念てい御座います。（鹿兒島縣川邊郡知覽佐多若枝）○前號の投書を載せて下さつたので早速淺草の上村樣及神田の渡邊千代子樣より第六號を御惠み下され誠に難有ふございました、淺草の上村樣は御住所が知れませんので御禮を差し上げ兼ねましたが何卒御知らせ下さい（本郷弓町小島すみれ、○私は下手の横好きなのですけれど皆樣と和歌俳句或は新躰詩で文通が願ひ度いの短いのは畫はがきでね、（本郷弓町一丁目廿五小島たつた）○北海道の本郷なほゑ樣松井長子樣越後の長島はつ子樣甚ぶしつけて御座いますが私の樣な者ても愚妹と思し召して御交際下さる事は出來ますまいか尚他の皆樣御交際下さいまし給葉書の交換も致しますから（茨城縣結城郡上山川村ふ一入須藤武子）○記者樣始め皆樣私は絶望のふちに沈む不幸の身何卒御見捨てなく御交際を（伊豫溫泉得能湯月女）○本郷相江子樣先達は難有う、私れレター上げたいけれども貴女の番地が分らないのよ、次號に委しくお洩し下さいよ、越後の長島初子樣、先達は御深切に御交際のカード給はり、嬉しう存じました（北海道亀田郡七飯村松井長子）○大阪の鈴木せき子樣の一讀を願ひます、過日は美くしい給葉書て、色々御深切の御言葉たまはり、まことに嬉しく御座いました、しかし御住所の文字不分明なので、返事をあげることが出來ません、御住所を御知らせ下さいな。（茨城縣高濱町東大橋、小泉はま子）○誌友皆さん私と御交際下さるならば下名へハガキなり手紙なり御送り下さい御返事致しましよう（鹿兒島市春日町九七飯田ちか子）○おなつかしい女子文壇愛讀諸姉樣東郷スコッチの樣な糸で何か新らしい肩掛の編方御存知の方は敎へて頂たい（神戸榮五中村喜久）○妾自製の蟬の巾着四人限り進呈致しますから御望みの方は早速申込下さい又編物並に袋物なんどゝ交換もします（島根縣飯石赤名村倉橋小鮎子）○杉

原孝子樣つい御無沙汰致しましてすみません近頃は玉作を拜見いたしません變りはありませんか。弘中晉樣先日繪葉書、誠に有難うよ私しもつまらんのを差上ましたが屆きましたらうか（福島、清子）○田中無月子樣御手紙を上げましたがとゞきましたか（白石松枝女史）○私は大變女子文壇を愛讀いたしてをりますから御交際をねがひます（伊豫喜多郡大洲高屋敷新直樂內にてふくら女）○肥前の卜部久子樣、御芳名は兼て淺野さんから承て居りました御交際して下さいて御手紙下さいな（信州北佐久郡小諸町伊藤しろく子）○愛讀者の皆さん妾も御仲間入をいたしましたから何卒御文通を願ひます（常陸國高濱町東大橋川並芙美子）○妾は前者の妹です御身捨なく（常陸國高濱町東大橋四四川並美子）○北海道松井長子樣本鄉なゑ樣私れ、此度女子文壇の愛讀者になりましたから御交際を願ひます（東京小石川區初音町十五番地茂見利子）○伏島直子樣本紙でお名を承つてどんなにおなづかしいでせう其から浦和の關靜子樣もし本誌讀者の御一人なら此欄で御通知下さいませんか（神奈川縣橘郡高津村大貫かの子）○信濃の伊藤六子樣水戶市の山田叫月樣九州の浦部久子樣私は誠に不束者で皆さんの御交誼に預ゆること出來得ませんから失禮ですが當欄で御厚情を謝します（淺野撫子）

○文事百般

○女子文壇第一卷第七號「選評餘談」中に、詩歌を多く讀むべしとありましたが、どういふのが宜しいのですか一寸御答を願ます（本鄉のま女子）（記者曰、餘り莫然としてお答へに困りますが古人今人の有名な詩歌を御らんなさい）○妾に不用の書籍雜誌が澤山ありますから皆樣のと交換して讀みとう御座います御望みの御方は下名のところへ交換書籍の目錄を送つて下さい妾からも直に御送り申します尙妾は各地方の事情等を知りたいので地方の新聞雜誌を御送り下さる方へは當地新聞雜誌を以て御禮します（富山縣福岡町橋本友造方光子）○實業の日本社發行の征露寫眞畫報十二部誌友諸孃へ進呈致したし御希望の方は直接御申入下され（備中國玉島町四六筒井八重子）○愛寶諸孃樣中村鈴子先生の「名流百花家庭の摸範」御持ちの方は戰時畫報の增刊「富士畫報」と交かんして下さる方はありませんか（備後雙三郡吉舍岸田好美）○離小島と露營の夢と云ふ唱歌は何に有りますか御存じの方は御敎へて下さいな（しぐれ子）（記者曰、一冊の本になつてあります）○誌友皆樣の中で白妙一號と少年文集四卷九號御不用の御方はありませんか、御座いますればおゆづりをねがひます送つて下さつた御方には肉筆の水彩畫を差上あげます（横濱尾上二ノ十五泉舟女）○妾は毎月一回發行になる防長女子敎育を持て居ます御望みの御方は下名まで御知らせ下さいまし差上げます（山口縣熊毛郡勝間村澤光枝）○記者樣短歌と和歌とどこが違ふのですか（安田政子）（記者曰、同じことです）○記者樣並に女子大學生徒の諸孃へ御尋ね致します私は女子大學へ入學致したいと思ひますが一ケ月の費用二十圓と聞きましては兩親へも申兼ねて居ります實際二十圓入用で御座いますか（柳葉）（記者曰、何うしても凡てゞ二十圓近くはかゝりませう）○英語は女子には必要で御座いませうか御知らせ下さいまし（田舍女）（記者曰、只女子とばかりでは一寸お答へに困りますが、一般に普通の英語位は心得て貰ひたいと思ひます）○女學世界第五卷九號と本誌第七號を御交換下さる御方はありませんか、もしありましたなら端書で下名へ御一報下さい（常陸國新治郡高濱町東大橋川並平方川並汀柳子）○女の讀みます新體詩の本は何と云ふのがよろしいでせう（相州千草子）（記者曰、別に女の爲に出來た詩集はありませんが、「藤村全集」「白玉姫」「金帆」「戀衣」「塔影」「不如歸の歌」「行く春」其他）○諸姉の內で秀才文壇第五卷の第十三號を御不用でしたなら下名迄で御惠み下さい代價で讓て貰ふてもよし新古文林增刊「新古談叢」と交換下さつてもよろし（北海道小樽區稻穗町十四、小堀方梶水仙子）○誌友の君たちの中井露武島大町三先生の合作花紅葉か大町先生の「黃菊白菊」でもよろしうございますが尾上先生の「銀鈴」か又は「子規言行錄」と御交換して下さいませんか（伊豫國喜多郡久米村字大師甲千九百十一番地土居ゆり子）○北星菁の「濱子」所持して居ります何か他のものと交換致したいのですが御望の方はどうぞ（横濱石川仲町三丁目岩田星子）○私の手許に女學生訓、女學生の栞、女子の本文、女子美文資料、文章綱要、雪月花、黃菊白菊、花紅集、等ありますが御望みの方に差上てもよろしい、お申越しなさい（榛原郡金谷南村酒井よし子）○三十六年一月一日發行の時事新聞附錄の少女と兎の繪即ち「おまちかね」をお讓り下さる方はありますまいか身にかなふお禮は必ずいたします（東京南千住町九四五野口方春子）○妾しネ本誌第四號が一部餘分にありますのよ、まだお讀みなさらない方に、何かの本と交換てもしてほしいのよ、又繪葉書の交換をして頂戴（大阪府泉北郡橫山村天堀潤方、天堀美濱子）○佐世市橫山汎愛樣：妾方には美文韻文「花紅葉」が目下不用に御座：います故何なら小說乳姉妹と交換致しませう次號にて御答を（出雲じん子）○皆さんの中で女學世界五卷九號と本誌七號を交換して下さる御方はありませんかもしありましたら下名へ御一報下さい（常陸國新治郡高濱町東大橋川並義子）○本年分のホトヽギス、其の他小說、文學的の書が有りましたら、御惠み下さいませんか。私も相當の御禮はそれ〴〵致します。（大阪市北區天滿新堀川橋東五石方楠日百合）○紅葉全集六の卷御不用の方は、相當の代價でお讓り下さいませんか。よみうり繪はがき、御入用の方は差上ます十枚計りきりぬきにしてあります、豫め申して置きますがそれをはがき用紙に肉筆でかくんですよ、（香烟）○諸姉の中に、家庭歷史讀本「紅葉の錦」を御所持の方は、申しかねますが下名へお贈り下さい。相當の御禮は致します。（大阪北區中之島二丁目一四四田中靜子）○新時代道德女性征伐湯淺觀明著人間論高橋五郎一元哲學天籟人生本義不用に付き折燒柴の記增鏡駿臺雜話註釋蘆花不如歸花外詩集夏花少女等と交換亦編物も好む好む書籍指定して送り來られよ直に返送し侍らん（滋賀甲賀郡柏木村泉辰野子）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

And the Prairie cried sorrowfeelly: 'Oh, master, I cannot keep the flowers, for the winds sweep fiercely, and the sun beats upon my breast, and they wither up and fly away.' Then the Master spoke to the Lightning, and with one swift blow the Lightning cleft the Prairie to the heart. And the Prairie rocked and groaned in agony, and for many a day moaned bitterly over its black, jagged, gaping wound. But the Little Swan poured its waters through the cleft, and carried down deep black mould, and once more the birds carried seeds and strewed them in the canyon. And after a long time the rough rocks were decked out with soft mosses and trailing vines and all the nooks were hung with clematis and columbine, and great elms lifted their huge tops high up into the sunlight, and down about their feet clustered the low cedars and bolsams and everywhere the violets and maiden-hair grew and bloomed, till the canyon became the master's place for rest and peace and joy.

From "The Sky Pilot."
by Ralph Connor.

枯てしまい，迚も私の處へ止めて置く事が出來ませんので御座います」と答へました。

そこて主人は稻妻に御はなしに成りますと電光一閃平原の中心を割裂致しました．原はグラ々々と搖り動き苦痛の爲に呻吟して永い間自分の生黑いギサ々々に引裂かれて大口の開いた創傷を見てはくるしがつて煩悶して居りました．併し其の割目へ小な鵠が水を注ぎ，見苦しく黑い創あとを消してしまいました處へ又小鳥が澤山に種子を持ち運びまして谷間て撒布しました．間も無く怖ろしい岩石は滑かな苔や蔓て飾られ隅々まて女菱や纏斗菜てからまれるし大な楡は自分の頭を日光に照らさせ足下に背の低い松や常盤木が生へて至る處に菫菜，過墻龍の咲て居らぬ事はなくなり遂に此の谷間が主人の，平和，喜びの閑居となりました。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

wers" and the story touched her heart so deeply that she became ever after a kind, sweet, gentle maiden who was loved and respected by every body who came in contact with her.

The Canyon Flowers.

At first there were no canyons, but only the broad, open prairie. One day the master of the Prairie, walking out over his great lawns, where were only grasses, asked the Prairie, 'Where are your flowers?' and the Prairie said, 'Master, I have no seeds.' Then he spoke to the birds, and they carried seeds of every kind of flower and strewed them far and wide, and soon the Prairie bloomed with roses and crocuses, and the yellow crowfoot and the wild sunflowers and the red lilies all the summer long. Then the Master came and was well pleased; but he missed the flowers he loved best of all, and he said to the Prairie: 'Where are the Clematis and the columbine, the sweet violets and wild flowers, and all the ferns and flowering shrubs?'

間の花」てふ物語にいたく感動され以後は親切にして柔順なる處女となり彼を知る凡ての人に敬愛せらるゝを得たり。

谷間の花

初手には谷間など彼處には何もなく只渺漠とした平原でした。或日の事原野の持主が廣々とした其芝生を御歩行なされて一輪の花も無いので「御前の花は何處にあるのか?」と御尋になると「旦那様種子が御在ませんので」との返事。そこで主人は小鳥を呼び寄せ御命令になりますと小鳥の使者は直ちに百花の種子をくはへ行き遠近に撒布致しました. すると平原は薔薇や泊芙蘭や毛茛や向日葵に深紅の百合等で夏中ズート咲き續きました。それから又御主人が御いでに成に大層に御喜悦でしたが一番御好な花が見えないので原野に「女萎や,樓斗菜や,菫菜や,其他の野花,羊歯, 花の咲く灌木等は何處にあるのか?」と御問ひになりました. 平原は物悲しそうに泣ながら「あの旦那様,風が慘酷に吹きつけ, 大陽が容赦なく私の胸にあたりますので, 花が皆

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

And from love's shining circle
The gems drop away;
When true hearts lie withered
And fond ones are flown,
Oh, who would inhabit
This bleak world alone!

愛の輝々たる　環より
貴き珠の　落ちし時。
世に赤心の　枯果てゝ
懐かしき者　逝き去れば
嗚呼誰か永て　只獨り
淋しき浮世に　居るべしやは。

Ralph Connor.

Ralph Connor is one of the most prominent Canadian writers of the present day. His books are widelp read in both continents. His skill in depicting the rude life of the wild West of America is surpassed by none of his contemporaries. Among his numerous works "The Black Rock" and "The Sky Pilot" are most pouplar. In the latter, we find a strong self-willed young girl who was a regular Tom-boy and who despised weaknesses of every sort. One day she was thrown from her horse while she was rescueing a cow-boy from the attack of angry cattle, and became a cripple for life. As her body grew weaker her will became stronger and more ungovernable. She cursed Hearen, grieved her family and provoked her friends all day long. But a minister called on her, one day, and told her a story of "The Canyon Flo-

ラルフ　カノル.

ラルフ　カノル　は當時名聲嘖々たるカナダ文豪の一になり.彼の著書は 兩大陸に愛 讀 せらる。米國西部大曠原に於ける粗暴野鄙の人情を穿つの技量に當りては彼が右に出づる者同僚中になかるべし。

彼の著作許多あれども格別好評嘖々たるは〔黑盤石〕と〔天導者〕なりとす。後者は身躰强健,片意地强く何事を問はず凡て柔弱を賤しめしオテンバ娘を描出せり。此小女一日狂牛の群より牧童を救はんとして　落馬し一生の不具者とはなりぬ. 身躰不自由と成りては意志增々頑固に制し得べきに非ず. 彼は終日天道を恨み, 父母兄弟を歎かしめ, 朋友を激怒せしむるに至れり. 某日訪門し來りし一牧師の〔谷

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

英　文

津田梅子閲　　河井道子述

The Last Rose of Summer.

Tis the last rose of summer,
  Left blooming alone;
All her lovely companions
  Are faded and gone;
No flower of her kindred
  No rose bud is nigh,
To reflect back her blushes
  Or give sigh for sigh.

I'll not leave thee, thou lone one,
  To pine on the stem;
Where the lovely are sleeping,
  Go sleep thou with them;
Thus kindly I scatter
  Thy leaves o'er the bed,
Where thy mates of the garden
  Lie scatter and dead.

So soon I'll follow,
  When friendships decay,

暮夏の薔薇

後れ咲なる　夏の薔薇
獨り殘れり　淋しげに
最美はしき　友達同士は
早く萎みて　逝き去りぬ
うから族の　花もなく
蕾の薔薇さへ　見えやらず
臙脂さす彼に　領きつ
或は嘆を　別つため。

我は見捨てじ　孤子よ，
汝を小枝に　惱ませて.
美はしき花の　眠りにし
其の塲に汝も　とく寐ねよ
我手はかくも　懇ろに
汝の靑葉を　撒きなまし
園生の友の　此處其處と
醒めぬ眠の　床の上に。

我も汝か後　追ひ行かむ
親しき友垣　堪えし時

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

毎號懸賞募集題目

毎號精讀を要す

選評大家（文學士醫井日本女子大學教授、巖谷小波君、佐々木信綱君
文學士尾上女子高等師範校教授、廣津柳浪君、山中古洞君）

○論文　○抒情文　○叙事文（各半紙廿四字詰三十行以内）

○消息文（半紙廿四字詰二十行以内）　○はがき文（端書かな付廿四字四行）

○短編小説（半紙總かな付廿四字六十行内）　○新躰詩（半紙一枚十句以内）

○短歌（半紙二ツ切一枚一首）　○圖畵（一寸の二寸判風俗景色）

○新題俳句（はがき判紙一枚一句）

▲各欄とも一人佳作一章宛投稿の事

但着色無用可成鳫皮紙を用ゆ

▲此外家庭教育に關する事項並に讀者の通信等何でも寄稿あれ

○論文○抒情文○叙事文○消息文○小説○圖畫、當選者へは左記の相當價格品選定の上贈與すべし

▲天賞　金壹圓五拾錢　▲地賞　金壹圓　▲人賞　金五拾錢

賞品規定

▲特別賞▼（正金を呈す）一等金三圓、二等金貳圓、三等金壹圓五拾錢

○新體詩○はがき文○短歌○俳句、當選者へ贈與品左の如し

▲天賞本誌三ヶ月分　▲地賞同二ヶ月分　▲人賞同一ヶ月分

▲特別賞▼（正金を呈す）一等金壹圓、二等金七拾錢、三等金五拾錢

毎回の本誌により當選者は贈品に差支へざる様前以て住所氏名を通知あれ○賞品は發表二ヶ月の後に故障なき者へ美麗なる名譽褒状を添へ贈呈すべし

（投稿〆切＝毎月十五日）

▲嚴守すべき投稿規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に渉るべからず、○用紙は規定の紙に限る○投書は一行廿四字詰に認むべし、但し句點も一字に數ふべし○投書には題の下には必らず本誌に倣ひ住所姓名を明記し、書體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は必ず別に認むべし○封筒には『女子文壇原稿』の文字を記すべし○投書の中には他の用事の文句を記すべからず○投書には各自句點を施すべし、圏點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○此規定に背く原稿は一切沒收す○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし○投書丈け取纒郵送するときは開封にして差出せば卅匁迄二錢にて事足れり

（最寄書店になくば直接發兌元へ注文を乞ふ）

定價

女子文壇（毎號水彩畫彩色畫寫眞口繪數葉挿入）毎月一日發行

一册（大百二十頁判）前金拾錢	定價郵税共一册金拾壹錢
六册（半ヶ年分）前金五拾七錢	定價郵税共六册金六拾三錢
十二册（一ヶ年分）前金壹圓八錢	定價郵税共十二册金壹圓廿錢
外國行郵税共拾四錢	

讀者心得

○本誌は前金の外送本不致候○代金過不足のなき様注意被下度候○領收書は一切差出さず候○御注文毎に何號より何册及御住所氏名等は詳細に御認め可被下候○郵券代用は必す定價の壹割増に願上候○御問合は返信料付に願上候▲御申越の號數賣切の時は近刊の分を以て送本可仕候▲缺號にならぬ法……前金拂込むに限る

廣告

六號ヨリ改正

種別	一頁（二十四字六十四行）	半頁（二十四字三十二行）	一行（五號字二十四字）
普通	金拾五圓	金八圓	金參拾錢
特別（表紙四面口繪對面）	金貳拾圓	半頁以下[illegible]御[illegible]申上候	○

〆切發行前十五日

▲廣告大取次

京橋區南佐柄木町二番地　日本廣告株式會社
神田區千代田町二番地　博報堂
京橋區八官町十八番地　廣告堂
神田區花房町九番地　富士原秀穗

明治三十八年九月廿八日印刷
明治三十八年十月一日發行

定價金拾錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發兌元　東京京橋區大鋸町十一番地　電話＝本局六〇七番　女子文壇社

特約發賣元
東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目廿六　東海堂
東京市神田區裏神保町一番地　上田屋書店
東京市京橋區鎗屋町十三番地　北隆館合資會社
東京市京橋區鎗屋町九番地　良明堂

（坪内製本）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

第壹巻第十號 女子文壇 明治三十八年十月一日發行（毎月一回一日）

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可



パール定價
大瓶金四拾錢
小瓶金貳拾五錢
（女子文壇の廣告により御注文の節は其旨書添へ願上候）

女子文壇 最廉無比 定價金拾錢 郵稅壹錢

（東京秀英舍印行）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN